

広島大学文学部紀要
第58巻特輯号2



アテナイ植民活動と種族イデオロギー

前野弘志

1998年12月

アテナイ植民活動と種族イデオロギー

前野弘志

目 次

序文	1～3
I. ペイシストラトスの時代 —アテナイ植民活動の二つの源流—	
1. アッティカの党派争い	3～5
2. エーゲ海北岸における植民	5
(1)ライケロス・ストリュモン植民	5～7
(2)ケルソネソス植民	7～10
(3)シゲイオン植民	10
(4)レムノス植民	10～13
3. アッティカ周辺における植民	13
(1)サラミス植民	13～14
(2)カルキス植民	15～16
4. ヘロドトスの「ペルシア戦争」	16～17
II. キモンの時代 —トラキア植民の奪還—	
1. デロス同盟	17～18
2. キモンとトゥキュディデス	18～19
(1)エイオン植民	20
a. 黄金の都市	20～22
b. パロス人青年トケスの墓碑	22～25
c. ミルティアデスのパロス遠征	25～26
d. 三体のヘルメス像	26～28
(2)スキュロス植民	28～29
a. スキュロスの海賊	29～30
b. テセウスの骨	30～33
(3)エンネアホドイ植民	33
a. タソス反乱	33～35

b. ケルソネソスの再征服	35
c. 10000人の都市	35～36

III. ペリクレスの時代 —アテナイ植民の最盛期—

1. キモンとペリクレス	36～38
2. 第一次ペロポネソス戦争	38
(1)ナウパクトス植民	38～40
(2)レムノス・イムプロス植民？	40～41
(3)ナクソス植民	41～42
(4)アンドロス植民	42
(5)エウボイア植民	42～44
(6)ヘスティアイア植民	44～45
(7)カルキス植民	45～46
(8)エレトリア植民	46～48
(9)ケルソネソス植民	48～49
(10)プレア植民	49～50
3. 三十年の平和	50
(1)トゥリオイ植民	50～51
(2)アムフィポリス植民	51～53
(3)シノペ植民	53～54
(4)アミソス植民	54
(5)アスタコス植民	54～55
4. 第二次ペロポネソス戦争	55
(1)アイギナ植民	55～56

IV. クレオンの時代 —植民者なき植民—

1. 疫病の大流行	57
2. ペリクレスからクレオンへ	58
3. 植民者なき植民	58～59

(1)ポティダイア植民	59～60
(2)ノティオン植民	60～62
(3)レスボス植民	63～66
(4)トロネ(植民)	66～67
(5)スキオネ植民	67～68
(6)メロス植民	68～69
4. アイゴスポタモイの海戦	69

V. ティモテオスの時代 一失地の回復一

1. ペロポネソス戦争の終結	69
(1)サラミスを除く全植民市の喪失	70～71
2. コリントス戦争	71～72
(1)レムノス・イムプロス・スキュロスの復帰	72～73
(2)レムノス・イムプロス・スキュロスの承認	73～75
3. 第二次アテナイ海上同盟	75～76
(1)エンクテーマタの放棄	76
(2)サモス植民	76～79
4. マケドニア王国の興隆	79
(1)アムフィポリスを巡るオリュントスとの戦争	79～80
(2)ポティダイア植民	81
(3)アムフィポリスを巡るフィリップスとの戦争	81～82
5. オドリュサイ王国の興亡	82～83
(1)ケルソネソスを巡るコトュスとの戦争	83～84
(2)ケルセブレプテスによるケルソネソスの譲渡	84
(3)ケルソネソス植民	84～86
6. カイロネイアの戦い	86

結論	86～87
----	-------

註	87～93
主要参考文献および略記号一覧	94～100
年表	101～103
索引	104～106

序 文

種族とは「一般には、同一の人種的・文化的系統に所属する人たち、すなわち言語・宗教・慣習・道徳を共通にし、同一の祖先に由来するという信念にもとづく集団」を指す。小稿で扱う種族とは、具体的には「イオニア人」「ドーリス人」「アイオリス人」「アカイア人」などを指す。古代ギリシア人とは、インド・ヨーロッパ語であるギリシア語を話し、共通の神話と祭礼を持つ人々のことである。彼らは自らを「ヘレネス」と呼び、ギリシア語を話さない人々を「バルバロイ」と称して区別していた。しかしギリシア語の中にはいくつかの主要な方言があり、ここで言う種族とは、専ら方言に従ったグループ分けのことである。

種族の誕生について神話は以下のように語る。ゼウスが墮落した青銅時代の人間に怒り、人類を大洪水で滅ぼそうとした時、プロメテウスとクリュメネの子デウカリオンは、父の忠告により箱船を建造して必需品を積み込み、妻のピュラとともに九日九夜水上を彷徨いパルナッソス山に流れ着いた。その他の人間は全て死んでしまった。船から出て避難の神ゼウスに犠牲を捧げると、神はヘルメスを遣わして何でも願いたいことを叶えようと言った。そこで彼は人間が生ずることを望んだ。すると神は母の骨を背後に投げよと命じた。母の骨とは石のことであると悟り、石を拾って頭ごしに投げた。すると、彼が投げた石は男に、彼女の投げた石は女になった。このようにして彼らからヘレン、アムピクテュオン、プロトゲネイアの三人の子が産まれた。ヘレンはオルセイスと結婚して、クストス、ドーロス、アイオロスを生み、クストスはクレウサと結婚して、アカイオスとイオンを生んだと云われている²⁾。つまり、ヘレンとはヘレネスの名祖であり、ドーロスはドーリス人の、アイオロスはアイオリス人の、アカイオスはアカイア人の、イオンはイオニア人の名祖である。

当時のアテナイ人がこれらの種族を強く意識していたことは間違いない。431年から404年までギリシアを二分して戦われたペロポネソス戦争の歴史を書いたトゥキディデスは、ヘレン以前の遙か昔にはヘレネスもバルバロイもなかったと言い、この大戦をアテナイを中心とするイオニア人とスパルタ人を中

心とするドーリス人の戦いとして描いている。実際に6世紀から既にアテナイは、イオニア人の母市であることを自認し、イオニア人の祭祀の中心地であるデロス島に対する影響力を強めようとしていた。ペルシア戦争前夜には、イオニア人の母市としてイオニア反乱への援軍派遣に応じ、戦後にはデロス島を本拠地とする同盟の盟主の地位に就いた。ペロポネソス戦争中には帝国祭儀を創設し、自らを母市、同盟加盟諸都市を植民市と見なす関係を取り結んでいた。

種族意識には三つの機能が備わっていたと考えられる。①同じイオニア人であるというアイデンティティーを持った者たちを統合する機能、②イオニア人でない者たちを異質な者として排除する機能、③それらを利用してイオニア人の母市としての対外活動を正当化する機能である。これら三つの機能をまとめて小稿では「種族イデオロギー」と呼ぶこととする。

アテナイ人は前古典期から古典期にかけて多数の植民市を建設した。その時にはもはや自由な大地は残されていなかった。従って、植民には常に武力による先住民の追放と土地奪取がともなっていた。この過酷な行為を直ちに「帝国主義」と呼べば、少々ナイーブとの誹りは免れないかも知れない。しかし土地を奪われた者の立場に立てば、学問的な帝国主義論争は無意味だろう。彼らはアテナイ人を憎んだに違いない。アテナイ人もそのことを十分に認識していたはずである。では、アテナイ人はその行為を、他人に対してであれ自分に対してであれ、どのように正当化しようとしたのだろうか。自己正当化なくして、このような行為は出来なかったはずである。

彼らが建設した植民市には、アポイキアとクレルーキアという二つのグループのあったことが知られている。しかしその分類基準が何であったかについては必ずしも明らかではない。この問題に関して従来から二つの説がある。①植民者が母市市民権を保持するか否かにあったとする説³⁾、②植民市がポリスを形成するか否かにあったとする説⁴⁾。筆者は以前この問題について、②の説を発展させつつ、この分類基準は種族イデオロギーと密接な関係があったのではないかという仮説を提示した。一口で言えば、アポイキアとは「同種族同居型植民」、クレルーキアとは「異種族追放型植民」のことで、それらは4世紀にはそれぞれエンクテーマタ、クテーマタと呼ばれたというものである⁵⁾。一般

に、後ろめたい行為にはそれを正当化するようなネーミングがなされるものである。そうであるならば、これら二つの名称の背景から植民活動に対してアテナイ人が抱いていた心的態度が読みとれるのではないだろうか。

小稿の目的は二つある。第一は、この仮説を検証することである。そのためにはまず、植民市建設に関するテキストに現れる先住民の種族と彼らに対する処置との関係が明らかにされなければならない。その際に注意すべき点は、種族には常に虚構性が伴うということである。つまり種族とは、自然にあるものではなく、一定の客観的状況を基にして何者かの努力によって創作されたものだということである。そこで次に、その時々のエリートによって種族がいかにして創り出されたかが明らかにされなければならない。この作業は容易ではないが、エリートの神話、伝承、宗教行為に着目することが肝要であろう。第二は、なぜ5世紀のアポイキア・クレルーキアという語が4世紀には使われなくなり、エンクテーマタ・クテーマタという語に取って代わられたのか、その理由を明らかにすることである。

小稿では、561/0年から338年までのアテナイ植民活動を考察の対象とする。その際に、便宜的に五つの時期に区分し、それぞれを当時の植民活動の主導者の名に因んで、I.ペイストラトスの時代、II.キモンの時代、III.ペリクレスの時代、IV.クレオンの時代、V.ティモテオスの時代とする。なお、小稿で用いる年号は、特別な指示がない限り紀元前を指す。

I. ペイストラトスの時代 —アテナイ植民活動の二つの源流—

1. アッティカの党派争い

アリストテレスの『アテナイ人の国制』によれば、初期アテナイの国制は、貴族と民衆の激しい抗争を基盤として、ドラコンの立法、ソロンの改革、三党派の争い、ペイストラトスの僭主政、クレイステネスの改革を経て、民主政へ移行したとされている (Aristot. *Ath. Pol.* 1-22)。また同書によれば、最初の民衆指導者はソロンであり、二番目がペイストラトス、三番目がクレイステネス、四番目がクサンティッポスで、一方、名士の指導者はミルティ

アデス、そしてその子キモンであったと述べている (Aristot. *Ath. Pol.* 28. 2)。つまり、独裁政治を樹立したペイストラトスもそれを打倒したクレイステネスも同じ範疇に入れられているのである。僭主政と民主政、民衆指導者と名士の指導者、これらはどのような関係にあったのだろうか。

民衆指導者も名士の指導者もアテナイの富裕な名門貴族であった。民衆指導者はもちろん民衆を積極的に仲間に取り込んでいったが、名士の指導者も民衆に惜しみなく施しをして彼らを自派に取り込もうとした (Aristot. *Ath. Pol.* 27.3)。民衆を自らの企てに動員しようとした点において、彼らは異なるものではなかったのである。異なるのは、彼らの政治的権威の拠り所であった。名士の指導者は伝統的なアレオス・パゴス評議会を拠り所としていたのに対して、民衆指導者はそれを無視したり、新しく設置された五百人評議会、民会、民衆法廷を拠り所としていたのである。

民衆指導者と名士の指導者との対立があったのと同時に、民衆指導者たちの内部でもヘゲモニーを巡る対立があった。594/3年のソロンの改革の後、アッティカには三つの党派が鼎立していた。メガクレスが率いる「海岸党」は、ヒュメツス山以東の半島部を拠点とし、中庸の農民や職人を集めて、中庸な政体を目指していた。リュクルゴスが率いる「平野党」は、ケフィソス川以西の肥沃な平野部を拠点とし、富裕な地主貴族を集め、寡頭政治を目指していた。ペイストラトスが率いる「山地党」は、アッティカ北東部の山地を拠点とし、貧困な小農や牧人を集め、最も民主的な政体を目指していた。

この中で最初に抜きん出たのはペイストラトスだった。彼は561/0年に最初の僭主政を樹立した。511/0年に彼の子ヒッピアスを追放して僭主政を打倒したのはメガクレスの子クレイステネスだった。彼は508/7年に改革を行い、アテナイ民主政治の基礎を確立した。このように、民衆指導者の内部では、ペイストラティダイとアルクメオニダイが対立軸を成していた。両派の違いは、前者がポリスの分裂のバランスに乗ってむしろ遠くの貴族を頼りとしたのに対して、後者はポリスの統合を計りむしろ近くの民衆を頼りとした点にある。このような彼らの戦略の違いは、当時のアテナイの植民活動にも影

響を与えた⁶⁾。

2. エーゲ海北岸における植民

ペイシストラトスは僭主政を三度樹立したが、その間に二度の追放を受け、二度の帰国を果たした⁷⁾。しかし彼の三回目の帰還の仕方は以前のものと全く異なっていた。その背景には、マケドニア地方のライケロスおよびトラキア地方のパンガイオンとの密接な関係があった。

ペイシストラトスは561/0年に第一回僭主政を樹立した。メガラとの戦争において名声を高めていた彼は、自らを傷つけて置きながら反対派にやられたと狂言を打ち、身辺警護のために「棍棒持ち」を得た後、クーデターを起こした(Hdt.1.59;Aristot.*Ath.Pol.*14.1)。しかし彼の政権が根付く前、恐らく556/5年頃メガクレスとリュクルゴスが協力して彼を追放した(Hdt.1.60;Aristot.*Ath.Pol.*14.3)。第二回僭主政は551/0年頃、ペイシストラトスとメガクレスの和解によって始まった。ペイシストラトスの追放後、メガクレスとリュクルゴスの間で再び党争が起こり、それに悩まされたメガクレスがペイシストラトスに自分の娘と僭主政を与える代わりに、帰国して自派を助けるよう要請した。これに応じたペイシストラトスは帰国に際して、ヒュエというトラキア出身の美しい大柄な女にアテナ女神の衣装を付けさせ、効果的なポーズを取らせて共に戦車に乗って町に駆け込み、触れ役たちにアテナ女神がペイシストラトスを連れ戻したのだという口上を述べさせた。アテナイ人はそれを見て平伏し、彼を迎え入れたと云われている(Hdt.1.60;Aristot.*Ath.Pol.*14.4)。

(1) ライケロス・パンガイオン植民

ペイシストラトスがメガクレスの娘と結婚して置きながら彼女をないがしろにしたことから和解が破れ、550/49年頃に彼は再び国外へ逃亡した(Hdt.1.61;Aristot.*Ath.Pol.*15.1)。彼ら一族はまずエレクトリアへ向かい、それからテルメ湾近くのライケロスに移り、その後さらに東部のパンガイオンへ進出した。帰国のための軍資金の一部は自国から一部はスト

リュモン河畔から入り、また彼に恩義を感じている者たちからも義援金を集めた。539/8年頃、十一年目にして再びエレトリアへ戻り、この時はじめて武力によって支配権を取り戻そうとした。彼は、テーベ人、ナクソス人リュグダミス、エレトリアの騎士たち、アルゴスの傭兵を引き連れて、アテナイへの帰国を果たした (Hdt.1.61-62,64;Aristot. *Ath. Pol.*15.2-3)。

テルメ湾奥の東側に位置するライケロスの近くにエケイドロスという名の河がある。その名の由来は次のようなものである。「マケドニアの河。以前はエドノスと呼ばれていた。エケイドロスは贈り物(ドロン)を持つ(エケイ)河の意義くと伝わるが、それは砂金を下流へ運んでくるためであって、地元の人々は毛を刈った山羊の毛皮を水中に浸して砂金を収集している。(Ethmologicum Magnum, s.v.,'Ἐχέϊδος)』⁸⁾。多分ペイシストラトスの最初の資金源は、ライケロス地方の砂金だったのである。彼がこの砂金をどのようにして経営したのかは判らないが、彼がこの情報をエレトリアから得たであろうことは間違いない。なぜならば、エレトリアは8世紀の半ばにテルメ湾の入り口から奥にかけて植民市を建設していたので、その地の事情に詳しくははずだからである⁹⁾。

ペイシストラトスがライケロスからパンガイオンに移った理由は判らない。パンガイオンはギリシア屈指の金山であった。ストリュモン河畔と海岸の間を東西に走る軍道沿いにある山で、その高みは島のように見えるらしい。伝説によれば、この山を最初に開発したのはフェニキア人カドモスということになっているが (Strab.14.680)、実際は現地のトラキア人であった¹⁰⁾。ストリュモン河畔の町エイオンには、ギリシア人としては7世紀後半から既にパロス人が植民しており、当地の金を入手して加工していたようである。パンガイオンの金もエケイドロスの金と同様に、鉱山採掘というよりは、山麓から吐き出されてくる砂金を河の流れや河床から採集するというものであった¹¹⁾。

ペイシストラトスの帰国を可能にしたもう一つの要因は、貴族同士の相互扶助ネットワークである。それを最もよく表しているのがナクソスの例だろう。リュグダミスは、多くの資金と軍隊を調達してペイシストラトス

の復帰を最も熱心に支援した。ペイシストラトスは自分の政権を樹立すると、今度はリュグダミスを助けて彼をナクソスの僭主の地位に就かせている(Hdt.1.64)。そうであるならば、トラキア人から資金援助を受けたペイシストラトスは、彼らに対する見返りとしてどのような援助をしたのだろうか。そのことを知るためには、ペイシストラトスの第一回僭主政樹立と同じ時期に建設されたケルソネソス植民を見なければならない。

(2) ケルソネソス植民

ケルソネソスは、トラキア南岸から南西に向かって腕のように突き出した大きな半島で、この半島の重要性は、それが交通の十字路に位置したごとと土地の肥沃さにある。そもそもそこにはトラキア人が住んでいたが、7世紀になると、レスボスからのアイオリス人がマドウトスとアロペコネソスとセストスに、ミレトスとクラゾメナイからのイオニア人がリムナイとカルディアに、テオスからのイオニア人がエライウスに植民した¹²⁾。半島において彼らはトラキア人と混在して住んでいた。4世紀はじめには半島に11か12のポリスが存在していたと伝えられている(Xen.Hell.3.2.10)。そこにはポリスの名が記されていないが、上記のもの以外にアピュドス、ケルソネソス・アパゴラス、カリポリス、クリトテ、パクテュエが同定されるだろう。半島に住む者たちは、一般には「ケルソネソス人」と呼ばれていたが、彼らの政治機構は統一的なものではなく、半島の個々の都市が独立したポリスを形成していた。

ケルソネソスの初代統治者はキュプセロスの子ミルティアデスであった。ヘロドトスはその経緯を詳しく述べている。「ケルソネソスにはトラキア人のドロニコイ人が住んでいた。このドロニコイ人はアプシントス人との戦争によって苦しめられていたので、戦局に関する神託を得るために首長たちをデルフォイに派遣した。巫女は、この神域から帰る途中に最初に自分たちを饗応に招いてくれる人物を都市建設者としてその地に連れて行けという神託を彼らに与えた。彼らは「聖なる道」をフォキスとポイオティアを通過して行ったが、誰も自分たちを饗応に招いてくれないので、アテナ

イに向かった。(省略)このミルティアデスが自分の家の戸口に座っていると、その国では見慣れない服を着て槍を持ったドロコイ人が通り過ぎるのを見て彼らに近づき、宿と饗応を申し出た。彼らは彼の申し出を受け饗応されると、例の神託のこと全てを彼に打ち明けて、神意に従うよう彼に懇願した。その言葉は、聞いたミルティアデスを直ちに説得した。というのは、彼はペイストラトスの支配に強い不満を持ち、国を出たいと願っていたからである。彼はすぐに、ドロコイ人が願ったことをすべきかどうかを尋ねるために、デルフォイに使節を派遣した。巫女がそうせよと命じたので、オリュンピア競技祭での四頭立て戦車競技の優勝者であるキュプセロスの子ミルティアデスは、その時アテナイ人の中でその一行に参加することを望む者全てを引き連れて、ドロコイ人たちと一緒に航行し、その地に住み着いた。そして連れていった者たちは彼を僭主に立てた(Hdt.6.34-36)。

この叙述に特徴的なのは、この都市建設に際しては「饗応」の申し出と受け入れという手続きがなされたことである。クセニア慣行は単なるサービスの申し出ではなく、相互扶助の同盟を意味する。従って、これに続く文章に見られるように、ミルティアデスとドロコイ人はギブ・アンド・テークの関係にあった。彼はまず、半島の頸部を横断する大防壁を建設し、アプシントス人の侵入を防いだ(Hdt.6.36)。アプシントス人とは、ドロコイ人と同じトラキアの一部族であるが、彼らはアイノスの東の海岸地帯に住み、しばしば半島内に侵入していた好戦的な部族であった¹³⁾。次にラムプサコス人との戦争を行った(Hdt.6.37)。ラムプサコス人は、半島の対岸にあるギリシア人ポリスの住民で、種族的にはアテナイ人と同じイオニア人であった¹⁴⁾。

実際ケルソネソスは危険な場所であった。その後キュプセロスの子ミルティアデスは、原因は判らないが、子を残さずに死んだ。彼の権力と財産を継いだのは、異父兄弟であるキモンの子のステサゴラスであった。彼はアプシントス人との戦争の最中に、プリュタネイオンで暗殺された。その次の後継者は、キモンの子ミルティアデスであった。彼はペイストラティ

ダイによって三段櫓船と共に半島に派遣された。到着すると、先の僭主の葬儀を行い、それに参列した各部族の首長たちを突然逮捕し、500人の傭兵隊を養ってケルソネソスを統治した(Hdt.6.39)。このことから、半島内の諸部族の中でも反フィライダイ派が存在したこと、それをペイシストラティダイもミルティアデスも恐れ、反抗を武力によって押さえようとしたことが窺える。

しかしミルティアデスは弱腰であった。495年にスキタイ人が半島に侵入した時、彼は踏み止まってそれを防ごうとしないばかりか、スキタイ人が撤退するまでケルソネソスから逃亡し、ドロニコイ人によって連れ戻されるという失態を見せた(Hdt.6.40)。また493年にフェニキア艦隊が半島に近づいてきた時、彼はあるだけの財産を五隻の三段櫓船に満載してアテナイへ遁走した(Hdt.6.41)。この時、ミルティアデスの一族のみならず、彼らと共に移住した植民者たちの多くも引き揚げたと考えられる。単純に一隻の三段櫓船に定員の200人が乗り込んだとすれば、五隻で1000人となり当時の植民者の数としては妥当なものとなろう。

では、このように危険な任務の見返りとは一体何だったのだろうか。明記されていないが、キモンの子ミルティアデスがトラキア人の王オロロスの娘ヘゲシピュレを娶ったという記述(Hdt.6.39)は、その回答を示唆している。オロロスとはタソス島の対岸に位置するトラキア地方に住むサイオイ人の王であった。そしてこの地方は金鉱山に恵まれており、この結婚以後、フィライダイはその権益を持つようになった。最初にミルティアデスが半島に赴いたのは561/0年頃で、ペイストラトスが最初の僭主政を樹立した時と一致する。ヘロドトスによれば、彼はペイストラトスの独裁政治に不満を持っていたとしているが、実際にはペイストラトスの命によって派遣されたと見るのが通説である¹⁵⁾。ペイストラトスがトラキアへ移住するのは、第三回僭主政樹立の前であるが、第二回僭主政樹立の時にトラキア出身のヒュエという女性をアテナ女神に扮装させたというエピソードは、彼がその時から既にトラキアと関係を持っていたことを示唆する。そうだとすれば、ペイストラトスに対するトラキア人からの資金提

供は、フライダイを通じてのケルソネソス半島防衛の見返りだったのでないだろうか。

(3) シゲイオン植民

ケルソネソスの対岸にあるシゲイオンは、トロイア戦争の舞台となったイリオンの地に位置するアイオリス人の都市である¹⁶⁾。530年頃ペイシストラトスはシゲイオンを武力で奪い、それをアルゴス貴族の娘ティモナッサから生まれた息子ヘゲシストラトスに与えて、彼を当地の僭主に立てた¹⁷⁾。しかしその後も紛争は絶えず、ミュティレネ人はアキレイオンを、アテナイ人はシゲイオンを拠点として、長期に渡って戦争した。ミュティレネ人はシゲイオンの返還を要求したが、アテナイ人は「ヘレネの誘拐に対する復讐のためにメネラオスに協力した自分たちや他のギリシア人たち以上に、アイオリス人がそのイリオンの地域の権利を持つはずがない」と言って、それを認めなかったと云われている (Hdt.5.94)。古代ギリシア人にとって神話は歴史と同じであり、神話はまた種族の記憶と結びついたものでもあった。

シゲイオンがケルソネソス防衛と関係があったかどうかは判らない。ただ言えることは、ケルソネソス同様シゲイオンも、ペイシストラトスの息のかかった者に統治させていたということである。510/9年ペイシストラトス一族の僭主政が崩壊し、アッティカを退去するよう命じられた時、ヒッピアスを頭とする一族はシゲイオンへ移住していった (Hdt.5.65)。それ以後シゲイオンはペイシストラティダイの拠点となり、次第にアテナイと疎遠になっていった。

(4) レムノス植民

キモンの子ミルティアデスは、アテナイに遁走する以前、恐らく510年から505年頃¹⁸⁾、ケルソネソスからその沖合にあるレムノス島を征服し、アテナイに植民市として与えた。また、史料によって言及はされていないが、この時に隣のイムブロス島も植民されたと考えられている¹⁹⁾。しかしこれ

らがケルソネソス防衛と関係があったかどうかは判らない。恐らくなかっただろう。レムノスはエーゲ海北部に浮かぶ大きな肥沃な島で、島の住民はペラスゴイ人あるいはテュレニア人とされる。ペラスゴイ人はギリシアの先住民で、非ギリシア語を話すバルバロイである。テュレニア人は元は小アジアに住んでいたエトルスキ人の一派である。イムブロスの住民もまたペラスゴイ人であった。

この島の征服と植民の正当性について、ヘロドトスは長々と述べている。そこには「歴史」執筆当時のアテナイのセスノセントリズムが色濃く反映されている。彼の記述は、レムノスの住民であるペラスゴイ人がアッティカから追放されたことから始まる。その追放が正当な行為であったか否かについて、二つの意見が紹介される。それを不当とする見解はヘカタイオスのもので、それによると、アテナイ人がアクロポリスの周囲に防壁を建設した時、ペラスゴイ人を雇い、その賃金としてヒュメツトス山麓の土地を与えたが、それまで取るに足らないと思われていたその土地が彼らによって立派に開墾されたのを見て妬ましくなり、アテナイ人はペラスゴイ人を追い出したという。一方、それを正当とする見解はアテナイ人自身のもので、それによるとペラスゴイ人は、エンネアクルノスと呼ばれる泉に水汲みに来るアテナイ人の婦女子をしばしば襲っていたが、それに飽きたらず、ついにはアテナイを襲う陰謀を企てたという。その陰謀は未然に漏れたために事なきを得たのであったが、その時アテナイ人は「彼らより優れた人間であったので、彼らが陰謀を企てているところを押さえた時に、ペラスゴイ人を皆殺しにすることが出来たのにそれを望まず、その土地から立ち退くことを命じた(Hdt.6.137)」。この最後の言葉は、裏を返せば、皆殺しは野蛮人のすることであると言っているのと同じである。

追放されたペラスゴイ人は様々な所に散っていったが、レムノスはその一つであった。レムノスのペラスゴイ人はアテナイ人に復讐するためにブラウロンでアルテミスの祭典が行われる時、待ち伏せしてアテナイ人の女たちを誘拐し、島に連れ戻って妾とした。しかし「その女たちが子供をたくさん産むに連れて、彼女たちはその子供たちにアッティカの言葉と習慣

を教えた。子供たちは、ペラスゴイ人の女たちが産んだ子供たちと交わろうとせず、もしアテナイ人の子供の誰かがペラスゴイ人の子供の誰かに殴られた時には、全員が救援に走り、互いに手助けをした。アテナイ人の子供たちはペラスゴイ人の子供たちを支配することを正当なことであると考え、実際に大いに支配するようになっていた」。この文章は、ヘロドトスの時代の現実のアテナイ帝国支配を子供の世界に投影しているように思われる。そこには、アテナイ人の民族的な優秀さと結束の強さが強調され、優秀な民族による劣性な民族の支配の正当化が窺える。さらに続けて、このような事態を重く見たペラスゴイ人は協議し「そこで彼らは、アッティカの女から生まれた子供たちを殺すことを決議した。このことを実行した後、母親たちも皆殺しにした」。そしてそれ以来「ギリシア中で惨たらしい行為は皆「レムノ的」と呼ばれるようになった (Hdt.6.138)」。アテナイ人とペラスゴイ人の対比は、優秀と野蛮の対比と同一視されている。

残虐な行為をしたペラスゴイ人の所ではその後、穀物も実らず家畜も女を子を産まなくなった。「飢饉と不妊に悩まされたので、デルフォイに使節を派遣し、この災厄から解放される方法を尋ねたところ、巫女はアテナイ自身が望むようにアテナイ人に償いをせよと命じた (Hdt.6.139)」。ペラスゴイ人はアテナイに赴き、償いを申し出ると、アテナイ人は彼らの住んでいる島を引き渡すよう命じた。そこでペラスゴイ人は、北風に吹かれた船が一日であなた方の国から私たちの国に到着した時には、島を引き渡しましょうと言った。なぜならば、アッティカはレムノスの遙か南に位置していたので、そのようなことが起こるはずがないと確信していたからである。

「その時はそれで済んだ。しかしそれから非常に長い年月が経ち、ケルソネソスがアテナイ人の支配するところとなった時、キモンの子ミルティアデスは、北西の季節風が吹く頃、ケルソネソスのエライウスからレムノスに到達し、島から出ていくようにペラスゴイ人に勧告し、ペラスゴイ人が決して成就しないと思っていた例の神託を彼らに思い出させた。ヘファイステア人は従ったが、ミュリナ人はケルソネソスがアッティカであるとは認めなかったため、包囲攻撃され、ついに力づくで意に従わされた。

このようにして、レムノスをアテナイ人とミルティアデスが征服したのである(Hdt.6.140)」。以上の説明は、いかにもよく出来た作り話らしい感じがする。

一方ディオドロスは、簡略ではあるがより現実味のある記述を伝えている。「テュレニア人は、ペルシアの脅威によってレムノスを立ち去ろうとしている時、ある神託に従ってそうするのだと言って、島をミルティアデスに引き渡した。これはヘルモンがテュレニア人の首長であった時のことなので、そのような好意はその時以来「ヘルモンの」と呼ばれるようになった(Diod.10.19.6)」。レムノスは512年にペルシア人オタネスによって征服されて以来、480年までペルシアの支配下にあった²⁰⁾。従って先住民が「ペルシアの脅威によって」島を立ち去ったというのは頷ける。実際にその期に乗じてミルティアデスが占領したのかも知れない。

3. アッティカ周辺における植民

7世紀までにアッティカ地方全域は都市アテナイによって政治的に統合され、ポリスとしてのアテナイの枠組みが出来上がっていた。しかしその後も、サラミスを巡って西隣のメガラと、オロピアを巡って北隣のポイオティアと長年に渡って領土問題が争われた。カルキスはオロピアの対岸に位置する。

一方、党派争いにおいて、遠方の有力者と提携出来ないエリートは、自分の周りにいる民衆に目を向けた。エリートが民衆を見方に付けるためには、彼らに土地を与えて恩を売り、彼らを動員可能な重装歩兵とすることが必要であった。その場合、彼らを自分の近くに配置しなければ意味がない。アッティカ周辺における植民は、領土紛争とヘゲモニー争いの接点に位置づけられる。

(1) サラミス植民

アテナイは既に7世紀からサラミスの領有を巡ってメガラとしばしば戦争し、島を取ったり取られたりしていた。610年頃ソロンの指揮のもとでアテナイは島を取り戻したと云われている(Plut.Sol.8.1-3;Diog.Laert.1.

46-47)。しかしその後もサラミスを巡る抗争は続いた。そこで両者はスパルタ人に調停を依頼し、その結果アテナイが島を領有することとなった。伝承ではソロンが交渉に当たったとされているが、実際には510年頃のことである²¹⁾。彼はアテナイによるサラミス領有の正当性の根拠として以下の点を主張したと云われている。①ホメロスの軍船表にある「アイアスはサラミスから12隻の軍船を率い、導いてアテナイ人の戦列が陣取っている所に配置した」という件、②フィライオスとエウリュサケスがアテナイ市民権と引き替えにサラミスを明け渡したという言い伝え、③サラミスに見られる葬制がアッティカ式であること、④サラミスはイオニアであるとのピュティアの神託。

最後の論拠は踏み込んで考える必要がある。ソロンの時代の島の住民はメガラ人で、彼らはドーリス人に属していた。メガラ地方がドーリス化したのは、ヘラクレスの子孫たちが帰還した後のこととされる(Strab.9.393; Paus.1.39.4-5)。しかし別の伝承によれば、そもそもメガラ地方はアッティカの一部であり、そこにはイオニア人が住んでいたと云われている。ストラボン『アッティカ地方誌』をまとめた著者たちの様々な見解を整理し、その共通認識としてパンディオンの四人の子供たち、即ちアイゲイス、リュコス、パラス、ニソスによるアッティカの四分割の伝承を伝えている(Strab.9.1.6-7)。それによると、パンディオンはアッティカの王であったが、彼の兄弟たちによって王位を奪われ、メガラ王ピュラスのところに身を寄せて、その娘を妻とした。ピュラス自身が退位せざるを得なくなった時、パンディオンがメガラ王となった。そしてアイゲウスが父の王位を回復してアッティカ王となった折り、リュコスはエウボイアを望む地方を、パラスは南方を、ニソスはメガラ地方を割り当てられた。彼はそこに都市を建設し、自分の名に因んでニサイアと名付けたと云われている²²⁾。サラミス領有は種族アイデンティティーが認められる最初の例である²³⁾。スパルタの調停の直後510年から500年頃、アテナイはサラミスにクレールーコイを派遣し、それ以後サラミスは一貫してアテナイの領土となった²⁴⁾。

(2) カルキス植民

510/9年に僭主ヒッピアスが追放された後、アテナイではクレイステネスとイサゴラスとの間で政権争いが起こった。508年クレイステネスは民衆を見方に引き入れようと部族改革を行った。一方イサゴラスは同年アルコンに就任し、スパルタ王クレオメネスに救援を要請した。506年スパルタ軍がアテナイに進駐して、クレイステネスと「穢れ人」700家族を追放した。更に評議會を廃止して、イサゴラスと300人に政権を委譲しようとした時、評議會の反対に会い、スパルタ人は国外退去し、イサゴラス派は投獄された。この時クレイステネスと「穢れ人」は帰国した。同年クレオメネスは、アテナイに復讐しイサゴラスを僭主にするためにペロポネソス全土から軍を召集した。ペロポネソス軍はエレウシスに侵入し、ボイオティア軍はアッティカ国境を占領し、カルキス軍もアッティカ各地を荒らした。アテナイ軍はまずエレウシスのペロポネソス軍に対抗したが、コリントス軍が撤退するとスパルタのもう一人の王デマラトスも撤退した。この様子を見て他の同盟軍も撤退した (Hdt.5.66-75)。

「それからその遠征軍が無様に解体したので、その時アテナイ人は復讐することを欲し、まずカルキス人に対して遠征を行った。一方ボイオティア人はカルキス人を救援するためにエウリポスへ向かった。その救援軍を見たアテナイ人は、カルキス人よりもボイオティア人を先に攻撃する方がよいと思った。そこでボイオティア人に当たり、アテナイ人は大きな戦果を挙げ、非常に多くの者を殺し、彼らの内の700人を捕虜とした。その同じ日にアテナイ人はエウボイアへ渡り、今度はカルキス人と交戦し、勝利して4000人のクレールーコイをヒッポボタイの領地に残した。ヒッポボタイとはカルキス人の富裕者の呼称である。彼らの内で捕虜とした限りの者たちを、既に捕虜にされていたボイオティア人と一緒に足枷を掛けて監禁した。しかし後に一人2ムナの身代金を取って解放した (Hdt.5.77)」。

アイリアノスは別な典拠に依拠した記録を残している。「アテナイ人はカルキス人に勝利して、彼らの土地を2000のクレーロスに分けた。それはヒッポボトスと呼ばれる領地で、レラントンという名の領域にあり、アテナ女

神に神域を奉納し、残りをストア・バシレイオスの前に立っている賃貸料の取り決めを記した碑文に従って賃貸した。また彼らは捕虜に足枷を掛けたが、それでもカルキス人に対する怒りを収めなかった(Aelian. *V.H.* 6. 1)」。これら二つの史料では植民者の数が違っており、4000か2000か判然としない²⁵⁾。

カルキス植民については、回りくどい正当化はされていない。それは単刀直入に「怒り」であった。ケルソネソス植民やレムノス植民のような長々しい説明よりも説得力がある。その理由は恐らく、カルキスがイオニア人であり、アテナイから見れば自分の植民市に当たるにも拘わらず、母市に対して侵略したということであろう。植民市の母市に対する謀反は神意に悖ることとされていた(Hdt. 3.19)。この植民団は490年のペルシア軍の侵略の際にアテナイに撤退した(Hdt. 6.100-101)。

4. ヘロドトスの「ペルシア戦争」

この時、それまでに獲得されたアテナイの植民市は、サラミスを除いて全て失われたことになる。ところで、本章で扱った植民に関する情報の多くはヘロドトスの著述から得られるのであるが、これらの事件は彼の執筆時期から見て50年から100年も過去のことであった。しかしペルシア戦争の記憶は彼にとって現代史的な意味があった。

ハリカルナソス出身のヘロドトスは、諸国を漫遊した後、445/4年アテナイを訪れた。ソフォクレス、ペリクレスらと親好を結び、自分の書いた『歴史』を読んで報奨金を受け取ったと云われている²⁶⁾。それは、本章で扱ったケルソネソスとカルキス(レムノスも?)がペリクレスによって再植民されて間もない頃であった。『歴史』が出版されたのは425年より少し前のことであるらしいが、それ以前から彼の作品は人々によく知られていた²⁷⁾。『歴史』はエンターテインメントであり、よく語られよく読まれたものと思われる。それ故に民衆に与えた影響も大きかっただろう。

彼はペリクレスの礼賛者であった。彼が『歴史』でアテナイの威信を高め、ペリクレスの政策を支持したならば、彼の描くアテナイ植民史は、彼らにとつ

での現代を過去に投影し、その正当化を狙ったものと言えるだろう。

II. キモンの時代 —トラキア植民の奪還—

1. デロス同盟

478/7年冬に結成されたデロス同盟の初期の軍事行動は、ミルティアデスの子キモンによって遂行された。「まず初めに、ミルティアデスの子キモンが將軍の時、メディア人によって占領されていたストリュモン河畔のエイオンを包囲攻撃によって奪い、住民を奴隷に売った。次にドロベス人が住んでいたエーゲ海のスキュロス島を奪い、住民を奴隷に売って彼ら自身を植民した。また彼らは、エウポイアの諸都市のうちカリュストス人に対してのみ戦争を起こし、後になって協定を結んだ。またナクソスが離反し、その後、戦争状態に陥ったが、包囲攻撃によってそれを鎮圧した。後には多くの都市がそれぞれの事情で隷属化させられることとなったが、それらのうちでこの都市は、協定に違反して隷属化させられた最初の同盟都市であった (Thuc.1.98.1-4)」。

この殆ど列挙に近い叙述から、それぞれの事件に関する詳しい情報を得ることは不可能である。しかしこれら四つの出来事の流れと選択からは、著者の明確な意図が読み取れる。これらの事件は、同盟の行動が当初の目的から逸れていく過程を四つの段階として示しているのである。第一段階は477年秋から476/5年にかけてのエイオン攻略で、これは残留するペルシア軍に対する追討戦であり、それゆえに同盟結成の目的に全く適った行動の例である。第二段階は476/5年のスキュロス植民で、これはペルシア戦争とは関係ないが、有害な非ギリシア人の追放であり、同盟にとっては有益な行動の例である。第三段階は475年から471年にかけてのカリュストスとの戦争で、これは恐らく同盟加入を強制された最初のギリシア人都市の例であったと考えられる。第四段階は470年のナクソスの離反と鎮圧で、これは離反して隷属化させられた最初のギリシア人同盟都市の例である²⁸⁾。このように、同盟の性格は結成から約十年の内に徐々に変化していったとするのがトゥッキディデスの見解で

ある。

彼の同盟結成の目的に関して、彼は次のように述べる。「パウサニアスに対する憎悪が原因となって、このような仕方でも同盟諸都市の自由意思に基づく指導権を引き受けたアテナイは、バルバロスに対してどの都市が資金をどの都市が軍船を醸出すべきかを決定したが、その表向きの理由は、王の土地を略奪することによって彼らが受けた被害の復讐をすることであった。(Thuc. 1.96.1-2)」。アテナイ人が「指導権を引き受けた」とする記述は、覇権獲得に積極的であったとするヘロドトスやアリストテレスの記述と矛盾しており、同盟結成の事情に関するトゥキュディデスの立場を示す重要な箇所であるが²⁹⁾、ここでは専ら同盟結成の目的に注目したい。彼は「表向きの理由」としてペルシアに対する復讐を挙げている。では一体、真の理由とは何だったのだろうか。またなぜ表向きの理由が必要だったのだろうか。

2. キモンとトゥキュディデス

キモンによる初期の同盟軍の軍事行動は、二回のトラキア遠征に収斂される。第一ラウンドはストリュモン河畔のエイオン攻略とそれに纏わる諸事件であり、第二ラウンドはエイオンの目と鼻の先にあるタソスの反乱鎮圧とそれに纏わる諸事件である。確かに、同盟結成当時にはまだペルシア軍はトラキアに残留していたので、初期の軍事行動がトラキアに集中しても不思議ではない。しかし理由はそれだけではなさそうである。そもそもキモンとトラキアとの間には非常に密接な関係があったのである。

キモンはフィライダイの人間であった。彼の父ミルティアデスは、既に述べたように、ケルソネソスの三代目の僭主であり、キモン自身は510年頃にケルソネソスの地で生まれたと思われる。母はミルティアデスが当地に滞在中、515年頃に娶ったオロロスの娘ヘゲシピュレで、オロロスとはタソス島の対岸のトラキアに住むサパイオイ人の王であった。従って彼にはトラキア王家の血が流れていることになる。イオニア反乱鎮圧の波にケルソネソスが飲み込まれた493年に、彼の一族は五隻の船に財産を積み込んで、フェニキア艦隊の追跡を逃れて命からがらアテナイへ逃げ戻った。その時キモンは17歳くらいで

あつたらう。キモンにとってトラキアは故郷であり、もしかしたら祖国アテナイによりも強い憧憬の念を抱いていたのかも知れない。母方の血縁関係から、キモンはトラキアにある鉱山の権益を持っていた³⁰⁾。そうであつてみれば、彼がまずトラキア方面での作戦に着手し、それに熱心であつたことはよく理解できる。

トゥキュディデスの生涯については、確実なことは判らないが、伝承によれば³¹⁾、彼もまたフィライダイに繋がる者であつたらしい。彼の父の名もオロロスと言ひ、トラキア王オロロスに由来すると云う。またトゥキュディデスもトラキアにおける鉱山の権益を持っていた。このことは彼自身が著書の中で述べており(Thuc.4.105.1)³²⁾、実際に彼は422年にトラキアを巡るブラシダスとの戦闘を指揮し、その失敗の責任をとつて追放刑に処された。その期間中に彼はトラキアのスカブテヒュレに住み、そこで著述活動に没頭したとも云われている。つまり、同盟初期に活躍した將軍キモンと彼の行動を書き留めたトゥキュディデスとは親戚どうしだったのである³³⁾。

同盟結成の目的が本質的に対ペルシア戦であつたことには疑問の余地がない。しかし、ペイシストラティダイやフィライダイは、6世紀から既にトラキアにおける鉱山の権益を保持し、そこから莫大な資金を得ていた。しかし彼らはペルシア戦争以来それを失つてしまつていた。この事実からすれば、デロス同盟が結成されるや否や、フィライダイのキモンがトラキア遠征を行ったことの背景に、一族の富の源泉と自分の故郷を取り戻そうという彼の強い意志が働いていたと見ても的外れではあるまい。トゥキュディデスにとって『戦史』の当該箇所の記述内容は、いわば身内の所業であつたし、彼自身もまた当事者の一人であつた。同盟結成の裏の理由とは、トラキアにおける鉱山の権益を取り戻すというフィライダイの個人的な思惑のことではなかつたのだろうか。そうすると、その動機はペルシア戦争以前に遡りうるものであり、同盟の目的が徐々に変化したとか、指導権を引き受けたという彼の申し立てと食い違つてくる。このことは、同盟初期の植民活動を詳しく見ることによってより鮮明になるだらう。

(1) エイオン植民

トゥキュディデスによって同盟最初の軍事行動として伝えられているのがエイオン攻略である。エイオンはトラキア地方を流れるストリュモン河畔の河口、海から見て右側に位置する都市で、その河の上流には後に建設されるアムフィポリス(=エンネアホドイ)から25st(約4.5km)の距離にあり、アムフィポリス建設後はその港としての機能を果たしていた³⁴⁾。

a. 黄金の都市

480年にクセルクセスがギリシアに侵入した際、ヘブロス河畔のドリスコスとストリュモン河畔のエイオンなどが前線基地として整備され、そこに大規模な食糧倉庫が設置された。これらはペルシアのギリシア戦略にとって不可欠な拠点であった。479年のプラタイアの戦いに敗れて、大方のペルシア軍がギリシアから撤退した後も、これらの地にはペルシア軍が残留し、そこを防備していた。ドリスコスの将軍はマスカメス、エイオンの将軍はボゲスであった。

エイオン攻略の開始は477年秋、陥落は476年の秋のことであるから、一年ほど包囲攻撃を受けたことになる。エイオン陥落の後、海岸沿いのギリシア諸都市はギリシア側に寝返ったが、ドリスコスは何度も攻撃を受けながらも、結局は陥落しなかった。それゆえにこれらの地を死守したマスカメスとボゲスの子孫は、ペルシア王によって厚遇されたと云う。エイオン植民が行われたのは、475年の春のことであったと考えられるが、その規模については判らない。ヘロドトスは、ボゲスの壮絶な戦死の模様を生々しく描写している。「クセルクセス王は、ギリシア人によって追放された者たちのうちの誰一人として立派な人物であると評価しなかったが、エイオンから追放されたボゲスだけは例外であった。王はこの人物を賞賛して止まなかったし、また生き残ってペルシアにいる彼の子供たちにも非常な名誉を与えたのであった。なぜならば、ボゲスは大きな賞賛に値する人物だったからである。彼はアテナイ人とミルティアデスの子キモンによって包囲攻撃された時、休戦協定を結んで脱出して、

アジアへ帰国することも出来たのであったが、死を恐れて生き恥をさらしたと王に思われぬようにそれを望まず、死ぬまで持ちこたえたのであった。城内にもはや食料が尽きた時、薪を高く積み上げて、子供たちや妻、妾たち、そして奴隷たちの喉を斬り、それから彼らを火の中に投げ込み、その後その都市で採れた全ての金と銀を城壁からストリュモン河へ蒔いた。これらのことをなし終えてから、自ら火中に飛び込んだのであった。このようなわけで、彼は今でもなお、ペルシア人によって正当に賞賛されているのである (Hdt.7.107)」。この記述で目を引くのは、最期を迎えたボゲスが「その都市で採れた全ての金と銀を城壁からストリュモン河へ蒔いた」という件である。エイオンはパンガイオンの麓に位置していた。

プルタルコスも、ヘロドトスほど精彩はないがエイオン陥落を伝え、新たな情報を付け加えている。「同盟諸都市はすでに彼に従っていたので、キモンは將軍としてトラキアへ航行し、王の親族で評判の高いペルシア人がストリュモン河畔にある都市エイオンを占領して、その近辺のギリシア人を苦しめているということを聞いた。まず最初に、そのペルシア人を戦闘によって打ち破り、都市に閉じ込めた。その後、ストリュモン河の向こうのトラキア人を追放した。というのは、そこから彼らはペルシア人に定期的に食糧を送っていたからである。その全ての土地を監視下において、籠城した敵を非常な苦しみに陥れたので、王の將軍であるプテスはついに断念し、都市に火を放ち、友人や財産とともに滅びてしまった。このようにしてその都市を奪ったが、他に言うに値する戦利品を手に入れることが出来なかった。大抵のものはバルパロイとともに灰塵に帰ってしまったからである。しかし、その土地は非常に肥沃であり、また美しかったので、植民の目的でアテナイ人に与えた (Plut. Cim.7.1-3)」。

將軍の名が異なっているが、この点は重要ではない。混同した理由は分からないが、両者は同一人物であろう。「他に言うに値する戦利品を手に入れることが出来なかった」というプルタルコスの言葉は、キモンが

率いるギリシア軍の目当てもまた金であったことを匂わせる。しかし彼らが入城した時には、金も銀もすでにそこにはなかった。トゥキュデデスは植民に言及していないが、キモンは兵士たちを落胆させないように、彼らにその土地を与えて入植させたことがここから知られる。もう一つ注目すべきは、駐留していたペルシア軍がストリュモン河上流のトラキア人から食糧供給を受けていたということである。エイオンからペルシア軍を追放した後も、その周辺におけるトラキア人との紛争は終わらなかった。長いタイムスパンで見れば、エイオン攻略は、単なる残留ペルシア軍の追討戦とは思えない。その真の意味を知るためには、ペルシア戦争以前の事情を探る必要がある。

b. パロス人青年トケスの墓碑

ギリシア人がパンガイオンを開発するようになったのは、恐らく7世紀頃からで、それはアテナイ人ではなくタソス人であった。タソスはパロスの植民市であったので、それはパロス人であったと言っても同じことである。エイオン攻略の前史として、エイオンとタソスないしパロスの関係を調べなければならない。

パロスはキュクラデス諸島にあるイオニア人の島で、土地は痩せているが、大理石に恵まれていたため、古典期においては大理石の産地として有名になり、富を蓄積したが、アルカイック期において既に「当時キュクラデス諸島のなかで最も富んだ最も偉大な島」と呼ばれていた³⁵⁾。詩人アルキロコス、7世紀の中頃に活躍した上層のパロス人であり、パロス人にとっては単なる詩人ではなく、愛国的な戦士であり、崇拜の対象でもあった。彼はタソス島への植民に参加し、彼の詩の大半はこの植民と関係があるらしい。

3世紀頃にデメアスという人物がパロスの年代記のようなものを書き、その中でアルキロコスの業績にも言及しているが、1世紀頃にソステネスという人物がその書物からの抜粋を石碑に刻み、アルキロケイオンに奉納した。その碑文が状態は悪いが現存している。そこにはタソス

植民に関するアルキロコスの詩が引用されており、6世紀中頃のパロス、タソス、トラキアの関係を暗示している。「ペイストラトスの息子が人々を(率いて)、彼は笛と豎琴をタソスへもたらした、犬のトラキア人どもに贈り物として純金を携えて。しかし自分の利益によって、共通の災難を招いた (FGH502.45-52)」。ペイストラトスはまったくの無名の人物である。これは最初のタソス植民から半世紀程後の時代のことで、タソスには母市パロスから何度にも渡って植民者が送られたものと思われる。「笛と豎琴」は槍と盾ではなく平和的な植民を暗示するものであろう。あるいは豎琴はアルキロコスを象徴するものかも知れない。興味深いのは「純金」を携えてという箇所である。このことから、純金がパロスからタソスのトラキア人の元へもたらされていたことが分かる³⁶⁾。

ところがパロスは金を産出しない。そのパロスから金の産地として有名なタソスへ純金を贈るとは、非常に奇妙なことである。この謎を解く決定的な証拠はなく、ただ推測するのみであるが、もしかしたら、トラキア人の顧客に依頼されて、パロス人が鉱石を精練・加工し、完成品として彼らに納品し、その手数料として相当分の金地金を差し引いて受け取っていたのかも知れない。あるいは、タソスで産出した鉱石を精練・加工したものが母市パロスに蓄えられており、それをパロス人がトラキア人との友好関係を維持するために彼らに定期的に贈っていたのかも知れない³⁷⁾。いずれにせよこの碑文から、6世紀中頃において、パロス、タソス、トラキアが金によって結び付けられていたことが窺い知れる。

タソスは7世紀半ばの直前にパロス人によって植民されたが、パロス人はさらにタソスを足掛りとして7世紀後半にはその島の対岸にあるトラキア沿岸一帯における領土を獲得した。タソスの対岸領は、西はストリュモン河口東側のガレブソスから東はネストス河畔、さらにアブデラとマロネイアの中間のストリュメまで広がっていたと思われる。つまり、西はガレブソス止りで、エイオンには及んでいないことになる。しかし、対岸領獲得運動を推進したパロスがトラキアで最も重要なエイオンに手を付けなかったとは考えられない³⁸⁾。

事実、パロスとエイオンが500年頃に直接的に密接な関係にあったことが、アムフィポリスで発見された碑文から明らかとなった。それは、市壁の門に組み込まれていたトケスという名の青年のための武勇の記念墓の台座で、もともとはその上に若いトケスの騎馬像が載っていたものと思われる。碑文はこの台座に刻まれており、文字の形態から、これが500年前後のものであることは明らかである。「愛しきエイオンがために(戦いて、若き命を失いたるがゆえに)パロス人らが建立せし(SEG XXVII (1977) No.249)」³⁹⁾。トケスはエイオンのためにアムフィポリス周辺での戦闘に参加して、戦死したのだろう。その犠牲を称えて、祖国のパロス人が彼のために記念碑を建立したと考えられる。この戦闘が具体的にどのようなものであったのかは不明であるが、少なくとも、この碑文から当時のパロスとエイオンの間に密接な関係があったこと、およびパロスがエイオンのみならずアムフィポリスにまで勢力を延ばしていたことを窺い知ることが出来る⁴⁰⁾。

トケスという名は明らかにトラキア系であるが、彼はおそらくギリシア人であろう。トケスの祖先に地元トラキア人の有力者の娘を妻にした者がいたに違いない。ここで思い起こされるのがキモンのケースである。キモンはトラキアの鉱山採掘権を持っていたが、彼の父ミルティアデスは、トラキア王オロロスの娘と結婚していた。同様にトラキアの鉱山採掘権を持っていたトゥキュディデスも、このオロロスに繋がると云う。これらのことから、トラキアの有力者と血縁関係を持つことが、当地における鉱山の採掘権取得の重要な条件であったことが推測される。トケスも彼らと同様の事情を持ったエイオン在住のパロス有力市民の子弟であったと推察される⁴¹⁾。

エイオンはタソスの対岸領土に含まれないが、おそらく7世紀後半の対岸領土獲得運動の一貫としてパロス人によって植民されたものと考えられる。ただし、その地はタロス人に委ねず、パロスの直営地として経営されていたと思われる。エイオンはそれほど重要な地点だったのである。513年のダレイオスのスキタイ遠征の後、ペルシア軍のトラキア侵

略やヒステイアイオスのミュルキノス植民を目のあたりして、パロスはおそらくはペルシアへの服従を誓うことによってエイオンを守り通したと推察されている⁴²⁾。

以上の考察が正しければ、476/5年のエイオン攻略は、単なる残留ペルシア軍追討戦ではなく、ことによればキモンとエイオン在住のパロス人およびタソス人との戦争であったと見ることも可能となってくる。

c. ミルティアデスのパロス遠征

ここで思い起こされるのが、ミルティアデスのパロス遠征である。489年にマラトンの英雄ミルティアデスがアテナイ民会に攻撃目標を明かさないうまま、「大量の金を易々と手に入れることが出来るある国に連れていくのだ」と言って、軍船70隻と軍勢および軍資金を要求して出撃した。彼はパロスに着くと金100タラントンを要求した。結局その遠征は失敗し、金を持ち帰るところか帰国後、彼は裁判にかけられて有罪となり、50タラントンの罰金を課されて支払うことが出来ず、パロスの神殿に盗みに入った時に受けた傷がもとで失意のうちにこの世を去った。この遠征についてヘロドトスも「表向きの理由」を持ち出している。「ミルティアデスは遠征軍を受け取ってパロスへ向けて出航すると、パロスの方が先にペルシア勢とともに一隻の三段櫓船でもってマラトンに遠征してきたからだ」と彼は遠征の理由を述べた。しかしこのことは表向きの理由に過ぎなかった。本当の理由は、パロス出身のテイシアスの子リュサゴラスが彼のことをペルシア人ヒュダルネスに中傷したことのために、パロス人に対して怨みを持っていたからであった (Hdt.6.133)。

テイシアスの子リュサゴラスについてこれ以上のことは判らないが、ヒュダルネスはアジアにおける沿岸地方の軍司令官である (Hdt.7.135)。「表向きの理由」はトゥキュディデスの例の記述を想起させる。パロス遠征の表向きの理由として、ミルティアデスはマラトンの戦いを持ち出した。しかし本当の理由は、表に出せないような個人的なものだった。中傷の内容については判らないが、恐らく493年のペルシア軍による

ケルソネソス攻撃と関係があるのであろう⁴³⁾。そのためにミルティアデスは半島から撤退せざるを得なくなり、同時にトラキアにおける鉞山の権益も失うことになったはずである。この怨みを晴らすために、彼はパロス遠征を思い立ったのではなかっただろうか。この状況からすれば、489年以前から既にエイオンをめぐるアテナイとパロス(タソス)の戦いは始まっていたことになる。

d. 三体のヘルメス像

キモンによるエイオン攻略および植民は、当時のアテナイ人によって大いに歓迎されたらしく、彼には三体のヘルメス像建立が許可された。そのことについて、アイスキネスは以下のように伝えている。「アテナイ人諸君、当時は多くの苦労と大きな危険に耐えて、ストリュモン河畔でメディア人と戦って勝利した人々がいたのです。彼らは帰還すると、民衆に褒美を要求しました。そして民衆は彼らに大きな名譽を与えたのです。つまり、当時決められていたように、それはヘルメス像の柱廊に三体の石のヘルメス像を建立するということでした。ただし、それには彼ら自身の名を刻むことは認められませんでした。というのは、その銘文が民衆のためのものではなくて、將軍たちのためのものであると思われてはいけないという配慮があったからでした。私が真実を述べているということは、それらの詩自体から明らかとなります。現に、ヘルメス像のうち第一のものには次のように刻まれています。「かつてストリュモン河畔のエイオンでメディア人の子らに、燃えるような飢えと激しい戦闘をもたらし、はじめて敵を困難に陥れたかの者たちは、実際に勇敢であった」。第二のには「彼らの善行と勇氣に報いて、アテナイ人は返礼としてこれらを指揮官たちに与えた。後の時代の人々のうちでこれらを見た者は、より一層公共の事のために骨を折りたいと思うであろう」。第三のヘルメス像にはこう刻まれています。「昔この都市から、アトレウスの子孫たちと共にメネステウスも、聖なるトロヤの野に軍を進めた。かつてホメロスは、しっかりと青銅で身を固めたダナオイ人たちのうちでこの者

が、軍指揮官として最優位の者であると謳っていた。このように、戦争と武勇に優れた指揮官という呼び名をアテナイ人に与えてもまったく不当ではない」。そこには將軍の名は誰一人としてなく、あるのは民衆という名だけです（Aesch.3.183-185）」。

これらの碑文の第一の眼目は、エイオン攻略がメディア人に対する戦争、すなわちペルシア戦争の一部であったということである。この主張は、先に見たエイオン攻略の事情と比較すると、食い違いが生じる。エイオン攻略は確かに残留ペルシア軍に対する追討戦ではあったが、それが全てではなく、ギリシア人の進出に抵抗するトラキア人に対する戦争とも連動しており、またパロス人との戦争でもあった可能性もある。第一の碑文にはエイオン攻略を対ペルシア戦争に見せようとする作為が感じられる。

第二の眼目は、エイオン攻略をトロイ戦争になぞらえて、アテナイ人がギリシア第一の武勇を誇ることである。第三の碑文に見られるアトレウスの子孫たちとは、ミュケナイ王アガメムノンとその兄弟であるスパルタ王メネラオスを指し、メネステウスはアテナイ王であり、神話によれば、彼らはともにトロイ戦争に参加したとされている。ダナオイ人とはギリシア人一般を指す名称である。従って、第三の碑文も第一の碑文と同様に、エイオン攻略を対異民族戦争と位置付け、同時にアテナイ人をミュケナイ人やスパルタ人などのドーリス人よりも優れた指揮官であると喧伝しているように思われる。

第三の眼目は、このようなエイオン攻略が公共の事のための行為であったと主張することである。もちろん、残留ペルシア軍追討戦であるならば、それが公共の事であるのは明白であるが、ここではそれが殊更に強調されている。エイオン攻略は確かに、キモンのようなアテナイの指導者たちと民衆とが一致協力してなした行為であったに違いないが、碑文に関するアイスキネスの説明にもあるように、何がしかの不調和が両者の間には最初からあったのではないだろうか。プルタルコスもキモン伝の中でこの碑文を収録しており、このことを考えるためには、それ

に続くプルタルコスの記述を読み進まなくてはならない。「たとえこれらがキモンの名をどこにもはっきりと示していないとしても、当時の人々にとっては破格の賞賛であったように思われる。というのは、テミストクレスもミルティアデスも、そのような賞賛を受けたことがなかったからである。ほんのオリーブの冠を要求したミルティアデスに対してさえ、デケレイア区のソファネスは、民会の最中に立ち上がってそれに反対した程であった。彼が放った言葉は好意的なものではなかったが、当時の民衆には気に入られた。彼は「ミルティアデスよ、一人で戦ってバルバロイに勝ったのなら、君一人が賞賛されるに値する」と言ったのである。それならば、何ゆえにキモンの行為は、それ程までに好評を博したのであろうか。他の者たちが将軍になった時には、殺されたり傷つけられたりしないように、敵にあまり近づかないものであるが、彼が将軍になった時には、略奪を目的として自ら敵に向かって遠征することができ、エイオンであれアムフィポリスであれ、土地を手に入れて植民したからであろうか (Plut. Cim. 8.1-2)」。

プルタルコスはキモンのパトロン的性格に注目している。そして、実際に民衆に与えたものは土地であった。この記述から判断すれば、民衆は金銀の鉱山とは無縁であったように思われる。ここにエリートと民衆の思惑のギャップと金銀の鉱山の利権を狙ったエリートが土地獲得を餌に民衆を動員したエイオン攻略の図式が見て取れる。そしてこのギャップを埋めるものが表向きの理由だったのである。

(2) スキュロス植民

トゥキディデスによれば、エイオン攻略の次に行われた行動はスキュロス植民である (Thuc. 1.98.2)。先住民であるドロペス人は全て島から追放され、土地はアテナイ人に分配された。これは476/5年のことと考えられている。スキュロスはエウボイアの東、エーゲ海のほぼ中央に浮かぶ島で、ほとんどが石灰石からなっており、土地は痩せている。島の南部は水が乏しく痩せているが二つの良港があり、北部は比較的肥沃で人口も多い⁴⁴⁾。

この島には、かつてカリア人、クレタ人などが住んでいた形跡があるが、後にドロペス人が移住してきた。ドロペス人は、テッサリア人の種族で、名の語尾が(単数形で) *οψ* であることから、彼らがギリシア人であったことが推測される。実際、彼らは常にギリシア人として見られていた。彼らの故郷は、東はアカイア・フティオティス、南はアイニアネス人、西はエペイロスに囲まれた範囲で、そこはギリシアで最も交通が困難な辺境で、人口の少ない地域であった。ドロペス人の名はすでにホメロスの時代に知られており、彼らはデルフォイのアムフィクテュオニアのメンバーであった⁴⁵⁾。

ほとんどの史料はドロペス人を島の先住民としているが、ディオドロスはそれをドロペス人とベラスゴイ人としている(Diod.11.60.2)。ベラスゴイ人については、レムノス植民の箇所ですべて通り、彼らは非ギリシア人の先住民族であった。本土のドロペス人とは異なり、スキュロスのドロペス人は、ギリシア人と非ギリシア人のボーダー的な存在として見られていたのかも知れない。

a. スキュロスの海賊

480年、本土のドロペス人はクセルクセスに土と水を献上し、遠征に陸軍を参加させた。ペルシア戦争中のスキュロス人の動きについてヘロドトスは、アルテミシオンの海戦の際に「蟻岩」と呼ばれる暗礁があることをペルシア艦隊に知らせたのは、パンモンというスキュロス人であったと述べるだけである(Hdt.7.183)。本土とスキュロスのドロペス人の間に連携があったかどうかは分からないが、その島がペルシア軍の侵入経路から外れていたこと、ヘロドトスはその島にほとんど言及していないことからすれば、スキュロスのドロペス人がペルシア戦争においてあまり大きな役割を果たさなかったということは言えそうである。

トゥキュディデスの記述からは、なぜスキュロスが植民されたのか、その理由がまったく分からない。ネポスも言わない。その点を補完してくれるのがプルタルコスである。「キモンが以下のようなきっかけでス

キュロスを征服した時、そこを植民した。その島にはドロペス人が住み、彼らは農耕に適さず、昔から海を荒していたが、ついには彼らのところへ航行してきた外国人を襲うことを止めないどころか、テッサリア人のある商人たちをクテシオンの辺りで襲撃し、商品を略奪して、彼らを監禁してしまった。この人々は牢獄から逃げ出して、アムフィクテオニアに訴え、スキュロスの有罪判決を勝ち取った。しかし、彼らは多額の賠償金を支払うことを望まなかったので、略奪品の所有者にそれを返還するよう命じた。彼らは恐れて、キモン宛に手紙を送り、都市を占領してくれれば、自分たちはそれを引き渡すから、軍船を率いて来てくれるよう要請した。こういうわけで、キモンはその島を受け取り、ドロペス人を追放して、エーゲ海を自由にしたのである (Plut. Cim. 8.3-5)。

つまり、スキュロスが征服された理由は、その島の住民が海賊であったということである。彼らが海賊であったということは、この島が交通の要所であり、彼らはその海域に精通していたことを意味する。アテナイ人がトラキア方面に航行する際には、本土とエウボイア島の西岸の間を通過するか、もしくはエウボイア島の東岸とこの島の間を通過するか、二者択一であった。本文にもあるように、テッサリア人の商人が同島の港で襲われたということは、この島が後者のルートにおいて重要な寄港地であったことを示唆している。また、先にも触れた「蟻岩」の暗礁をペルシア艦隊に教えたという話も、スキュロス人がその海域に精通していたことを仄めかしている。キモンにとってスキュロス占領は、トラキア方面への航路を確保するという意味があったのだろう。

b. テセウスの骨

キモンはスキュロス植民の際に伝説の英雄テセウスの骨を探索してアテナイに持ち帰った⁴⁶⁾。トゥキュディデスはこのことを語っていないが、プルタルコスにはキモンの伝記とテセウスの伝記の両方において詳しく述べている。「昔アイゲウスの子テセウスがアテナイからスキュロスに逃亡し、そこで恐れから起こったリュコメデス王による陰謀によって殺され

たということを知って、キモンはその墓を一生懸命に探した。というのは、テセウスの遺骸をアテナイへ持ち帰って、半神としてふさわしく祀るべしという神託をアテナイ人が受けていたが、スキュロス人が島を調査することに同意も許可もしなかったので、それがどこにあるのか分からなかったからである。しかし大きな野心に突き動かされて、やっこのことで墓所を見つけ出したので、キモンはその骨を自分の船に積み、他のことどもを整えて、華やかに祖国に帰港した。それはテセウスにとっては約400年ぶりの帰還であった。これらのことのために民衆は、とりわけ彼を愛したのである(Plut. *Cim.* 8.5-6)。「ペルシア戦争の後、ファイドンがアルコンの時、巫女はアテナイ人に、テセウスの遺骨を採集して持ち帰り、うやうやしく納めて自分たちのところで守るべしという神託を下した。しかし、島に住んでいるドロペス人と行き来がなかったし、彼らは気むずかしかったので、それを採集することはもちろん、墓を見つけ出すことさえも困難であった。それにもかかわらず、キモンはその島を征服して、彼に関する伝記に書かれてある通り、熱心に探した。伝えられるところでは、何かの神助であろうか、彼は鷲がある場所を口ばしでつつき、爪で引っ搔いているのを見て気付き、そこを掘り返した。すると、大きな遺体の入った棺と傍らに置かれた青銅の槍と剣が出てきた。それらがキモンによって彼の三段櫓船に乗せて大切に持ち帰られた時、喜んだアテナイ人は、あたかもテセウス自身がアテナイへ帰還したかのように、行列と松明と犠牲をもって出迎えた。それは都市の中央の今の体育場の傍に安置されていて、奴隷や全ての弱者が強者を恐れて非難するところである。なぜならば、テセウスには、ある者を庇護し、援助し、弱者の嘆願を親切に受け入れてくれるというご利益があったからである(Plut. *Thes.* 36.1-2)」。

ファイドンがアルコンの年は476/5年に相当する。キモンはこの年にデルフォイの巫女から下された神託に従って、テセウスの遺骸を探索し、アテナイに持ち帰ったということである。テセウスとは、アテナイの国民的な英雄であり、彼にまつわる様々な物語がテセウス伝説として総称

されて伝わっているが、彼はドーリス人のオレストスに対抗して作られた一種のアイドルであった(Paus.3.3.7)。キモンはこの事業を何らかのプロパガンダに利用したに違いないが、それがどのようなものであったのかを探るためにはまず、当時の人々がテセウスにどのようなイメージを持っていたのかを明らかにしなければならない。

パウサニアスは、アテナイのアゴラを散策した時、ストア・ポイキレについても言及し、そこにある三枚の壁画を詳しく描写している。最後の絵はマラトンの戦いの模様を描写したもので、そこにテセウスが描かれている。「最後の画面には、マラトンで戦った勇士がいる。プラタイアに住むポイオティア人とアッティカ全域の軍勢が、非ギリシア人と戦いを交えている。このあたりでは両軍互角に戦っているが、画面の中程の戦いでは、非ギリシア勢が敗走し、押し合いながら沼地に入っている。そして最後の場面には、フェニキア人の船群がいて、ギリシア勢が船へ逃げ込もうとする異国勢を殺している。画面には、この平原の名の起源となった英雄マラトンも、冥界から上がってきているところらしい姿のテセウスも、アテナとヘラクレスも描いてある。当のマラトンの伝承では、ヘラクレスを神とみなしたのは、この地の住民が最初である。また、画面の戦士のなかでも、とりわけはっきり判るのは、市民から選出されてポレマルコスとなったカリマコス、将軍の一人ミルティアデス、英雄「エケトロス」 —これについては後でまた触れる— である(Paus.1.15.3)」⁴⁷⁾。

ここでは「冥界から上がってきているところらしい姿のテセウス」が描かれているが、これは次のような伝説に基づいたモチーフである。「ところで、しばらくして後、アテナイ人はテセウスを半神として崇めるようになったが、マラトンでメディア人に対して戦った者たちの内、少なからずの者は、武装したテセウスの亡霊が彼らの前に立って、バルバロイに向かって突き進んでいるのをはっきりと見たと信じていた(Plut. *Thes.* 35.8)」。つまりテセウスは、マラトンの戦いにおいて亡霊となってバルバロイからアテナイ軍を護った守護神としてイメージされていたの

である。このことは、テセウスの遺骸がアテナイに安置され、半神として祭られた場所が奴隷や弱者の非難場所になっていたという叙述とも符合する。マラトンの戦いは、490年すなわちスキュロス植民からわずか14、5年程前に戦われたペルシア戦争の一大決戦であり、当時の人々の記憶には生々しく残っていたはずである。その戦いを実際に勝利に導いたのがキモンの父ミルティアデスであった。そして例の壁画には、ミルティアデスその人の姿もはっきりとそれと分かるように、テセウスと並んで描き込まれていた。ミルティアデスとテセウスの像は二重写しになっていたのである。そして、テセウス崇拝を創設したのがキモンであった(Paus.1.17.6)。

以上の考察から、キモンがテセウスの骨をアテナイに持ち帰った行為の真意が読み取れるであろう。まず、テセウスの骨を持ち帰ることによって、強力な守護神を得た功績を民衆に誇示した。次に、父ミルティアデスの偉業を民衆に思い起こさせることによって、自分の威信を高めようとした。最後に、スキュロス占領および植民の目的は、実際にはトラキアへの航路の確保であったが、その島は本来ペルシア戦争の文脈から外れていたため、スキュロス占領に異民族からギリシアを護ったテセウスの亡霊譚を結び付けることによって、これをペルシア戦争の文脈に読み替えようとしたのである。

(3) エンネアホドイ植民

トラキア遠征の第二ラウンドは、465年真夏のタソス反乱とエンネアホドイ植民とから始まる。エンネアホドイとは「九路」を意味し、そこが交通の結節点であったことが知られている⁴⁸⁾。それと同時に、既に見たように、そこはタソスの母市であるパロスがペルシア戦争以前から金鉱山の利害を有していた場所であった。

a. タソスの反乱

反乱の原因は明らかにタソスの鉱山権益を巡るものであった。「しばら

くして次に、対岸のトラキアにあるタソス人の所有していた商港と鉾山をめぐる争いから、タソス人が彼らから離反するということが起こった。そこでアテナイ人は、船でタソスへ向かい、海戦によって打ち勝ち、その地上陸した。同じ頃に、彼ら自身とその同盟の中から10000人の植民者をストリュモン河畔に送った。その時にはエンネアホドイと呼ばれていたが、今ではアムフィポリスと呼ばれている所に植民するためであった。エドノス人が所有していたエンネアホドイを手に入れてから、トラキアの奥地へ侵攻した時、エドニア領のドラベスコスで全トラキア人によって全滅させられた。彼らは、その土地がギリシア人によって植民されることに敵意を持っていたのである(Thuc1.100.1-3)。タソス人は、ラケダイモン人に救援を要請し、アッティカに侵入するよう依頼したが、その時スパルタで地震が発生し、それに乗じてヘイロタイとメトイコイが反乱を起こしたため、援軍が得られなかった。その結果「タソス人は包囲の3年目にアテナイと協定を結ぶに至り、防壁を取り壊すべきこと、軍船を引き渡すべきこと、直ちに支払うべき賠償金および今後支払うべき金額を査定すべきこと、そして大陸領と鉾山を放棄すべきことが決定された(Thuc.1.101.1-3)」⁴⁹⁾。

情報が少し込み入っているので整理しよう。まず465年にタソスは対岸の大陸に所有していた鉾山を巡ってデロス同盟から離反した。アテナイは直ちにタソスを包囲攻撃した。それと同時に、かつてパロスが管轄していたエンネアホドイ(後のアムフィポリス)に10000人の植民者を派遣した⁵⁰⁾。そして463年にタソスは協定を結び、大陸の鉾山とタソス島の鉾山の両方を放棄した。従って、パロスにしてみれば、エンネアホドイ、大陸領、タソス島の三つを同時に失ったことになる。

大陸の鉾山とは、パンガイオン山にあるスカプテシュレ(スカプテヒュレの異名)を指す。これらの鉾山については、ヘロドトス自身が見たと報告しており、「彼らの収入は、大陸と鉾山とから上がるのであった。スカプテシュレの金山からは、年平均80タラント産出し、タソス自身にある鉾山からはそれより少なかったが、普通はタソス人には穀物税が免

除されるほど大きく、大陸からと鉾山からの収入は、毎年200タラントンに上り、最も多いときは300タラントンにもなった(Hdt. 6.46-47)」と云う。これらの鉾山がいかに豊かなものであり、それ故に常に外敵から狙われていたことがよく判る。

b. ケルソネソスの再征服

トゥキュディデスの記述からは、エウリュメドンの戦いとそれに続いて起こったタソスの離反との繋がりが分からないが、プルタルコスの記述からは、466年キモンはまず、アテナイからケルソネソス(ケロネソスの異名)へ就航し、そこのトラキア人を制圧して後に、タソス離反の鎮圧に向かったことが窺える。「一部のペルシア人はケロネソスを退こうとしないどころか、奥地からトラキア人を呼び寄せ、全くの少数の三段櫓船を率いてアテナイから出撃して来ていたキモンを見くびっていたが、キモンは彼らに対して4隻の軍船で攻撃し、彼らの13隻の軍船を奪い、ペルシア人を追放し、全トラキア人を制圧して、ケロネソスをアテナイのものとした。その後、アテナイから離反したタソス人を海戦で打ち破り、33隻の軍船を奪い、その都市を包囲攻撃して、対岸にある金鉾山をアテナイ人のものとし、またタソス人が支配していた土地を取り上げた(Plut. *Cim.* 14.1-2)」。

c. 10000人の都市

キモンの視点に立てば、ここにおいて彼の大願が成就したと言えるであろう。彼の生まれ故郷であるケルソネソスを奪還し、母の故郷でありかつて権益を持っていた金山のあるタソスの大陸領も取り戻した。さらに、エンネアホドイ植民とタソス島の鉾山をも奪うことで、父ミルティアデスの怨みをパロスに晴らすことが出来たからである。逆にタソス人の視点に立てば、離反も無理からぬことであった。ペルシア戦争以前からのミルティアデスとパロス人との反目、彼のパロス遠征、キモンによるエイオン攻略、これらはトラキアの金を巡る両者の闘争の歴史と言え

る。トラキアに視点を移せば、常に彼らがキャストリングボードを握っていた。彼らとて一枚岩ではないが、富を求めてやってくるギリシア人たちを、或いは引き入れ或いは追い返して、彼らからの軍事的支援を得ていたのだろう。一方ギリシア人は、ケルソネソスに大防壁を築くことによって、またはエンネアホドイに10000人の植民都市を築くことによって、それらの地をトラキアから切り取ろうと目論んだ。そのような目論みを早くから察知したトラキア人は、今度はペルシアを招き入れたのではなかっただろうか。ミルティアデスやタソス人に関してペルシアに報告された中傷とトラキア人のペルシア駐留軍に対する援助は、そのことを示唆している。

Ⅲ. ペリクレスの時代 —アテナイ植民の最盛期—

1. キモンとペリクレス

アリストテレスの「アテナイ人の国制」は、キモンとペリクレスの民心収攬の手法の違いを指摘している³¹⁾。「ペリクレスは陪審手当を導入した最初の人物であったが、それはキモンの富に対抗して民衆の歓心を買うためであった。なぜならば、キモンは僭主が持つような財産を持ち、まず公共奉仕を華々しく行い、次に多くの民衆を養っていたからである。つまり、ラキアダイ区民の内でも毎日でも彼の家に来ることを望む者は誰でも、そこそこのものを得ることが許されており、更に彼の全ての領地は柵で囲まれておらず、果実を望む者は誰でも取ることが出来るようになっていたのである。この財力に対して、ペリクレスは財産に欠けていたので、オイエ区のダモニデスに、(省略)、私産において劣っているので、大衆には彼ら自身のものを与えよと忠告された (Aristot. *Ath. Pol.* 27.2-4)。

既に見たように、キモンはトラキアにおける私的な鉱山からの莫大な資金を有していた。彼はペルシア戦争によって失われた権益を取り戻すためにアテナイ民衆および同盟諸ポリス民を動員したが、彼らには報酬としてトラキア人やバルバロイから奪った金品や土地を与えた。それ故に彼の指揮は人気

があったという。ペリクレスが民衆の支持を勝ち得るためには、このような貴族的なパトロネジに対抗しなければならなかった⁵²⁾。確かに彼は裕福ではあったが、キモンほどの個人的な財源はなかったので、同盟から入る富を民衆に分配したのである。そして民衆が喜んだ政策の一つが植民であった (Plut. *Per.* 34.1)。

プルタルコス、ペリクレスによる一連の植民活動のリストを掲載している。「それらに加えて (ペリクレスは)、ケロネソスへは1000人のクレールーコイを、ナクソスへは500人を、アンドロスへはその半分を、トラキアへはビザルタイ人とともに住む者たち1000人を、イタリアへは、シュバリスが再建された時、それはトゥリオイと呼ばれたが、別の (1000人?) を送った。ペリクレスはこれらのことをして、怠惰で暇の故にあれこれと口を出す群衆から都市を解放し、民衆の困窮を改善し、反乱を起こさせないために脅しと監視を同盟たちの隣人としたのであった (Plut. *Per.* 11.5)」。

ディオドロスとパウサニアスはもう一つのリストを掲載している。「その後 (ペリクレスは)、ケロネソスへ到着して、市民の内の1000人にその土地を分け与えた。これらのことが行われたのと同じ時に、もう一人の将軍であるトルミデスは、エウボイアへ進出して他の1000人の市民に[その土地と]ナクソス人の土地とを分配した (Diod. 11.88.3)」。「後にアテナイへ帰還した時、エウボイアとナクソスへアテナイ人のクレールーコイを導き入れ、ボイオティアへも軍勢を率いて侵攻した (Paus. 1.27.5)」。

アンドキデスとアイスキネスはこの時代を振り返って、それがアテナイ植民の全盛期であったと言う。「我々はケロネソスとナクソスとエウボイアの三分の二以上を所有していた。また他のアポイキアを一つ一つ詳しく述べると長い話になるだろう (Andoc. 3.9)」。「我々はケロネソスとナクソスとエウボイアを所有し、非常に多くのアポイキアをその頃に送り出した (Aesch. 2.175)」。

これらの史料をまとめると、ペリクレスとトルミデスが手分けをして、ケロネソス植民(ケルソネソスの異名、これには複数のポリスが含まれる)、ナクソス植民、アンドロス植民、トラキア植民(プレアのこと)、トゥリオイ植

民、エウボイア植民（これにはカルキス、エレクトリア、ヘスティアイアなどが含まれる）を行ったことが判る。その他にも多くの植民市が建設され、それらの内で知られているものは、アマフィポリス植民、シノペ植民、アミソス植民、アスタコス植民、アイギナ植民、ポティダイア植民である。また、アテナイ人自身が入植したのではないが、ナウパクトス植民もこれに加えられる。

2. 第一次ペロポネソス戦争

460年のアテナイ・メガラ同盟を機にいわゆる第一次ペロポネソス戦争が始まった。戦場は専ら本土中央部およびペロポネソス半島周辺に限られた。この戦争は446/5年の三十年の平和締結まで続けられた⁵³⁾。今見たリストの殆どの植民はこの時期に建設されたものである。

(1) ナウパクトス植民

ナウパクトスはアテナイによって占領、植民されたが、入植したのがアテナイ人自身ではなかったことから、アテナイ植民研究では余り注目されてこなかった。しかしここではまずそれを取り上げたい。なぜならば、この植民の分析が従来のクレールーキア概念の再考を促すと考えられるからである。

465年に金山の権益をめぐるタソスがアテナイから離反した。アテナイは直ちに反乱鎮圧の軍を派遣した。465/4年冬タソスはスパルタに救援を求め、アッティカに侵入するよう要請した。464年スパルタはそれを承諾して、まさに実行に移そうとした時に大地震が起こった。プルタルコスによれば、その地震はそれまでに記憶のないもので、スパルタの地方には多くの割れ目が出来て落ち込み、タイゲトス山の峰が崩れ落ち、スパルタの町には五軒を残して全ての家が倒壊したと云う(Plut. *Cim.* 14. 4)。464/3年この混乱に乗じて、スパルタのヘイロタイやペリオイコイが反乱を起こして、イトメ山に立て籠もった。ヘイロタイのほとんどはかつてのメッセニア人の子孫であったので、彼らはメッセニア人と総称されていた。

462年スパルタ人は諸国に救援を求めた。アテナイもそれに応じて、親スパルタ派のキモンを指揮官とする援軍を派遣した。しかし包囲戦が長引く間に、スパルタ人はアテナイ人が反乱を幫助するのではないかと疑念を抱き、アテナイ軍だけを撤退させた。そのことを侮辱と感じたアテナイ人は、462/1年ギリシア連合を脱退した。同年キモンは陶片追放にあった。

ナウパクトスは、457年初夏のペロポネソス攻撃の際、トルミデスによって占領された (Diod.11.84)。アテナイは455年頃、ナウパクトスにアテナイ人自身ではなく、イトメに立て籠もったメッセニア人を入植させた⁵⁴⁾。「イトメに立て籠もった者たちは十年目になってもはや抵抗する力がなくなった時、ラケダイモン人と同意に至り、ペロポネソスから退去し、二度とそこに足を踏み入れず、もし捕えられた場合には、その者は捕えた者の奴隷になるという協定を締結した。というのは、それ以前にデルフォイのある神託がラケダイモン人にあったからで、それはイトメのゼウスの嘆願者を解放すべしというものであった。彼らと婦女子が退去すると、以前からのラケダイモン人に対する憎しみから、彼らをアテナイ人が受け入れて、たまたま最近オゾリスのロクリス人の所有から奪ったナウパクトスへ住ませた (Thuc.1.103;cf. Paus.4.24.7)」。入植していたメッセニア人は、405年のアイゴスポタモイの海戦後、スパルタ人によって追放された (Paus.10.38.10)。

メッセニア人のナウパクトスは貢納金を支払わなかったが、常にアテナイの西方における最大の軍事拠点であり、メッセニア人はアテナイ人に対する強い忠誠心を示していた。アテナイは重要な軍事拠点を確保するためにアテナイ市民からなる植民団を派遣したというのがクレールキアの通説であったが、この理論はナウパクトス植民には全く当てはまらないのである。

ところで、なぜアテナイ人自身はナウパクトスに入植しなかったのだろうか。勿論、危険な場所だったのだろうか。しかしそのような所に設置してこそ軍事植民というものである。入植者の不足は考えられない。440年代から30年代にかけてアテナイは爆発的に植民者を送り出している。むしろア

テナイ人がナウパクトスには植民したがらない理由があったのではないだろうか。

そもそもナウパクトスはオゾリスのロクリス人の都市であった。ロクリス人はドーリス地方とフォキス地方を挟んで東ロクリスと西ロクリスに別れ、東ロクリスはオプースのロクリス人とクネーミス山麓のロクリス人からなり、西ロクリスはオゾリスのロクリス人からなる。西ロクリスはもと東ロクリスからの移民であった。アテナイが占領する以前、460年頃にも東ロクリスからナウパクトスへの追加植民が行われたことが知られている（*M&L*.20）⁵⁵）。

ドーリス地方はスパルタ人を含むドーリス人の故郷であり、ロクリス人もドーリス方言と同じ北西方言に属していた。「ドーリス族はその場所でアリスタマコスの子供たちとともに船を建造し、それらに乗ってペロポネソスへ渡った。それゆえにその名がその場所に付けられたと云われている（*Paus.* 10.38.10）」⁵⁶。これはヘラクレスの子孫の帰還の物語である。この伝承から、ナウパクトスは同じドーリス人であるメッセニア人にとっては縁りの地であったが、イオニア人であるアテナイ人には無縁の地であったことが判る。このことがアテナイから植民者が送られなかったことと関係があったのかも知れない。

(2) レムノス・イムブロス植民？

軍事拠点を確保するために母市市民権を持った植民者が派遣されたとの定説は、レムノス・イムブロス植民の解釈に大きな影響を与えている。両島は477年の時点からデロス同盟に加盟し、貢納金を支払っていた。5世紀の中頃にこれらの島々に新たに植民者が派遣されたことを伝える文献史料は存在しないが、貢納金の減額を根拠として（つまり、土地を割譲させたので貢納金の減額が生じたという理論）、レムノスには450年夏に、イムブロスには447/6年に植民者が送られたと考えられている⁵⁶）。この理論自体は頷けるし、文献史料が言及しなかった植民もたくさんあったはずである。実際にこの時に植民者が派遣されたかも知れない。

しかし問題は、この時に性格の異なる植民者が送られたという推測である。つまり、6世紀末にレムノスとイムプロスはアポイキア（従来説による母市市民権を持たない植民市）として建設されたのに、5世紀の中頃になると「レムノス人」と「イムプロス人」が積極的にアテナイ人と軍事行動に共にしたことを伝える記述が目立つようになる。これらの記述はいかにも彼らがアテナイの命令に忠実な軍隊であるとの印象を与えるが、アポイコイならそのような行動は示さないはずである。この矛盾を解決すために、5世紀中頃にレムノスとイムプロスにクレルーコイが派遣されたとする解釈である⁵⁷⁾。従来のクレルーキア理論に拘泥する限り、このような解釈が必要となるが、ナウパクトス植民の例から明らかなように、植民市の従属性と母市市民権の保持とを不可分に考える必要はないように思われる。従って、仮に新たに植民者が派遣されたと認めるとしても、彼らは以前と同じ植民者であった。

(3) ナクソス植民

島には複数の集落があったが、ナクソスという都市を中心とした一つのポリスを形成し、市民は「ナクソス人」と呼ばれていた。先史時代の島の住民は、トラキア人、クレタ人、カリア人などであったらしいが(Diod.5.50ff)、歴史時代になってからはイオニア人が住むようになった⁵⁸⁾。このことは、「ナクソス人はアテナイ出身のイオニア人である(Hdt.8.46)」と伝えるヘロドトスの記述からも、また、コドロスの子孫であるネレウスがナクソスに上陸した(Aelian.V.H.8.5)とか、同じくコドロスの子孫であるプロメトスがナクソスへ逃れた(Paus.7.3.3)という伝承からも窺える⁵⁹⁾。

ナクソスは477年にデロス同盟に加盟した。理由は判らないが、470年に離反し466年に鎮圧されて、同盟の中で最初に隷属させられたポリスとなった(Thuc.1.98.4)。ナクソスは初め軍船を出していたが、後に貢納金に切り替えた。この島に500人の植民者が送られたのは(Plut.Per.11.5;Diod.11.88.3;Paus.1.27.5)、貢納金の減少から恐らく450年夏のことと考えられ

ている⁶⁰⁾。しかしその経緯についてはよく判らない。植民後も減額はしたものの貢納金を支払い続けていることから、ナクソスというポリスは存続したものと考えられる。

ナクソスはキュクラデス諸島の中で最も大きく肥沃な島で、特にブドウ栽培が盛んであった。そのためディオニュソス信仰の中心地とされた。この島の肥沃なことはあまねく知られ (Hdt.5.31;Pind.*Pyth.*4.156;Plin.*n.h.*4.67)、ヘロドトスはアリスタゴラスの口を借りて「ナクソスは大きさにおいては大きな島ではないが、他の点においては美しく、肥沃であり、イオニアにも近く、そこには豊かな財宝も奴隷もある。(省略)また、ナクソスそのものやナクソスに従属しているパロスやアンドロスやキュクラデスと呼ばれる他の島々もペルシア王のものとするであろうし、そこから出撃すれば、大きく豊かな島であるエウボイアへ簡単に攻撃ができるでしょう (Hdt.5.31)」と語らせている。アテナイにとってもナクソスを押さえることは、キュクラデス諸島を押さえることに等しく、イオニアへの航路の確保にも不可欠だったと考えられる。

(4) アンドロス植民

アンドロスはキュクラデス諸島の北端にあるナクソスに継ぐ大きさのイオニア人の島で、カリュストスの対岸に位置する⁶¹⁾。他のキュクラデスの島々と同様にデロス同盟に加盟し、貢納金を支払っていた。この島へは250人の植民者が送り込まれたことが知られている (Plut.*Per.*11.5)。植民の経緯は不明であるが、その時期は貢納金の減少からナクソス植民と同じ450年夏のことと考えられている⁶²⁾。植民後も「アンドロス人」の名で貢納金を支払い続けていることから、アンドロスというポリスは存続した。植民者は敗戦の404年引き揚げたと思われる。

(5) エウボイア植民

エウボイアはクレタに次ぐエーゲ海で二番目に大きな島で、細長い形をしている。この島は地質学的に三つの部分に分けられるが、それと同様に

エウボイアの社会も三つの地域にまとまっていた⁶³⁾。①ヘスティアイアを中心とする北部。これはエウボイアの中で最も肥沃で、最も人口の多い地帯である。ヘスティアイオスおよびエロピアは穏やかな丘陵地であり、オレオス、ヘスティアイア、オロピアイ、アイガイ、ケリントス、ディオーン、アテナイ・ディアデスなどの都市がある。もとはアバンティス人が住んでいたが、後にテッサリアから入ってきたエロピア人によって中部地帯に駆逐された。②カルキスを中心とする中部。ここは最も幅が広く場所で、高く険しい山脈がある。先住民はアバンティス人であったが、7世紀にイオニア族が移住することによってイオニア化された。その主要な都市は、カルキス、エレクトリア、キュメである。カルキスとエレクトリアの間には、レラントンという肥沃な平野がある。7世紀にこの平野をめぐる両市が戦い、ギリシアの海上勢力を二分する大戦争に発展した時、その戦争に勝利したカルキスがエウボイア第一の都市としての名声を得ることとなった。③カリュストスを中心とする南部。ここは最も狭い地域で、概して肥沃ではない。主要な都市として、デュストス、ゼレトラ、ステュラ、カリュストスがある。カリュストスは、美しい肥沃な海岸平野に囲まれている。

既に見たように、アンドキデスとアスキネスによれば、ニキアスの平和の頃にはアテナイはエウボイアの三分の二以上を所有していた(Andoc.3.9;Aesch.2.175)。しかしエウボイアが三つの地域にまとまっていたという事実を考慮すれば、この言葉は土地の面積のことだけを意味するのではなく、同時に三つの地域を指していたとも考えられないだろうか。つまり、ヘスティアイアを中心とする北部の全体、カルキスとエレクトリアを中心とする中部の全体、そして南部の一部の地域、これらの範囲がアテナイの勢力圏であったという意味である。但し、どのような形で土地が所有されていたのかについては、よく分からない。

アテナイはトルミデスの指揮の下、エウボイアに500人の植民団を派遣した⁶⁴⁾。植民の文脈はよく分からない。しかしその時期は、ディオドロスによれば(Diod.11.88.3)、ペリクレスのケルソネソス侵攻が行われていたのと同じ時期であり(447/6年冬)、パウサニアスによれば(Paus.1.27.5)、植

民後にポイオティアの反乱が発生し（446年春）、その鎮圧作戦で彼が戦死したのだから、447/6年ということになる。問題は、彼がエウポイアのどこに植民者を派遣したのかである。確証はなく、カルキスおよびエレクトリアとする説⁶⁵⁾、カリュストスとする説がある⁶⁶⁾。

(6) ヘスティアイア植民

446年春ポイオティアが反乱を起こした。アテナイは直ちにトルミデス麾下の鎮圧軍を派遣し、カイロネイアおよびコロネイアで戦闘を行ったが、結局アテナイはポイオティアを放棄した。ポイオティアの民主勢力は解体し、プラタイア以外のポイオティアの諸都市は、テーベを中心とする貴族政治を再建し、自治独立の連邦を形成した。その戦いにエウポイア人の亡命者も荷担していたことが記されており（Thuc.1.113.2）、彼らはトルミデスのエウポイア植民の際に土地を奪われた貴族たちであった可能性がある。

ポイオティアにおけるアテナイの影響力の低下を機に、同年初夏その対岸にあるエウポイアの諸都市も同盟から離反した。反乱の首謀者はカルキスのヒポポタイと呼ばれる貴族たちであった⁶⁷⁾。ペリクレスは直ちに軍隊を率いてエウポイアに渡ったが、同時にメガラが離反し、ペロポネソス軍がアッティカに侵攻した。そこで彼は急遽アッティカに引き返すと、ペロポネソス軍はエレウシスからトリアに至る地域を荒したたげで撤退していった。この撤退がペリクレスの買収によるものであったことは当時から知られていた。そうしてペリクレスは再びエウポイアに渡って反乱を鎮圧した。

トゥキュディデスは、446/5年のエウポイア諸都市の処分について、簡単に伝えるのみである。「そしてアテナイ人は、ペリクレスの指揮下で再びエウポイアへ渡り、全島を制圧した。そして他の全ての土地は同意によって処理したが、ヘスティアイアからは住民を全て追い出し、自分たちがその土地を所有した（Thuc.1.114.3）」。ディオドロスはトゥキュディデスを引いているようであるが、新しい情報としてヘスティアイアへの植民者の数

が1000人であったことを記している。「その年に、一方ギリシアにおいては、ボイオティアのコロネイア付近における敗戦によって、アテナイの力が弱まったので、多くのポリスがアテナイから離反した。特にエウボイアに住む者たちが革命を起こしたので、ペリクレスが将軍に選ばれ、強力な軍隊を率いてエウボイアへ遠征した。そしてヘスティアイア人のポリスを奪い、無理やりヘスティアイア人を祖国から全て追い出した。一方、他の諸ポリスを威嚇し、再びアテナイに服従することを強いた (Diod.12.7.1)」。「一方ギリシアにおいては、ペリクレスの指揮の下でアテナイが再びエウボイアを取り戻し、ヘスティアイア人をポリスから追い出し、自分の植民をそこへ送り出した。1000人の植民者を派遣し、町も田舎もクジで分配した (Diod.12.22.2)」。「一方ストラボン、テオポンポスを引用して、ヘスティアイアへの植民者が2000人であったこと、また彼らがマケドニアへ逃げていったことを記している。「また、ペリクレスがエウボイアを征服した時、ヘスティアイア (ヘスティアイアの異名) 人は同意によってマケドニアへ移住し、アテナイからやって来た2000人がかつてヘスティアイアの区であったオレオスに住んだとテオポンポスは言っている (Strab.10.1.3)」。「ヘスティアイア人は全て追放されたと見て間違いはない。事実これ以降「ヘスティアイア人」の名は貢納表から姿を消した⁶⁸⁾。

(7) カルキス植民

以上の史料は、エウボイアの諸都市の内ではヘスティアイアに対しては厳しい処置をとったが、他の諸都市に対してはそれよりは穏健に扱ったということを共通に伝えている。なぜヘスティアイアだけが厳罰に処されたのか、また他の諸都市とはどの都市を指していたのかについては述べていない。しかしプルタルコスはその点について答えている。「そこで再びあの離反者たちに向かい、船20隻と重装歩兵5000人を率いてエウボイアに渡り、諸ポリスを制圧した。カルキス人のうちヒッポボタイと呼ばれる富と名声に秀でた人々を追い出し、全てのヘスティアイア人をその領土から移住させ、アテナイ人を入植させた。彼らにだけ容赦のない処分をしたのは、

前にアッティカの船を拿捕し、その乗組員を殺したことがあったためである (Plut. *Per.* 23.2)。

カルキス植民に関しては、非常に保存状態のよい碑文が残されている (Tod. 42; *ATL* II, D17; *M&L*. 52; *IG*. I³40)。この長い碑文史料は、ディオグネトスによる第一決議(1-39)、アンティクレスによる第二決議(40-69)、アルケストラトスによる第三決議 (70-80) から構成され、446/5年のエウポイア反乱鎮圧後の和解協定であると考えられている。ここで注目したい点は植民者への言及と思われる箇所である。この文章は余り整然としていないので解釈が難しいが、以下のように試訳できるであろう。「カルキスにいる外国人は、そこに住んでいる間もアテナイに税を支払う者およびアテナイのデーモスによって免税特権が認められている者を除いて、他の者たちは、カルキス人と同様にカルキスに税を支払うべきこと (51-57)」⁶⁹⁾。

この箇所はカルキスの徴税権に関わる部分であり、その対象者である外人は三種類に分かれるように思われる。①カルキスに住んでいる間アテナイに税を支払う者、②アテナイのデーモスによって免税特権が認められている者、③その他の者。①と②がアテナイ人の植民者を指している可能性は高いが、③の解釈は難しい。しかしこの碑文がアテナイとカルキスの間に交わされた協定であるならば、何らかの形でアテナイ人に言及していないとおかしい。従って、文面上カルキスに植民したアテナイ人の中にはアテナイに税を支払う者とカルキスに税を支払う者の両方がいたことになるが、実際には①と②が通例ではなかっただろうか。

(8) エレトリア植民

上の碑文は、エレトリアとの和解協定にも言及していて興味深い。「アテナイ人とカルキス人は誓いをなすべきこと、ちょうどアテナイ人のデーモスがエレトリア人について決議したのと同様に(40-44)」。

ここから、カルキス人との誓いは、それに先立つエレトリア人との誓いをモデルにして書かれたものであったことが分かる。そして、ここで言及されたエレトリアに関するその碑文が現存している (*IG*. I³39)。これは446/5年に刻まれたも

のと思われ、内容はカルキス碑文の14行目から27行目とほぼ同様の、エレクトリア人とアテナイ人双方の誓いの一部である。従って、エレクトリアに関する史料は少ないが、エレクトリアに対してもカルキスと同様な措置が取られたと考えられる。

ところで、アテナイ人が被征服地であるカルキスやエレクトリアに税を支払っていたことは不自然に思われるかもしれないが、アテナイとカルキスおよびエレクトリアの関係を、母市植民市の関係で捉え直すと、それは何ら不自然ではない。例えば、東ロクリス人によるナウパクトス植民に関する碑文史料においては、東ロクリス人がナウパクトスへ移住した場合、植民者は母市にではなく、植民市に税を支払うことが規定されていた (*M&L*. 20)。しかしカルキスの場合、アテナイ人は「クセノス」であり、カルキス人になった訳ではなかった。それでも、時期ははっきり判らないが、遅くとも413年以前に、アテナイはエウボイア人に通婚権を与えていたことが知られる (*Lysias*.34.3)。この不即不離の関係は、アテナイとカルキスが母市植民市関係にあったことを示唆している。

エウボイア島には様々な種族が住んでいたが、7世紀から6世紀にかけてイオニア人が侵入した。その中心地がカルキスとエレクトリアであった。ヘロドトスは、両市をアテナイ人と同じイオニア人であると述べている (*Hdt.*8.46)。ストラボンが両市の起源について詳しく述べ、エウボイア第一の都市はカルキスで、第二の都市はエレクトリアであったが、どちらもトロイ戦争以前にアテナイ人によって建設されたとも、その戦争の後にアテナイ人のアイクロスがエレクトリアを、同じくコトスがカルキスを建設したとも述べている (*Strab.*10.1.8)。この真偽はともかく、観念の上でカルキスとエレクトリアがアテナイの植民市と見なされていたのならば、アテナイの措置は侵略行為ではなく、母市の植民市に対する干渉として正当化され、植民者の派遣も追加植民と見なされたことになる。一方、ヘスティアイアに対してだけ厳しい措置をとった理由は、ヘスティアイアがアバンテス人ないしはエロピア人の都市であり、イオニア人の都市でなかったことと関係があるのかもれ知れない。「乗組員を殺した」というのは、バルバロ

イ的行為のアナロジーであろう（11-12頁参照）。

エウボイアはアテナイへの穀物供給の生命線であった。411年にエウボイア全島が反乱した時、ヘスティアイアを除く他の植民市は崩壊したと考えられ、ヘスティアイアも404年までには消滅したであろう。

(9) ケルソネソス植民

447/6年ペリクレスはケルソネソスに植民団を送り出した。「ペリクレスの遠征の中で、ケルソネソスを巡るものが最も高く評価されたが、それはその場所に居住していたギリシア人にとっての救いとなったからである。というのは、アテナイ人の1000人のエポイコイを送り出して、諸都市を強化したのみならず、地峡のところに城壁と防御柵を海から海まで連ねて、ケルソネソスの周辺に住むトラキア人の侵入を遮断することによって、近隣の異民族と混住し、境を接して近くに住んでいる盗賊団に満ち満ちたその地域がずっと悩まされてきた長い耐え難い戦争を閉め出したからである（Plut. *Per.* 19.1）」。

植民団を送り半島の頸部に防壁を築いたことは、ペリクレスがミルティアデスの偉業を継承したことを意味する。しかしそのその行為の意義付けは、プルタルコスと以前に考察したヘロドトスとは異なっている。プルタルコスは、半島に住むギリシア人を防衛するために、近くに住むトラキア人やバルバロイの侵入を遮断したとしているが、ヘロドトスは、トラキア人であるドロニコイ人を防衛するために、近隣に住む敵対的なトラキア人（アプシントス人）やギリシア人（ラムプサコス人）と戦争したと言っている。

確かに時代状況は変わっていた。466年にキモンが半島に残留するペルシア軍を追討して、半島の諸都市はデロス同盟に加盟した。半島は448年まで「ケルソネソス人」の名で18タラントンの貢納金を支払っていたが、447/6年以降「セストス人」「マデュトス人」「エライウス人」「リムナイ人」「アロペコネソス人」「アゴラ人」の名で別々支払うようになり、合計も僅か2タラントンのみに減少した。この減額は半島の植民と関係があると考えられて

いる⁷⁰⁾。それ故にペリクレスの時代には、半島における同盟の引き締めが重要な意味を持っていたことは間違いない。しかし本来、フィライダイによる半島経営は、トラキアにおける金山の権益取得と密接に結びついたものであった。ペリクレスがそれを継承したのならば、真の目的は半島の特定のトラキア人の保護であったはずである。そうであるならば、プルタルコスの記事は、親ギリシア・反バルバロイ的な偏見によって歪められていると見ることが出来る。事実ケルソネソス植民の直後に、ペリクレスはエンネアホドイ周辺における植民を再開したのである。

(10) ブレア植民

この植民については、アテナイ植民としては唯一の設立碑文が残されており、貴重な情報源となっている(M&L, 49)。しかし逆に文献史料は極端に少なく、植民の経緯は勿論、その場所さえも正確には判らない。ただステファノス・ビュザンティオノスとヘシュキオスによれば「ブレア、アテナイ人がアポイキアを送り出したトラキアのポリス(Steph. Byz. Βρέα; Hesychius. Βρέα)」とされ、それがトラキアに建設されたことは判る。「トラキアへはビザルタイ人とともに住む者たち1000人を」送り出したというプルタルコスの記述(Plut. Per. 11.5)は、ブレアのことを指しているであろう。ビザルタイ人はアルギロスに接して住んでいるトラキア人部族で、アルギロスはストリュモン河の西側に位置し、エイオンやエンネアホドイから近い⁷¹⁾。

この碑文には、①都市建設者、土地分配役、全権委任者などの役人、②切り取り地の存在、③大パンアテナイア祭およびディオニュシア祭への参加、④土地の防衛、⑤植民者の登録期日、⑥資金の支払い、⑦植民者の農民級と労働者級への限定が記されている。この文面からは植民の正当化については何も得られないが、ここでは④に注目したい。「もし誰かがアポイコイたちの土地に攻撃を仕掛けてくるならば、・・・が書記であった時に締結されたトラキア地方の諸ポリスに関する条約に従って、諸ポリスは出来る限り速やかに救援に向かうべきこと(13-17)」。植民市が軍事拠点の役割

を果たしたことは疑い得ないが、建設当初はむしろ周囲の諸都市によって守られなければならない存在であった。

植民の時期については、アルギロスの貢納金が446年以降減少したこととこの碑文の文字形態とから447/6年に行われたと考えられている⁷²⁾。ブレアのその後も不明である。422年のアムフィポリスを巡るクレオンとブラシダスの戦闘に関する詳細なトゥキディデスの記述にブレアは現れないので、その時までには消滅していたのだろう。ブレアは、戦略的に価値の高いアムフィポリスが建設された437年に吸収合併されたのかも知れない⁷³⁾。

3. 三十年の平和

460年から始まった第一次ペロポネソス戦争は、446/5年の秋か冬の三十年の平和締結によって終結した。これによってアテナイはアイギナを獲得したが、ニサイア、パガイ、トロイゼン、アカイアを放棄した⁷⁴⁾。これ以降アテナイは、西と東の辺境に植民者を送り出すようになった。

(1) トゥリオイ植民

イタリア半島南端に位置するトゥリオイはシュバリスの再興としてペリクレスによって建設された (Plut. *Per.* 11.5)。その経緯についてはディオドロスが詳しく伝えている。シュバリスは720年にアカイア人とトロイゼン人によって建設されたアカイア系のポリスである。その土地は大変肥沃であったので、多くの人口を有し非常に繁栄した。そのため外敵に狙われることが多く、破壊と再建を繰り返した。511年にクロトン人との戦争に破れ、第一シュバリスが破壊された⁷⁵⁾。453年ポセイドニアの援助で第二シュバリスを再建するが、448/7年に再びクロトン人によって破壊された (Diod. 11. 90.3)。同年彼らはスパルタとアテナイに援助を求めた。スパルタは拒否したがアテナイは応じた。446/5年アテナイはまず少数の植民者を派遣して支援した。彼らはシュバリス人と共に住んだ。これが第三シュバリスの再建である。しかし間もなくアテナイはシュバリス人を追放し、場所を移して第四シュバリスを建設した。これがトゥリオイである。アテナイはペロポ

ネソスを含む各地に植民者を募った(Diod.12.10.4)。スパルタとコリントスは国家としてはこれに参加しなかったが、これに参加した個人は多かった⁷⁶⁾。

トゥリオイ人は民主政的な政体を確立したが、興味深いのは、「彼らが市民を十部族に分割し、それを構成する人々の国籍に因んだ名を付けたことである。ペロポネソスから集まった人々から成る三部族を、アルカディア部族、アカイア部族、エレイア部族と名付け、ペロポネソスの外に住むその親戚から集められた3部族を、ポイオティア部族、アムフィクティオニア部族、トリア部族と名付け、他の人々から成る残りの4部族を、イオニア部族、アテナイ部族、エウポイア部族、島民部族と名付けた(Diod.12.11.3)」。トゥリオイ植民は一般にペリクレスのパンヘレニズムの表明と言われる。確かに都市の種族構成を見ればそう言えるかもしれないが、しかし元々の国籍に固執し、結局は種族のモザイクになっていることを考慮すれば、むしろ種族意識に根ざした分裂傾向が窺われる。

実際434/3年にどのポリスが正当な都市建設者であるかを巡って内紛が発生した。それまではアテナイがそれを自認していたが、結局は当たり障りがないようアポロンとすることとなった(Diod.12.35.1f)。そして414年以降はアテナイの影響力は薄れていった⁷⁷⁾。このことは二つの重要な点を示している。①都市建設者の選択は政治的な意味があったこと、②種族という都市のカラーは都市建設者を取り替えることによって変更可能であること。これらの点は次に述べるアムフィポリス植民にも言えることである。

(2) アムフィポリス植民

アムフィポリス植民はかつてのエンネアホドイの再建である。トゥキュディデスはアムフィポリスの前史を次のようにまとめている。「その同じ冬に(424/3年)、ブラシダスはトラキアの同盟を率いて、アテナイ人のアポイキアであるストリュモン河畔のアムフィポリスへ遠征した。今この都市があるこの地域は、かつてグレイオス王から逃れてきたミレトス人のアリスタゴラスが都市を建設しようと試みたが、エドノス人によって撃退され

たところである（497年）。その32年後にアテナイ人は、彼ら自身の中から及び他の諸都市の中から志願した10000人のエポイコイを送り込んだが（465年秋）、彼らもドラベスコスでトラキア人によって全滅させられた（465/4年初冬）。そして再び29年後にアテナイ人はそこに向かった（437年）。ニキアスの子ハグノンを都市建設者として送り出した時、エドノス人を追放してその地域に都市を建設した。それこそかつてエンネアホドイと呼ばれていたところである。彼らはエイオンから出撃したのであるが、それはストリュモン河口の海岸沿いにあり、彼らが抑えていた商港で、今の都市から25スタディオン離れていた。その都市をアムフィポリスと名付けたのはハグノンであった。というのは、その都市の両側をストリュモン河が取り囲むように流れていたので、その河から河までを防壁で遮断して堅め、海も陸もよく見渡せる都市を建設したからである（Thuc.4.102.1-4）。

まことにこの地はギリシアの権力者を引きつけて止まない土地であった。アムフィポリスは貢納金を支払っていなかったが³⁷⁸⁾、何よりも金鉱山の権益所得と密接に関わっていた。ペリクレスがまずケルソネソスに植民団を送り、防壁を建設し、次にストリュモン河畔にブレア、アムフィポリスを建設したことは、かつてのミルティアデスの行為の再現とも思われる。この時ペリクレスがトラキアの権益を掌握したと見て間違いないだろう。

アムフィポリスへ送られた植民者の数はどの史料にも記されていないが、前回同様かなりの人員を要しただろう。ディオドロスも述べているように「アテナイ人はアムフィポリスを共同で植民した。その住民の一部はアテナイ市民から、一部は近くの駐留軍から選ばれた（Diod.12.32.3）」のであり、アテナイ市民はむしろ少数派であった（Thuc.4.106.1）。

それ故この都市は長続きしなかった。424/3年のプラシダスのアムフィポリス攻撃が成功した理由の一つは、市内にいたアルギロス人の密通であったとトゥキュディデスは述べている（Thuc.4.103）。アルギロスは先のブレア建設の時に土地を奪われており、アテナイ人に対して怨みを持っていた。またプラシダスが「アムフィポリス人とアテナイ人の内で望む者は、自分の財産に加えて、平等かつ公平な権利を共有して留まるべきこと、またそ

れを望まない者は、五日以内に自分の財産を携えて退去すべきこと(Thuc. 4.105.2)」を布告すると、アムフィポリスは容易く開城した。この時アテナイ人の殆どは退去しただろう。

422年の夏、クレオンはアムフィポリス奪還を試みるが、ブラシダスの抵抗によって失敗した。両将とも戦死するほどの激戦であった。興味深いのはそれ以後のアムフィポリス人の態度である。彼らはブラシダスをアゴラに面する場所に埋葬し、記念碑を建て、半神としての犠牲を捧げ、毎年の競技と犠牲式を行った。また彼らは彼を都市建設者として崇拝した。その一方でハグノンの都市建設に拘わる記憶を抹消した(Thuc.5.11.1)。

(3) シノペ植民

サモスとビュザンティオンの反乱鎮圧の直後の440年から435年の間に、アテナイはプロポンティスから黒海南岸にかけて大示威行動を行い、この地域に三つの植民市を建設した⁷⁹⁾。これらはいずれもトゥキュディデスによつては伝えられていない。

プルタルコスによれば、ペリクレスは「立派に装備された大艦隊を率いて黒海へ乗り入れると、ギリシア人諸都市に対しては、彼らの望みを叶えてやって友好的な態度をとり、周辺に住むバルバロイと彼らの王や首長たちに対しては、全海域を自分たちの支配下に置いた今や、望む時にはいつでも艦隊を派遣することが出来るその力の大きさと恐れを知らない勇氣とを誇示した。またシノペ人のためには、僭主ティメシレオスに対抗するための13隻の軍船と兵士をラマコスと共に残してやった。彼と彼の仲間が追放された後、アテナイ人の内で希望する600人がシノペへ航行すべきこと、そして以前に僭主たちが所有していた土地および家屋を分配して、シノペ人と共に住むべきことが決議された(Plut. *Per.* 20.1-2)」。この植民は435年頃のことと考えられる⁸⁰⁾。

このテキストには三つの異なる対象が現れ、それぞれに対する態度が異なっている。①ギリシア人諸都市に対しては友好的であり、②バルバロイに対しては威圧的であり、③シノペに対しては僭主を追放し、民衆に味方

している。シノベの周辺の土地は肥沃であり、黒海南岸のほぼ中央に位置し、良港に恵まれているため、海上交通の拠点であったのみならず、キリキアへ至る小アジア内陸における商業ルートの拠点でもあった。シノベは7世紀にミレトス人によって二度に渡って植民されたイオニア人の都市である⁸¹⁾。

(4) アミスス植民

そもそもアミススはシノベの植民市であった。アテナイ人による植民の経緯や規模は不明である。植民の時期も430年代の中頃としか言えない⁸²⁾。ストラボン、この近くのアマセイアという町の出身であったので、アミススの地理と歴史について詳しくまとめている。それによると「ガゼロン」の次にサラメネと重要な都市アミスス。シノベから約900スタディオン離れている。テオポムポスは、それは最初にミレトス人が建設し、・・・(二番目に)カッパドキアの首長が、三番目にアテノクレスとアテナイ人が植民し、ペイライエウスと名を変えたと云っている(Strab.12.3.14)」。植民者は彼らと同居したと思われる。

都市名の変更は、フクロウの図柄とΠειραιῶνの文字の刻印された4世紀のコインによって証明される⁸³⁾。このことは、アテナイ人がアミススを相当に重要な港と見なしていたことを示唆している。アミススは370年頃ペルシアに征服されるが、4世紀末にアレクサンドロス大王が自由を与え、再び名をアミススに戻した⁸⁴⁾。プルタルコス(Plut. Luc. 19.6-79、この都市が1世紀においてもなおアテナイの都市と見なされていたことを示している。

(5) アスタコス植民

この植民もまた経緯も規模も不明である。植民年代も正確には判らないが、443年より後か430年代と思われる⁸⁵⁾。ディオドロスは「これらのことが行われたのと同じ頃、アテナイ人はプロポンティスにあるアスタコスと呼ばれる都市を建設した(Diod.12.34.5)」と伝えるのみである。その時、都

市はオルピアに改名された⁸⁶⁾。この都市も興亡が激しく、ストラボンによれば「その湾の中にアスタコスという都市があった。メガラ人の、そしてアテナイ人の、そしてその後にドイダルサスの建設による。その都市に因んでその湾は名付けられた。それからリュシマコスによって徹底的に破壊された。またその住民をニコメディアへ、その都市の建設者は連れていった (Strab.12.4.2)」と伝えられる。先住民はドーリス人であったが、植民者は彼らと同居したと思われる。

4. 第二次ペロポネソス戦争

446/5年に締結された平和条約は431年に破られた。トゥキュディデスの記述によれば、ペロポネソス戦争の遠因は、ペロポネソス同盟を擁するスパルタの覇権とデロス同盟の盟主たるアテナイ新興勢力との避けがたい衝突であり、その直接的な原因は、コリントスとの軋轢で、具体的にはケルキュラ問題とポティダイア問題であった。これ以降の植民は、先住民に対する過酷さを増していった。

(1) アイギナ植民

アイギナはサラニカ湾内にあり、アルゴリス地方の東岸とアッティカの西岸の真ん中に位置するあまり肥沃ではないドーリス人の島である (Hdt. 8.46)。アテナイとアイギナはともに海軍国家で、もともと不仲だった。491年頃から既に戦争状態にあり (Hdt.6.87-93)、サラミスの海戦で活躍したアテナイの大艦隊は、そもそもは483/2年に対アイギナ戦に備えて建造されたものであった。ペルシア戦争中は休戦状態であったが、460年夏からアテナイはアイギナを激しく攻撃した (Thuc.1.105.2)。457年春アイギナ人はアテナイ人と協定を締結し、防壁の取り壊し、軍船の引き渡し、貢納金の査定を受け入れた (Thuc.1.108.4)。このことによってアイギナは強制的にデロス同盟に加盟させられたことになる。以後アイギナは貢納金を納めていた。

その後ペリクレスは「ペイライエウスの目脂のようなアイギナを拭い

去ってしまえ」と命じたと言われている (Aristot. *Rhet.* 3.10; Plut. *Per.* 8.5; Plut. *Demosth.* 1.2)。そして431年7月「アテナイ人は自分たちに対する戦争の責任の多くは彼らにあると非難して、アイギナ市民と婦女子をアイギナから移住させた。ペロポネソスの沖に浮かぶアイギナに自分たちの中から送り出されたエポイコイが住む方がより安全であると思われたからである。実際に間もなく、そこに植民者を送り出した(Thuc. 2.27.1)」。植民者の規模については不明である。

「追放されたアイギナ人に対してラケダイモン人は、テュレアに居住し土地の分配を許可した。というのは、一つには反アテナイ感情から、一つには地震の時に起こった奴隷反乱の際にアイギナ人が自分たちに恩恵をなしたからであった。テュレアの土地はアルゴスとラコニアの中間地帯であり、海に達する斜面を占めていた。アイギナ人の内のある者たちはそこに住み着いたが、他の者たちは他のギリシアの土地へ四散していった(Thuc. 2.27.2; 4.56.2; Plut. *Per.* 34.1; Diod. 12.44)」。ここまでなら後に見るポティダイア植民と同じ処置であるが、アイギナ植民の場合はより過酷であった。

424年夏アテナイはニキアスの指揮の下でアイギナ難民の受け入れ先であるテュレアを攻撃した。「その都市を焼き尽くし、財貨を略奪し、白兵戦で殺されなかった限りの者を(省略)連行してアテナイへ到着した。(省略)そしてアテナイ人は(省略)逮捕された限りのアイギナ人全てをかねてからの憎しみの故に処刑すべきことを欲した(Thuc. 4.57.3-5; Plut. *Nic.* 6.7)」。

405年のアイゴスポタモイの戦いの後(Xen. *Hell.* 2.2.9)、植民者は島から追放された。アイギナは自治独立を取り戻したが、アテナイ人に対するアイギナ人の憎しみは相当なもので、4世紀においては、アイギナで捕らえたアテナイ人は奴隷に売るべしという決議がなされていたほどであった(Plut. *Dion.* 5.7)。次章で考察するように、424年当時、先住民がギリシア人であっても彼らを抹殺するという方針は珍しいものではなくなっていた。

Ⅳ. クレオンの時代 —植民者なき植民—

1. 疫病の大流行

430年5月初旬、ペロポネソス軍の第二次アッティカ侵攻が開始されて間もなく、アテナイで疫病が発生した。以前にもレムノス島付近で疫病が流行ったことがあったが、これほどの規模のものは前代未聞であった。この時の状況は、実際にその場にいたトゥキュディデスによって克明に記録されている(Thuc.2.47-54)。彼は病状について医者さながらの観察眼をもって叙述しているが、それは彼がヒポクラテス派の中でも特に科学的な「病状記」の一派と密接な関係を持っていたことに由来する⁸⁷⁾。この疫病の感染力は非常に強く、放置された遺体を食べた鳥や獣までも死んでしまう程であった。431年5月以来ペリクレスの指導のもとに人々が地方の村々から集まり、アテナイ市内に籠城していた(Thuc.2.13-14)。それは、最小限の力で都市を防衛し、最大限の力を海軍に投入するという彼の戦法であった。そのため移住者たちには住む家もなく、小屋掛けの下に寝起きしていた。このような劣悪な状況が疫病の流行に拍車を掛けたことは間違いない。

歴史家トゥキュディデスは、この疫病が人々にもたらした心理的变化を見逃さなかった。次々と息絶えていく人々の死体は、他の死体の上に積み重ねられ、路上に累々と打ち捨てられた。泉の回りは水を求めてやってきた瀕死者たちであふれた。神殿にも屍の山が築かれた。このような状態に置かれた人間は、もはや神聖とか清浄といった宗教感情に無頓着になり、他人が準備した火葬場に先回りして、自分の持ってきた死体に先に火を付ける者、すでに焼かれている他人の死体の上に自分の持ってきた死体を投げ降ろす者などもいたと言う。彼は、この疫病こそがポリス生活全面にかつてない無秩序を生み出した最初の契機となったと指摘する。金持ちも貧乏人も等しく突如として死に、死人の持物を奪って金持ちになる者もいる。そんな風潮の中で人々は、取れるものは生きている間に取り、享楽に耽るべきだと考えるようになった。宗教的畏怖、社会的掟、人間に対する拘束力、そのような道徳的歯止めが、この疫病の蔓延によって失われてしまった。

2. ペリクレスからクレオンへ

429年の秋か冬にペリクレスもこの病気に罹って死亡した (Thuc.2.65.6; Plut.*Per.*38.1)。奇しくも、先の時代をリードしたペレクレスがこの病に倒れたこと自体、時代の画期を象徴している。権力を継承したのはクレオンであった。彼は従来の名門出身の貴族政治家たちとは異なり、工業家出身の新しいタイプの政治家の代表であった。それ故、彼らはデマゴゴスとして伝統的な貴族からしばしば誹謗された⁸⁸⁾。例えば、彼自身は皮鞣し業者であったので、アリストファネスの喜劇において、パフラゴニア人とか、皮臭いとか (Aristoph.*Eq.*892)、キュダテナイ区の犬 (Aristoph.*Vesp.*895) とか、卑しい生まれの教養のない者 (Aristoph.*Eq.*178-194;211-220) などと罵られ、「アテナイ人の国制」では、演壇上で叫んだり、罵倒したり、衣服を巻き上げたりした最初の人物として (Aristot.*Ath.Pol.*28.3)、その野卑な態度を嫌われている。

しかし実際には、彼は卑しい生まれでも無教養な人間でもなかった。彼は470年以前の生まれで、キュダテナイ区のクレアイネトスの子である。クレアイネトスは奴隷の皮鞣し工を使う工場を所有しており (Schol.*Arisoiph.Eq.*44)、公共奉仕も行ったことがあり、裕福な家庭の出であった。クレオンはペリクレスの生前から政治活動を始めていたらしく、そのような彼には教養もあり、取り巻きもいたはずである⁸⁹⁾。

トゥキュディデスは、ペリクレスを高く評価し、クレオンを敗戦の原因して悪く描いている。その理由の一つは、クレオンのせいでトゥキュディデス自身が425/4年のアムフィポリス攻防戦の失敗の責任をとってアテナイを追放されたからである⁹⁰⁾。この事実からも明らかのように、クレオンもトラキア方面に多大な関心を持ち、ペイシストラトス以来の鉾山の権益を継承しようとしたことは疑いない。しかし、むしろここで注目したいのは、彼の目的ではなく、彼が置かれた状況である。

3. 植民者なき植民

ペロポネソス戦争開戦前夜のアテナイの成年男子市民の人口は、35,000か

ら45,000あったと見積もられているが⁹¹⁾、疫病は426年まで断続的に繰り返し、その結果、人口の1/3以上が病死したと見積られる。疫病による市民人口の減少は、当時のアテナイ植民活動を規定したはずである。この時期の植民に概ね共通する特徴は、対象がデロス同盟のメンバーであり、彼らを武力で制圧した後に、成人男子は皆殺しにし、婦女子は奴隷に売するという残虐な処置をしたこと、またそうやって土地を獲得しながら、アテナイから植民者を送り出さなかったり、送り出したとしてもすぐに撤退させたり、ごく少数であったことである。つまりこの時代のアテナイは、懲罰と見せしめのために離反都市の住民を抹殺したが、人口不足のためにそこへ植民者を送り出したくても出来ない状況にあったと見られるのである。

本章で扱うレスボス植民は従来、常にクレルーキアすなわち軍事植民の典型と見なされてきた⁹²⁾。しかし、この評価は正しいのであろうか。従来の研究の方法論には、二つの欠点があったように思われる。①疫病による人的影響を考慮に入れなかったこと、②レスボス植民を同時期に建設された他の植民との関わりにおいて捉えようとしなかったこと。特に、ノティオン植民、トロネ（植民）、スキオネ植民は、アテナイ人自身が入植しなかったために、従来のクレルーキア研究ではほとんど無視されてきた。しかし、ポティダイア植民、メロス植民も含め、これら六つの植民を包括的に捉えてはじめて、レスボス植民を正しく評価することが出来るのではないだろうか。

(1) ポティダイア植民

ポティダイアはパレネ半島の地峡部に位置するコリントスの植民市、即ちドーリス系であり、5世紀には母市から毎年エビダミウルゴイと呼ばれる役人が派遣されていた(Thuc.1.56.2)。一方でデロス同盟に加盟し、初めは軍船を提供していたが、後に貢納金を支払うようになった⁹³⁾。しかしポティダイアは432年の3月か4月に、アテナイ、マケドニア王ペルディッカス、コリントスとの間の緊張関係から同盟を離反した。直ちにアテナイの包囲攻撃を受け、二年以上に及ぶ籠城を強いられた。その間に飢餓のため人食まで起こったという(Thuc.2.70.1)。そしてついに430/29年の冬に条

件付きで降伏した。

その条件とは「ポティダイアの市民および婦女子そして援軍は一枚の外衣、但し婦女子は二枚、それと旅費として決められた額の金を持って退去すべきこと(Thuc.2.70.3)」であり、「彼らは休戦を保証されて、カルキディケや各人が行ける所へ退去した。しかしアテナイ人は、本国の同意なしでそのような措置をとった將軍たちを叱責した(というのは、彼らはその都市を無条件降伏させるつもりだったからである)。彼らは後に、エポイコイを自分たちの中からポティダイアに送り出し、そこに住ませた(Thuc.2.70.4)」。植民は恐らく429/8年に行われたのであろう⁹⁴⁾。ディオドロスによれば、その規模は1000人であった(Diod.12.46.7)。出発の際に彼らがアテナ・ポリアスに捧げた奉納品の台座が残されている(M&L.66)。

ブレアと同様ポティダイアも建設当初は周辺諸ポリスによって守られていた。このことは、428/7年のポティダイアと周辺諸都市との関係を規定した碑文によって明らかとなる。「アフティス人はポティダイアにいる者たちに対して、以下の宣誓をなすべきこと。もしアテナイ人のポリスに対して、あるいはポティダイアに住んでいるアテナイ人のエポイコイに対して、何らかの敵が来襲した場合には、言葉においても行為においても、出来る限りアテナイ人を救援せよ(ATL.II,D21)」。ポティダイアは404年の終戦の時までアテナイの支配下にあったと考えられる。

(2) ノティオン植民

トゥキュディデスによれば、パクスによるノティオンの征服とそれに伴う植民は、それ自体を目的としたものではなく、それに先立つレスボス反乱の鎮圧行動の中で言わば突発的に行われたものであった。当時のデロス同盟諸都市のほとんどは、軍船や兵員を提供する代わりに貢納金を支払っていたが、レスボスとキオスだけは、貢納金を支払うことなく軍船を提供することによって完全な自治独立を維持していた。しかしレスボスは一枚岩ではなく、その島には、ミュティレネ、アンティッサ、ピュラ、エレソス、メテウムナの五つのポリスがあり、これらはいずれもアイオリス系の

ポリスであったが、最大のミュティレネが貴族政をとり、アンティッサ、ピュラ、エレススもそれに従っていたのに対して、メテュムナだけが民主政をとっていた。

428年6月中旬頃メテュムナを除くレスボス島の全市がアテナイとの同盟から離反した。時期は不詳であるが、レスボスは以前にも離反を計画したことがあると云う(Thuc.3.2.1)。今回も反乱の首謀者はミュティレネ人であった。他の諸都市を政治的に統合し、血縁関係のあるポイオティア人の勧めで⁹⁵⁾、スパルタ人と内通して反乱の準備を進めていた。アテナイはこの動きをメテュムナ人からの密告によって知った。そこでアテナイは先手を打って、40隻の艦隊をレスボスに派遣し、軍船の引き渡しと防壁の取り壊しを命じたが、ミュティレネはそれに従わなかったため、マレア岬を拠点として攻撃を開始した。その後、ミュティレネはスパルタとの同盟締結を果たし、援軍派遣とアッティカ攻撃の約束を取り付けたが、時すでに秋に入っていたので実行されなかった。冬にアテナイは、パケスを指揮官とする追加の艦隊を派遣して、ミュティレネを包囲した。427年6月末になってやっとスパルタは42隻の艦隊をレスボスに派遣し、同時にアッティカ侵攻も行った。しかしスパルタ艦隊がもたついている間に、籠城していたミュティレネ人の下層市民と富裕市民の間で食糧分配を巡って内紛が発生した。その結果ミュティレネ人はパケスに降伏を申し入れた。

一方レスボスへ向かったスパルタ艦隊は、ミュコノスカイカロスあたりに近づいた時に初めて、ミュティレネが陥落したことを知った有様であった。敵艦隊接近の知らせを受けたパケスは追撃したが、パトモス島付近まで追った時、あきらめてレスボスへの航路を引き返した。ノティオン植民はその途中に起こった出来事であった。「沿岸を航行し、再びコロフォン人のノティオンに船を着けた。そこには、内陸の都市が私的な内紛に乗じてイタマネスと彼の配下のバルバロイによって占領されて以来、コロフォン人が移住していた。占領は、ペロポネソス人の第二次アッティカ侵攻が行われたのとほぼ同じ時であった。しかしノティオンに避難して住み着いた者たちは、そこで再び内乱状態に陥った。ある者たちは、ピストネスの

もとから来たアルカディア人とバルバロイの傭兵を見方に引き入れ、要塞の中に住まわせて、内陸の都市から来たコロフォン人の内でペルシアに見方した者たちも一緒に中に入り、政治を行っていた。またある者たちは、それらのもとを密かに立ち去り、亡命者となって、パクスを見方に引き入れた。彼は、もし和解が得られなくても、再び無事に要塞に連れ戻すという条件で、要塞の中にいるアルカディア人の指揮官であるヒッピアスと会談した。ヒッピアスがパクスのところへやってくると、パクスはその者を軟禁し、自分は突如として要塞を攻撃し、迎撃する間も与えずそれを奪い、中にいた限りのアルカディア人とバルバロイを皆殺しにした。そうした後に、協定通りにヒッピアスを連れ出し、中に入るや否や、捕えそして射殺した。彼は、ペルシアに見方した者を除くコロフォン人にノティオンを引き渡した。後にアテナイ人は、オイキステスたちを派遣し、自分たちの法に従って、ノティオンを植民市として建設し、分散していたコロフォン人をあらゆる都市から集めた (Thuc.3.34)」

ノティオンはもともとはアイオリス人によって建設された港湾都市であったが、そこから約13km内陸にある古いイオニア人の都市コロフォンの外港としての機能を果たしていた。後にノティオンもコロフォンもコロフォン人の都市となり、デロス同盟に加盟し、それぞれ「ノティオン人」「コロフォン人」として別々に貢納金を支払っていた⁹⁶⁾。ここで注目したい点は二つある。一つは都市を牛耳っていたアルカディア人とバルバロイ傭兵を皆殺しにしたこと。これは実質的にはコロフォン人の解放と彼らの都市の再建を意味する。コロフォンはイオニア十二市の一つで、イオニア人の母市を自認するアテナイにとっては、当然の役目と見なされたであろう。もう一つはパクスによるノティオン征服の後に、アテナイからオイキステスたちを派遣し、自分たちの法に従って植民市を建設しておきながら、アテナイ人を入植させなかったことである。当時のアテナイがまだ疫病によって疲弊していたことはトゥキユディデスが明記している (Thuc.3.3.1)。

(3) レスポス植民

パケスは先にミュティレネを陥落させた時、艦隊をアンティッサに向け、すでにそれを制圧していたが、ノティオンを征服して再びミュティレネに戻ると、残りのピュレとエレソスも従属させた。ここにレスボス全島が降伏するに至った。427年6月末のことであった。彼は市内に匿われていたサライトス、テネドスに抑留中のミュティレネ市民、パケスが今回の離反の首謀者と判断した者たちと一緒にアテナイへ送還し、軍勢の過半も帰還させた。彼自身はそこに留まり、ミュティレネをはじめとするレスボス島全般の処理に当たった。

7月ミュティレネ市民の処分について開かれた最初の民会決議は非常に過酷なものであった。「怒りに駆られた彼らは、ここに護送された者たちのみならず、ミュティレネの成年男子を全員死刑にし、婦女子を奴隷にすることを決議した(Thuc.3.36.2)」。審議が終わると即刻、この決議をパケスに伝えるために三段櫂船が派遣された。しかし一夜明けると、アテナイの間にはこれではあまりにも過酷ではないかとの後悔の念が生じた。そのような雰囲気を感じに察知したアテナイ駐在のミュティレネ使節や親ミュティレネ的なアテナイ人は、決議の差し戻しを要求し許可された。

再び民会が召集されて、まず前日に極刑論を通したクレオンが登壇した。彼は、支配者にとって寛容は敵であり、今の支配を維持するためには、裏切られた時の怒りが薄れないうちに、即刻ミュティレネ人を抹殺し、それを同盟諸都市に対する見せしめとせよと主張した。これに対してディオドトスは、このような判断は性急に過ぎ、性急な判断は理性的ではないと反論する。しかし彼の反論の焦点は、ミュティレネ人が有罪か無罪かにあるのではなく、彼らを抹殺することがアテナイにとって得策か否かにあった。彼の見解は、支配者に必要なものは寛答であり、改悛の余地を与えることによって同盟諸都市の反乱が回避されるし、また一度起こったとしても、早期に鎮圧されるが、反乱都市の抹殺は、貢納金の減収を意味するゆえに、生かしておいて利用する方が得策であるというものであった。

両者の意見が述べられると、アテナイ人の意見は二つに別れ、挙手投票

の結果、ほぼ同数となったが、結局ディオドロスの提案が決議された。処刑取り消しを伝える三段櫓船が間一髪のところまで間に合ったという件は、「戦史」のクライマックスの一つをなす。結局、レスボス人の処罰は以下のようなものであった。「アテナイ人は、パケスが送った残りの者たちをその反乱の首謀者であるとして、クレオンの動議に従って全て処刑した（その数は1000人より少し多かった）。そしてミュティレネ人の防壁を取り壊し、軍船を取り上げた。後に貢納金をレスボス人に課すことはなかったが、メテムナ人の土地を除いて、その土地を3000のクレーロスに分割し、300を神々のための神域として除外して、残りに対して彼ら自身の内から籤に当たったクレールーコイを送り出した。レスボス人は自ら土地を耕して、彼らに1クレーロスにつき年2ムナの金を支払った。またアテナイ人は、大陸にあるミュティレネ人が支配していた諸都市を取り上げ、後にアテナイ人の支配するところとなった。レスボスに関することは以上であった（Thuc.3.50）」。

レスボス処分で特徴的なのは、土地賃貸が行われた点である。この点において従来、カルキス植民との類似性が指摘されてきた。しかしカルキスにおける土地賃貸は、おそらく公有地たる植民市の土地を植民者に対して賃貸したものであったと思われる。サラミスおよびレムノスの場合に見られるように、植民市における土地は本来、植民者が自ら耕作するものであり、それを第三者に又貸しすることが禁じられていた。従って、レスボスの事例とは別物と見なすべきであろう。

このクレールーコイについては二つの説がある。①クレールーコイはアテナイに留まって賃貸料を受け取り、それで生計を立てていたとする「不在地主説」⁹⁷⁾、②クレールーコイは現地に派遣されて、農業をせず軍事に専念していたとする「駐留軍説」⁹⁸⁾。前者は「貧民救済説」後者は「軍事植民説」とも言い換えることが出来る。レスボス植民にアテナイ帝国支配の先鋭化した姿を見ようとする点において両説は共通するが、クレールーコイが現地に送られたか否かについては真つ向から対立する。トゥキュディデスの「籤に当たったクレールーコイを送り出した」*κληρούχους τούς*

λαχόντας ἀπέπεμψανのアオリスト形が過去における事実を表記する用法であることから、クレルーコイは実際に現地に送られたとみるのが通説である。

それは認めるとしても、彼らは本当にレスボス周辺を軍事的に支配していたのであろうか。424年のレスボス反乱の時にも彼らに関する言及は見られない。それにも拘わらず駐留軍説を裏付ける証拠とされてきたものは、年2ムナの賃貸料である。この額は当時のゼウギータイ級の年収に相当するという⁹⁹⁾。この賃貸料によってテーテスがゼウギータイに上昇し、重装歩兵が増強されたと考えられてきた。確かに、この説は2ムナの説得的な意味付けに成功している。しかしまた、2ムナという額は5世紀における重装歩兵一人当たりの捕虜に対する身代金や罰金にも相当した (Hdt.5.77; 6.79; Thuc.5.49)。この観点に立つならば、2ムナの賃貸料は処刑を免れたミュティレネ市民に課された身代金とみなすことも可能ではないだろうか。この推測は後に試みるトロネ (植民) の考察によって補強されるだろう。

レスボスへのクレルーコイが現地に送られたとしても、彼らは早い段階で撤退したと見るべきだろう。そのことは、427/6年に刻まれた保存状態の悪い碑文から窺い知ることが出来る (IG.I³66)。そこには、「ミュティレネ人使節を翌日の饗応のためにプリュタネイオンに招待すべきこと」(24-25)が記され、アテナイとミュティレネの和解が読みとれる。これを要として考えれば、この殆ど不完全な碑文の中に見える「自治独立」αὐτο-[νό]μος(11)、「クレルーコイ」τοῖς κλε[ρό]χοις(17), τοῖς δὲ κλ[ερό]χοις(25)、「土地の返還」γὰρ ἀνταπόδο[σιν](26)というキーワードは、和解に伴うミュティレネの自治独立の回復、土地の返還、クレルーコイの撤退というふうに繋がってくる。

トゥキュディデスの記述とこの碑文を組み合わせるならば、レスボス処分の経緯は以下のように再現されるだろう。①クレオンによるレスボス人の皆殺し案の提出と撤回、②ディオドトスによる首謀者だけの処刑、防壁の取り壊し、軍船の没収、植民者の派遣、③和解と自治独立の回復、

植民者の撤退、年2ムナの賃貸料支払い。つまり、レスボス処分は三段階に分けてトーンダウンしたのである。人口不足という現実がそれを余儀なくしたのだろう。この考えが正しければ、レスボス植民は軍事植民の典型ではあり得ない。

(4) トロネ (植民)

アムフィポリスを奪取した後、423年初めブラシダスはそのを拠点としてトラキア地方におけるアテナイの同盟の切り崩しを開始した。彼はまずアクテ半島に兵を進め、アンドロスの植民市サネ、ペラスゴイ人の都市テュッソス、クレオナイ、アクロトオイ、オロビュクソス、ディオーン、およびビザルティア族、クレストニア族、エドノス族などの村々の大部分をアテナイから離反させ、スパルタ側へ付けることに成功した。トロネ占領もその一貫であった。423年夏ラケダイモン人とアテナイ人は、一年間の休戦条約を締結した。それは現状維持を原則として、双方は既得圏内に留まるべきことを規定したが、この条約の交渉中にスキオネが自発的にアテナイから離反した。ブラシダスはそのを拠点としてメンデ及びポティダイアを攻撃した。しかし後に、スキオネ離反が休戦条約発効の2日後に行われたことが判明し、クレオンはアテナイ市民を説得して、スキオネ遠征を決議させた。その後メンデも離反した。

この状況に対してアテナイは巻き返しを計った。ブラシダスは、アケドニア王ペルディッカスと共同でリュンコスアラバイオスへ遠征したが、その時に両者の間に不和が生じ、ペルディッカスはアテナイと和解した。これがきっかけとなって戦況はアテナイに有利となった。ブラシダスがマケドニアからトロネへ帰還すると、すでにメンデはアテナイに奪還されていた。そこで彼はパレネ半島を断念して、トロネの守備に専念した。アテナイ軍はメンデからスキオネへ軍を進めた。スキオネ人とペロポネソス軍はそれを迎え撃ったが、アテナイ軍は攻城壁を構築して、それを封鎖した。一年の休戦期間が終了すると、クレオンはアテナイ人を説得してトラキア討伐の軍団を派遣した。彼はまず、籠城中のスキオネに向かい、現地の重

装歩兵を加えて、トロネから遠くないコポス湾に船を着けた。ブラシダスが不在であり、守備隊も手薄であることを知ると、クレオンは攻撃し、陥落させた。ブラシダスも駆けつけたが間に合わず、そのまま引き返した。

トロネに対する処罰は以下の通りである。「クレオンとアテナイ人は、港のそばと城壁の前に二つの戦勝碑を立て、トロネ人の婦女子を奴隷に売り、トロネ市民とペロポネソス兵、その他カルキディケ人など、合わせて700人をアテナイへ送還した。そしてペロポネソス兵の捕虜は後に締結された休戦条約において、また残りの捕虜はオリュントス人の配慮によって、アテナイ人捕虜と一対一の条件で交換、解放された（Thuc.5.3.4）」。

トロネはシトニア半島の西岸にある良港を有する最も重要な都市で、カルキス人の植民市である¹⁰⁰⁾。従って彼らはイオニア人であった。アテナイは、婦女子は奴隷に売ったが、トロネ市民は殺さず、アテナイ人捕虜と一対一の条件で交換した。確かに、ここでは植民は行われなかった。しかしトロネに対するこの行為がヘスティアイア植民、アイギナ植民、メロス植民と同列に扱われていることは、後に見る史料から明らかである。従って、これを「植民者なき植民」の一つと見なして差し支えないだろう。

(5) スキオネ植民

421年3月頃アテナイ陣営とスパルタ陣営の間で五十年間の平和条約が締結された。これによって両陣営の間の戦闘行為が禁止され、双方の領土交換および捕虜交換が規定された。この中でスキオネに関してはアテナイが所有し、その処置はアテナイの裁決に委ねられるが、アテナイはそこに籠城中のペロポネソス兵、その同盟将兵、およびブラシダスが送り込んだ者たちの退去を認めなければならないというものであった。しかしその平和条約にはあまり効力がなく、双方の領土内で戦闘が行われることはなかったが、領土外ではしばしば紛争が起こっていた。スキオネに関しても、実際にはペロポネソスの守備隊は撤退しなかったようである。421年夏アテナイは実力行使してスキオネを奪回した。「それらのことと同じ頃、その夏に、アテナイ人はスキオネ人を包囲によって征服し、成人男子に死刑の判

決を下し、婦女子を奴隷として売った。そしてその土地をプラタイア人の所有に委ねた (Thuc.5.32.1;cf.Diod.12.76.3)。

スキオネはペレネ半島の南西岸にある都市で、ペレネの植民市と自称していた。ペレネはホメロスにおいてアカイア人の十二都市の一つとされている¹⁰¹⁾。土地をプラタイア人に与えたのは、一部のプラタイア人がアテナイ市民権を賦与されていたからであった (Thuc.3.55.3)。

(6) メロス植民

メロスはラケダイモン人の植民市であったので、住民はドーリス人であった。彼らは、他の島々とは違って、アテナイの支配下に入ることを拒み、431年の開戦当初から中立を保っていた。しかし実際にはスパルタに軍資金を提供していたことが知られている。アテナイからは一方的に貢納金の査定を受けたが、その納付を拒否した。426年夏にアテナイは三段櫓船30と重装歩兵2000をメロスに派遣し、同盟への加盟を要求したが、拒否された。416年夏それを上回る軍勢を率いて再び遠征した。

アテナイ軍の指揮官クレオメデスとテイシアスは、メロスに到着して陣地を設営すると、攻撃を開始する前にメロス人との交渉を行った。これが所謂メロス対話である。しかし彼らの間にこのような対話が実際に交されたかどうかは疑わしい。交渉が決裂すると、さっそくアテナイ軍は攻撃準備を開始した。まず彼らはポリスの周辺に攻城壁を構築し、それが完成すると、守備隊に都市の封鎖を命じ、過半の軍勢を撤退させ、残った者たちは包囲を続けた。夏の間は散発的な戦闘が行われたが、冬に総攻撃が開始された。「メロス人は同じ頃再び、アテナイ軍の攻城壁の守備が手薄になっていた別の部分を奪った。このことが起こったので、デメアスの子フィロクラテスが指揮する別の遠征軍がアテナイから到着した。すでに包囲戦は力づくとなり、また裏切りもあったので、自分たちについてはアテナイ人が望むように処置するとの条件で、自分たちからアテナイ人に降伏した。アテナイ人はメロス人の内で捉えた限りの成人男子を死刑にし、婦女子を奴隷に売った。その領土は彼らが植民市し、後に500人のアポイコイを送っ

た(Thuc.5.116.2-4;cf.Diod.12.80.5;Andoc.4.22-23)」。この時までには、アテナイは再び植民者を送り出すことが出来るようになった。しかしその数は僅か500人に過ぎなかった。

4. アイゴスポタモイの海戦

多少の斟酌や未遂があったとは言え、同じギリシア人の市民を処刑し、婦女子を奴隷に売るという一連の冷酷な行為は、どうしても正当化することが出来なかった。そのことは405年にアイゴスポタモイの海戦でアテナイが大敗北を喫した時にアテナイ人自身が抱いた恐怖が雄弁に語っている。「夜パラロス号が到着すると、アテナイ人の間に訃報が伝わった。嘆きの声は、ペイライエウスから大防壁を通してアテナイ市街へ、人から人へ語り継がれた。このためその夜は誰一つとして眠る者はなく、彼らは戦死者を悼むのみならず、むしろいっそうわが身を嘆いた。彼らは、ラケダイモン人のアポイコイであるメロス人、ヒスティアイア人、トロネ人、アイギナ人、その他多くのギリシア人たちを包囲攻撃によって征服したように、自分たちも征服されるのだと悟ったからである(Xen.Hell.2.2.3;cf.Isocr.4.100;12.63;Diod.13.30.6)」。

V. ティモテオスの時代 一失地の回復一

1. ペロポネソス戦争の終結

アテナイの敗戦は決定的となった。スパルタのこの勝利の背景には、ペルシアの陰の力があつた。スパルタは既に411年からペルシアと同盟関係にあり、戦争を終結させるための資金援助を受けていた。その代償は小アジアのギリシア人ポリスに対するペルシアの支配権の承認であつた。この密約は勿論、アテナイの支配からギリシアを解放するというスパルタの掲げたスローガンと矛盾するものであつた。この矛盾が4世紀の最初の三十年間のギリシア史を動かす原動力の一つとなつた。

(1) サラミスを除く全植民市の喪失

正式な平和条約の締結より前にアテナイ植民市の崩壊は始まっていた。リュサンドロスは、出来るだけ早くアテナイを降伏させるために、ヘレスポントスを封鎖して黒海からアテナイに向かう穀物輸送を遮断すると同時に、海外にいるアテナイ人を強制的に帰国させた (Xen. *Hell.* 2.2.2)。

404年4月、6ヶ月間の包囲の後、飢餓に苦しめられたアテナイはスパルタと平和条約を締結した。その条件は以下の4点。①サラミスを除く全ての海外領土の放棄、②都市の防壁と長城の破壊、③12隻を残した他の艦船の放棄、④父祖の国制の採用。この条件は寛大な措置であった。同盟国として勝利したテーベとコリントスは、アテナイの全ての成人市民を処刑し、婦女子を奴隷に売るべしとの過酷な措置を主張したが (Xen. *Hell.* 2.2.20; Plut. *Lys.* 14.4; Diod. 14.3.2; Aristot. *Ath. Pol.* 34)、政治的配慮からスパルタはそれを拒否した¹⁰²⁾。

条約は全ての植民者の引き揚げを要求したのではない。レムノス・イムプロス・スキュロスは先住民に返還されず、植民者はそのまま居残り、母市から政治的に分離されて自治独立とされた。そのことは、404年の休戦条約と391年のそれとを比較して「レムノス、イムプロス、スキュロスはその時には所有する者が所有すべきことが、しかし今回は我々のものたるべきことが」決議されたというアンドキデスの言葉から明らかである (Andoc. 3.12)。実際にはその他にも存続した植民市はあったかも知れない。

戦後のアテナイには多くの引揚者がいたに違いない。彼らにアッティカの土地が用意されたというケースは希であろう。大抵の場合は、エウテロスの様に「国外の財産を失い、アッティカには父親が何も遺してくれなかった (Xen. *Mem.* 2.8.1)」という状況であったと推測される。戦争によって人口が減少したとはいえ、アテナイには相当な人口圧がかかったと思われる。それ故に4世紀におけるアテナイ植民活動の主要な目的は、失地を回復して引揚者に再び土地を与えることであったに違いない。

スパルタ占領下のアテナイは間もなく内乱状態に陥った。403年には民主政が復活するが、国力を回復するには約10年の歳月が必要であった。一方

スパルタは、小アジアのギリシア人ポリスを除く、ビュザンティオンからロドスまでの諸ポリスを含む帝国を築き上げた。スパルタの覇権は371年まで継続するが、それに対する抵抗運動の中でアテナイは失地を徐々に回復していった。

小稿の残された頁はその道筋を辿ることに費やされるが、結論を先取りすれば、種族イデオロギーはもはや機能しなくなった。従って、植民に対するアテナイの心的態度もこの時に大きく変化したと見るべきであろう。

2. コリントス戦争

ギリシア人の解放と小アジアのギリシア人の切り捨てという矛盾は、戦後間もなく露見した。アテナイの降伏の直前、この密約を取り結んだペルシア王ダイレオスが病死し、王位はその子アルタクセルクセスが継承した。野心的な弟キュロスは、兄の殺害を計画したが発覚し幽閉された。それまで彼がサトラップとして統治していたイオニア地方は、ティッサフェルネスに委譲された。母の取りなしによって釈放されたキュロスは、401年イオニア地方のギリシア人を動員して、兄に対する反乱を起こした。スパルタは、ペロポネソス戦争末期にキュロスから多大な資金提供を受けていたので、その反乱に荷担した。ギリシアからは10000人の傭兵が徴募された。結局、反乱は失敗に終わった。キュロスはクナクサで殺害され、イオニア人はティッサフェルネスの支配下に置かれた。守護者を失ったイオニア人は、400年スパルタに使節を派遣して「全ギリシア人の守り手」たる彼らに保護を求めた(Xen. *Hell.* 3. 1.3)。スパルタは、ギリシア人解放のスローガン掲げ、事実上ペルシアと交戦状態にあったので、それを承諾した。この行為は密約の破棄を意味した。

ここで注意すべき点は、イオニア人がスパルタに支援を求めたということである。勿論、当時のアテナイには望べくもなかったことではあるが、ここにおいて種族イデオロギーは破綻したと言える。

当初スパルタは、ハルモスタイと駐留軍を設置してペルシアに対抗していたが、雇い主を失って帰国途中にあった10000人の傭兵の内、約半数がこの戦争に参加したことによって、スパルタの軍力は飛躍的に強化された。ティ

ブロン、後にデルキュリダスは、すぐにヘレスポントスまで解放戦線を拡大した。しかしスパルタは、それほどの軍隊を維持する確固とした財源がなかったため、出来るだけ有利に停戦へ持ち込むことを目論んだ。ところが397年末ペルシア王が大規模な艦隊を建造中との知らせが入った時、スパルタは調停路線を捨て、徹底抗戦の構えに入った。396年初頭スパルタは8000の追加部隊と共にアゲシラオスを派遣した。彼は小アジアの諸ポリスをまとめ上げ、ペルシア人の所領を荒らした。395年夏にはペルシア支配の拠点サルディス、次いでもう一つの拠点ダスキュリオンを攻撃した。また、捕らえたペルシア人を裸にしてパレードさせるなどのデモンストレーションも行った。この時までには、小アジアの解放は実現されたかに思われた。

このような状況を苦々しく思ったペルシアは、アゲシラオスの軍隊をギリシア本土に撤退させるため、スパルタに二正面戦争を強いるよう画策した。即ち、ロドス人ティモクラテスをギリシアに派遣し、スパルタに敵対的なコリントス、テーベ、アテナイ、アルゴスに対して密かに軍資金を提供し、本土における反スパルタ同盟の結成を促したのである。そして395年コリントス戦争が勃発した。394年春スパルタ当局は、本土での戦闘に当たらせるため、アゲシラオスを召還した。解放戦争の勝利を確信していたイオニア人も、彼に従って本土に渡って行った。ペルシアの思惑はまんまと成功した。

(1) レムノス・イムブロス・スキュロスの復帰

ペルシアはまた、スパルタに対抗する勢力としてアテナイの復興にもテコ入れした。ペルシアは、アイゴスポタモイの海戦以来キュプロスに亡命していたアテナイ人コノンにペルシア艦隊の指揮を執らせた。394年夏彼はファルナバゾスと合流して、クニドス沖の海戦でスパルタ海軍を粉砕した。その後、両者はヘレスポントスへ北上し、次々とスパルタの拠点を陥としていった。数ヶ月の後には、セストスとアビュドスを除いて、ハルモスタイも駐留軍も駆逐され、小アジア水域からスパルタの海軍は一掃されていた。ペルシアの艦隊ではあったが、アテナイ人が指揮を執ってスパルタに勝利したことは、アテナイ人に勇気を与えた。同じ頃コノンは、ペイ

ライエウスの防壁再建に着手し、392年までにはレムノス・イムブロス・スキュロスの三島を再びアテナイの植民市としていた¹⁰³⁾。アテナイの復興は火を見るより明らかであった。

392年ペルシアとアテナイとの接近を恐れたスパルタは、アンタルキダスをサルディスに派遣し「ラケダイモン人はアジアのギリシア諸ポリスが自分のものであると王に主張しないし、全ての島々と他の諸ポリスが自治独立であることに満足する (Xen. *Hell.* 4.8.14)」と述べ、ペルシアとの良好な関係を取り戻そうとした。それを聞いたアテナイは「諸ポリスと島々が自治独立となることに合意すれば、レムノス、イムブロス、スキュロスも奪い去られるのではないかと恐れた (Xen. *Hell.* 4.8.15)」と伝えられている。結局この交渉は、現状維持をよしとしたアルタクセルクセスによって一蹴された¹⁰⁴⁾。

391年から390年にかけてスパルタは、ロドス、サモス、レスボスなどの島々を取り戻した。389年ヘレスポントスの封鎖を危惧したアテナイは、トラシュプロスをケルソネソスに派遣した。ことここに及び、戦線は本土から小アジアへ引き戻されることとなった。一方ペルシアは、388年末頃にはエジプトおよびキュプロスの離反に悩まされており、小アジアの問題にはこれ以上は拘わりたくないと思っていた。停戦の機は熟した。スパルタは再びアンタルキダスをアルタクセルクセスの許に派遣し、392年の提案とほぼ同じ内容で休戦を締結することに成功した。以後、スパルタはペルシアの同盟としてヘレスポントスのアテナイ軍と交戦した。387年末スパルタとペルシアの結合によって劣勢に立たされたアテナイも平和条約に応じる準備が出来た。

(2) レムノス・イムブロス・スキュロスの承認

コリントス戦争は386年の「王の平和」によって終結した。この条文は当事者によって協議されたものではなく、王の勅令としてサルディスに集会したスパルタ人、アテナイ人、その他のギリシア人使節に対してティリバゾスが読み下したものである。「ペルシア王アルタクセルクセスは以下のこと

を正義と見なす。アジアにおける諸ポリスおよび島々の内、クラゾメナイとキュプロスは余のものたるべきこと。他のギリシア人諸ポリスは大小を問わず自治独立のままであるべきこと。但しレムノス・イムプロス・スキュロスは例外である。これらは昔と同様にアテナイ人のものたるべきこと (Xen. *Hell.* 5.1.31)。」

この勅令によって、小アジアは王のもの、島々は原則的に自治独立とされ、411年の密約がついに果たされた。但し二つの例外がある。島々の内、①クラゾメナイとキュプロスは王のものたるべきこと、②レムノス・イムプロス・スキュロスはアテナイのものたるべきこと。つまりペルシア王によって、これら三島はアテナイ固有の領土として承認されたのである。このことは392年の条件にはなかった。そこには、アテナイに対するペルシアの特別な配慮が窺われる。一つには、これら三島がアテナイにとってなくてはならないほど重要な存在であったこと¹⁰⁵⁾。もう一つは、三島を返還することによってアテナイとスパルタの勢力均衡を計ったものと思われる。またしてもペルシアの外交の勝利と言うべきであろう。

では三島の返還を正当化したのは何であろうか。それは「昔と同様に」という表現が示しているように、密接な関係の既成事実そのものであった。この関係は、406年のアルギヌーサイの海戦の後にスパルタが提案した平和条約に既に確認される。その時アテナイは「アッティカに加えて、レムノス、イムプロス、スキュロスを所有すべきこと、そして慣習に従って民主政体を保持すべきこと (Aesch. 2.76)」が認められていた。このような不可分な関係は、恐らく413年のシケリア遠征失敗の後の引き締め策から生じたのであろう。

もう一つ、アテナイとこれら三島の関係を正当化する言説として注目すべきは、植民者の呼称の変化である。5世紀には貢納表や文献史料において「レムノス人」「イムプロス人」(スキュロスは史料に現れない)として現れ、貢納金を支払い、軍役にも従っていた。413年のシケリア遠征軍に関してトュキュディデスは「アテナイ人はイオニア人であり、(省略)彼らとまだ同じ法律と言葉を持っているレムノス人とイムプロス人は、アテナイ

のアポイコイであり、共に遠征に参加した」と記述している (Thuc.7.57. 2)。一方4世紀になると、植民市の評議会・民会決議は自分たちのことを「ミュリナに住むアテナイ」「ヘファイスティアに住むアテナイ人」「イムプロスに住むアテナイ人」「スキュロスに住むアテナイ人」というように「アテナイ人」と呼ぶようになり¹⁰⁶⁾、アッティカのアテナイ人も彼らを「我々の市民」(Dem.4.34; 23.12)、これらの島々を「我々の領土(クテーマタ)」(Aisch.2.72; Dem.4.27)と呼ぶようになる。つまり、5世紀には政治的分離を認めた上で種族的絆を強調していたのに対して、4世紀には種族的絆には触れず政治的一体性を主張するようになったのである。

3. 第二次アテナイ海上同盟

386年の王の平和によって、小アジアにあるギリシア諸ポリスはペルシアの支配下に入ることとなった。そのことはペルシアに対する貢納と軍役の義務を意味する。平和締結後間もなく、ペルシア王は懸案のキュプロスおよびエジプト遠征を開始した。小アジアのギリシア人は専らこの遠征に駆り出されることとなった。この遠征はエジプトが征服される343/2年まで続いた。ペルシア王の関心が小アジアから東地中海へと移っている間、小アジアでは360年代から350年代にかけてサトラップの反乱がしばしば起った。相次ぐ反乱は、アルタクセルクセスが老齢であり、近い将来の王位継承問題と密接な関係があった。小アジアにおける王の影響力は弱まっていた。ギリシアの問題についても、ペルシアは直接的には手を出さず、当面はスパルタを王の平和の監督役として任命し、統治に当たらせていた。

一方、小アジアの外にあるギリシア諸ポリスは、王の平和によって自治独立とされることになった。しかしこの自治独立とは互いのポリスがバラバラになっている状態を狙ったもので、それはスパルタやペルシアに対する無防備を意味した。386年から371年まではスパルタ支配の時期であった。ペルシアとの関係を繋ぎ止めたスパルタは、王を後ろ盾としてアウトノミア条項を恣意的に運用した。自らを守る術のない諸ポリスは、一度ペルシア王の関心が東地中海に移ると、それに乗じてアテナイを核とする対スパルタ防御同盟

を次第に形成していった。

アテナイは最初384年にキオスと同盟を締結した。次に378年にピュザンティオンと、377年にはメテュムナ、ロドス、ミュティレネと同盟を締結した。これらの個別の同盟は、377年に第二次アテナイ海上同盟としてまとめ上げられた。同年の同盟結成規約を記した碑文には(*Tod.* 123)、規約の下から左側面にかけて、それぞれ異なる手によって約60のポリスと個人のメンバーの名が刻まれている。このことは、新たなメンバーが加わる度にその名が刻まれていったことを物語っている。注目すべきは、同盟ポリスに対して5世紀のアテナイ帝国支配が復活するのではないかという危惧を与えないように、①諸ポリスの自治独立と彼らが欲する国制を持つことを保証し、②アテナイによる貢納金徴収の禁止、③駐留軍およびアルコンの派遣の禁止、④同盟ポリスの領土におけるエンクテーマタの放棄が明記されていることである。

(1) エンクテーマタの放棄

④は植民活動を直接的に抑制した。「アテナイ人およびその同盟に対して同盟を結ぶポリスから、アテナイ人のデーモスは、私的所有であれアテナイ人の公的所有であれ、同盟を結んだポリスの土地に今あるエンクテーマタを放棄すべきこと (25-30)」。「ナウシニコスがアルコンの時から、私的にであれ公的にであれ、同盟諸ポリスの土地において、家屋であれ土地であれ、エンクテーマタを所有することは、いかなるアテナイ人にも許されざるべきこと (35-41)」。

王の平和によってアテナイ固有の領土と確定されたレムノス・イムプロス・スキュロスがこの禁止条項の対象にならなかったことは間違いない。エンクテーマタとは、外国のポリスの領土内における不動産を意味する。従って、ここで禁止されたのは、5世紀におけるケルソネソス・ナクソス・エウボイアのような同居型の植民を指していると思われる。

(2) サモス植民

スパルタの覇権は371年のレウクトラの戦いをもって終焉を迎え、替わっ

てテーベが台頭した。367年の王の平和の更新の際に王はテーベをその平和の監督官に任命した。アルタクセルクセスがテーベに対して好意的な態度を示したのに対して、366年アテナイは自らの存在を誇示する目的で小アジアに遠征軍を派遣した¹⁰⁷⁾。指揮官はコノンの子ティモテウスであった。折しもアリオバルザネスの反乱の最中であり、ペルシアの手薄を突いた行動であった。ティモテオスの軍隊はサモスを包囲攻撃し、10ヶ月後に占領した(Isocr. 15.111; Demosth. 15.9; Nepos. *Tim.* 1)。365年夏に彼はケルソネソスのセストスとクリトテも征服した。同年アテナイは直ちにサモスに植民者を派遣した。これが4世紀になってアテナイがはじめて武力で獲得した植民市である。当時サモスは王の平和に反してペルシアの領土となっていた。サモスは第二次海上同盟に加盟していなかったため、植民は同盟規約の違反には当たらなかった¹⁰⁸⁾。

サモスは歴史時代にはイオニア人の島となっており、イオニア十二市の一つに数えられていた。ペルシア戦争の後デロス同盟に加盟した。440年に寡頭派の主導でアテナイから離反したが、ペリクレスの遠征によって直ちに鎮圧され、政権は民主派に返還された。412年に寡頭派は再び離反を試みるが、民主派によって未然に防がれた。405年のアイゴスポタモイの敗戦の後にも、アテナイに忠誠を誓った。それに報いてアテナイは、サモスに完全な自治独立とアテナイ市民権を賦与した (*M&L.* 94; *Tod.* 97)。サモスは最初から最後まで貢納金を支払わず軍船を提供した¹⁰⁹⁾。

これ程に親しいサモスに対して、アテナイは三次に渡る植民団を送り込んだ。それぞれの経緯については殆ど何も判らないが、年代は判明する。第一次植民は365年 (Diod. 18.18.9)、第二次植民は361年 (Schol. Aesch. 1.53)、第三次植民は352年 (Dionys. Hal. *Deinarch.* 13.1) である。植民者の数についても2000人という記録はあるが (Heraclid. 10.7; Strab. 14.1.18)、それがどれか一回の植民のものなのか、あるいは全部の合計なのか判明しない。ヘラクレイデスはアテナイ人は全てのサモス人を追放したと伝える (Heraclid. 10.7; Zenob. 2.28; Aristot. *Rhet.* 2.21.13)。しかし僅か2000人で全てのサモス人を追放できたとは考えられない。むしろこれが第三次

植民の数で、アテナイは第一次と第二次植民で相当数の植民者を送り込んでおり、最後の一押しで全てのサモス人を追放してしまったと取る方が理解しやすいだろう。

サモスにおけるアテナイ植民者の評議員会および役人の名簿と思われる碑文がサモスで発見されている¹¹⁰⁾。それはほぼ真四角な石で、その二面に11のコラムがあり、十部族毎に記された人名リストとサモスの名祖アルコンをはじめとする各種役人のリストが刻まれている。これは352年の役人のリストと思われるが、興味深いのはその人数の多さである。各部族から25人ずつが記されていることから、アテナイ植民者のサモスは250人評議会を有していたことになる。これはアテナイの500人評議会の丁度半分の規模に当たる。従って6000人から12000人程の成人男子が植民していたことになる¹¹¹⁾。

324年アレクサンドロスはオリュムピアの祭典において、全ての追放者の帰国を宣言した。20000人以上の群衆が喝采して喜んだという。しかしサモスを籤で分配していたアテナイ人は、決してその島を引き渡そうとせず、時を見計らって大王との戦争をも辞さない構えを示した (Diod.18.8.7)。このことは既に述べたような大規模な植民者を送り込んでいた事情を考えれば納得がいく。翌年に大王が急死したためにサモスの返還は免れたが、結局は322年ラミア戦争の末ペルディッカスが43年ぶりに亡命していたサモス人を祖国へ連れ戻した (Diod.18.18.9; cf. Diod.Laert.10.1)。報告書によれば、例のリストの人名はノミで丁寧に削り取ってあったらしい¹¹²⁾。サモス人の憎しみが窺われる。

同盟規約によって植民を限定されたアテナイは、一カ所に集中して移民団を送り出すより方法がなかったのだろう。それにしてもイオニア人の母市を自認したアテナイが同じイオニア人のポリスであり、しかも長らく特別に親しい関係にあったサモスを徹底的に占領したこの行為は、5世紀の種族イデオロギーの明らかな放棄と見なせざるを得ない。デマデスは「アイギナをペイライエウスの目脂、サモスをアテナイの破片と呼んだ (Athen.3.99.d=3.55.24)」と云う。ここでも植民化の正当性は、徹底した

占領に基づくアテナイの一部という既成事実であった。

4. マケドニア王国の興隆

424/3年以来アムフィポリスを喪失していたアテナイは、371年から再獲得を目論みはじめた。それは永久に成功しなかったが、アテナイ植民史を考察する上では見逃すことの出来ない事件である。なぜならば、既に見たように、6世紀から既にアテナイはストリュモン河畔の金鉱山に利害を持ち、時の権力者は皆その地の獲得に勢力を費やしたからである。

4世紀におけるアムフィポリスの再獲得運動は、マケドニア王国の興隆の中で考察されるべきであろう。初期のマケドニア史には一つの風土病があったと言われている。即ち、マケドニアの地は森林および鉱山資源に恵まれていたが、各地方が地理的に孤立していたために、王国の統合が遅れていた。また王位継承の原則がなかったために、代替わりの度に内紛が生じた。それにつけ込んでイリュリア人が略奪にやってきた。王は外敵とライバルから自己の王権を守るために、資源と引き替えにギリシアの有力勢力の援助を必要としていた。このような状態は、フィリッポス2世が即位した後、王国を統合して強力な軍隊を創設するまで続いた¹¹³⁾。

アムフィポリスを巡る戦争には二つの段階があった。最初はマケドニアがまだ弱小であった頃、オリュントスとの攻防の段階、次はフィリッポスの即位によって強大となったマケドニアとの攻防の段階である。ポティダイア植民はその中間に位置づけられる。

(1) アムフィポリスを巡るオリュントスとの戦争

オリュントスはカルキディケ同盟の盟主であり、4世紀初頭にはエーゲ海北部における一大勢力となっていた。その起源はペロポネソス戦争に遡る。5世紀の後半、カルキディケの諸ポリスはデロス同盟のメンバーであった。ペロポネソス戦争前夜にポティダイアが離反した時、マケドニア王ベルディッカス2世は、アテナイの勢力浸透を恐れて、カルキディケの諸ポリスが総決起するよう啖じた。その際にカルキディケ人がオリュントスに

集住したのが発展の出発点であった (Thuc.1.58.1-2)¹¹⁴⁾。オリュントスの興隆に警戒心を抱いたスパルタは、382年から包囲攻撃を開始し、379年に陥落させ、カルキディケ同盟を解体させた。371年にスパルタがギリシアの覇権を失った時、オリュントスは再びカルキディケ同盟を結成して、北部の一大勢力となった。

その後オリュントスは膨張政策を取り始めた。アムフィポリスを手中に納めようと画策し、マケドニアの王位争いにも介入した。丁度その頃、アテナイもアムフィポリスを再獲得しようと計画していたので、両者の利害の衝突は避けられなかった。アテナイがアムフィポリスに大遠征隊を派遣すると (Aesch.2.27.32)、オリュントスも対抗して軍隊を派遣した。同時にオリュントスは、マケドニア王プトレマイオスの王位を狙うパウサニアスに軍事支援した。プトレマイオスはアテナイに支援を求め、同盟を結んだ (Aesch.2.27-9)。間もなく、今度はテーベのペロピダスがマケドニアにおける自己の影響力を維持するためにプトレマイオスに同盟を強要した。王位の安定を計るためにプトレマイオスは、アムフィポリスに同盟を求めた。アテナイを脅威に感じていたアムフィポリスはプトレマイオスとの同盟を締結した (Dem.23.149)。アテナイ人はこの行為を背信と受け止めた (Aesch.2.29)。一方、アムフィポリスはプトレマイオスとの同盟を履行せず、オリュントスに自らの都市の支配を委ねた¹¹⁵⁾。

プトレマイオスを暗殺して正統な王位を継承したベルディッカス3世は、自らの地位を確保するためにアテナイと同盟を締結し、その見返りとして、アムフィポリスを巡るカルキディケ同盟との戦争においてアテナイ支援を約束した (Dem.2.14;Schol.ad.loc.)。アテナイはカリステネスを派遣して成功を収めつつあった。恐れたアムフィポリスは今度はマケドニアに同盟を求めた。アムフィポリスへの影響力の獲得を目論んだ王は、アムフィポリスに駐留軍を設置した (Aesch.2.29;Diod.16.3.3)。この行動はマケドニアとアテナイとの戦争を引き起こした。カリステネスはマケドニアを攻撃した。

(2) ポティダイア植民

それと同時にアテナイはカルキディケにおいても交戦状態にあった。363年ティモテオスは、ピウドナ、メトネ(Dem.4.4; *Tod*.143)、ポティダイアを征服した(Diod.15.81.6; *Isocr*.15.113)。361年夏その中で最も重要なポティダイアへ植民者が派遣された。アテナイは「ポティダイアから派遣された国家の使節たち」の植民者派遣要請に応じて、クレールーコイの派遣を決議した(*Tod*.146)。植民者の規模は判らない。ポティダイアは第二次海上同盟のメンバーであったので、この植民は同盟規約に反するものであった¹¹⁶⁾。ポティダイアは歴史的に見て、アムフィポリスへの足がかりとしての意味があったのであろう。356年のはじめ、ポティダイアはフィリッポスによって奪取された(Diod.16.8.5)。

(3) アムフィポリスを巡るフィリッポスとの戦争

カリステネスはベルディカスと休戦条約を結び、アムフィポリスを奪うことは出来なかった。ベルディカスは360年に侵入したイリュリア人に殺されるまで、アムフィポリスを保持していた(Diod.16.3.3)。この年フィリッポスが事実上マケドニアの王位に就いた。彼は王権の安泰、王国の統合、兵制改革を完了するまでは控えめな外交をした。アテナイ人を喜ばせるために、アムフィポリスの駐留軍を撤退させ、アテナイと同盟を締結した。アテナイ人はそれでもアムフィポリスを陥落させることは出来なかった¹¹⁷⁾。

王権の基盤が固まるや否や、357年に彼は突如アムフィポリスを占領した(Diod.16.8.2)。アテナイ人は驚いたが彼を止めようとはしなかった。アテナイ人は彼が占領するとすぐその都市を自分たちに委譲するだろうと信じていたからであった。アテナイ人は、始めオリュントス人から、次にアムフィポリス人から救援の依頼を受けたが、それを拒否した(Dem.1.8-9; Dem.2.6; [Dem].7.27)。一度アムフィポリスを占領したフィリッポスは、パンガイオン山から豊富な金銀を獲得し、潤沢な軍資金を得ることに成功した(Diod.16.8.2, 6-7)。彼は決してアテナイにその都市を明け渡そうと

はしなかった¹¹⁸⁾。

356年ギリシア中央部では第三次神聖戦争が勃発した。フィリッポスはそれに介入しつつ、北部ではアムフィポリスを巡るアテナイとの戦争を戦っていた。フィリッポスはまずオリュントスと同盟を結び、アテナイが抑えていた諸都市を占領していった。350年代末フィリッポスの勢力伸張を恐れたオリュントスはアテナイに救援を求めた。オリュントスはまた王位を狙うフィリッポスの兄弟を取り込もうと画策した。フィリッポスはこのことを裏切り行為と見なし、大軍をカルキディケ同盟に対して派遣した。アテナイも救援を派遣したが間に合わなかった。348年ついにオリュントスは陥落し、徹底的に破壊された(Dem.19.192;Diod.16.53.2,55.1)。346年フィロクラテスの和約によってフィリッポスと同盟を結び、アテナイはアムフィポリス獲得を断念させられた(Aesch.2.13,82;Dem.19.150)。ここにアムフィポリスを巡る戦争は終結した。パンガイオン山を手中に納めた者が覇権を握ると言っても、言い過ぎではないかも知れない。

5. オドリュサイ王国の興亡

ケルソネソス半島はトラキア東部の一部を構成する。マケドニア王国がそうであったように、トラキア王国も概して王権が弱く、王位継承の度に内紛が起こった。そのため王たちは、外部勢力との結託によって自己の地位の保全を計らなければならなかった¹¹⁹⁾。彼らはその見返りとして、協力者に豊富な金鉱山の恩恵に与らせていた。ケルソネソス植民はトラキア王国の内部事情との関わりで考察する必要がある。

オドリュサイ王国は、5世紀の中頃に起こった最も強力なトラキアの部族連合である。王国はシタルケス王の下424年までに南北はトラキア海からドナウ河まで、東西は黒海からストリュモン河まで領土を拡大し、ペロポネソス戦争初期には、アテナイと同盟関係にあった。424年の遠征中に王が死去すると、その甥のセウテスが王位を継承した。彼は版図を最大にし、貢納金を徴収した。しかし405年頃に王が死去すると、帝国はほぼ20年間の衰退期に入った。その間に三人の王が立ったが、その内の二人は暗殺された。王国は二人

の対立王たちの中で内陸部と海岸部に分断された¹²⁰⁾。

アイゴスポタモイの海戦の後¹²¹⁾、リュサンドロスはセストスを征服し、全ケルソネソスをアテナイから奪った。402年頃から再び半島へのトラキア人の侵入が始まったので、398年デルキュリダスは大防壁を再建した。コリントス戦争が始まり、小アジアにおけるスパルタの影響力は弱まったが、セストスはスパルタ人の避難場所となっていた。しかし390年までにアテナイはセストスを取り戻し、植民者が存在していた (Isocr. 5.6)。388年イフィクラテスはゲリラ戦を展開して、ケルソネソスをアテナイのため奪回しようとした。しかしアピュドスはスパルタの手に残った。王の平和によって小アジアの外にあるギリシア諸都市は自治独立たることが決定されたため、ケルソネソスもアテナイの支配から自由になった。第二次アテナイ海上同盟が結成された時、半島の諸都市の内でのこの同盟に加盟したのはエライウスだけであった。

(1) ケルソネソスを巡るコトユスとの戦争

384年頃コトユスが即位した時、オドリュサイ王国は再び興隆した。王は自己の王権を確保すため、即位するとすぐに様々な有力勢力と関係を取り結んだ。中でも重要なのがアテナイとの関係であった。アテナイの側はトラキアの木材および鉱物資源に関心を持っていた (Thuc. 4.108.1)。その後の12年間、王は王国の統合に腐心した。

王は王権が安定すると膨張政策に転じ、ケルソネソスの獲得を目論んだ。この政策転換はケルソネソスを巡るアテナイとの戦争を引き起こした。既に375年頃アピュドス人フィリスコス、ギリシア人を裏切ってペルシア人アリオバルザネスのためにケルソネソスを征服していたが、コトユスは彼を暗殺して、365年セストスを占領した。ケルソネソスがコトユスの手に落ちた時、エライウスとクリトテだけはアテナイ側に留まった。

サモス征服の後、365年ティモテウスは反乱したアリオバルザネスを支援するためにケルソネソスへ向かった。その報酬としてアリオバルザネスはセストスとクリトテをアテナイ人に与えた。アテナイは彼にアテナイ市民権を賦与した。全半島をアテナイのために勝ち取る任務を受けていた彼は、

364年にエライウスとその他のポリスを征服した。その後、彼の後任として、エルゴフィロス、メノン、ケフィソドトス、ティモマコス、イフィクラテスらが次々と派遣された¹²²⁾。

359年ティモテオスが将軍としてアムフィポリスおよびケルソネソスへ向かった時、彼は傭兵隊長カリデモスを雇った。しかしカリデモスは二度までティモテオスを裏切り、コトュスに味方した。その時までにはアテナイは恐らく、カルディアを除いて、セストス、クリトテ、エライウスを獲得していたようであるが、セストスはコトュスによって奪還された (Dem. 23.149-160)。

(2) ケルセブレプテスによるケルソネソスの譲渡

360/59年コトュスが暗殺されると、彼の三人の息子たちの間で王位継承戦争が起こった。アテナイはこの好機にすぐさま介入し、王国の三分割を促した (Dem. 23.163-180)。三人の王たちも自己の王位を確保すために、それぞれが後ろ盾を必要としていた。その結果、アマドコスが西部、ペリサデスは中央部、ケルセブレプテスは東部をそれぞれ獲得することとなった¹²³⁾。ケルセブレプテスは自分の姉妹と結婚した傭兵隊長カリデモスを味方に付け (Demosth. 23.129, 163)、357年アテナイと協定を結んだ (Diod. 16.34.4)。ペリサデスは姻戚関係にあるアテナイ人傭兵隊長のアテノドロスの支持を得た。

357年アテナイはオドリュサイ王ケルセブレプテスとの協定によってカルディアを除くケルソネソスの諸都市を第二次海上同盟に加盟させた。カリデモスはコトュスとも親しい関係にあり、その子ケルセブレプテスに影響力を持っていたのである。しかし彼は、アテナイの勢力が存在する間しかその協定を守らなかった。アテナイのケルソネソス支配はまだ不安定であった¹²⁴⁾。

(3) ケルソネソス植民

ディオドロスによれば、「アテナイ人の将軍カレスは、ヘレスポントスへ

向かい、セストスの町を占領し、その成人男子を殺害し、その他の者たちを奴隷に売った。そしてコトュスの子ケルソブレプテスがフィリッポスに対する敵意とアテナイ人に対する友情の故に、カルディアを除くケロネソスにある諸都市をアテナイに手渡した時、アテナイの民衆はそれらの諸都市にクレールーコイを派遣した (Diod.16.34.4)」。アテナイ人はそれに報いて、ケルセブレプテスに市民権と名誉を与えた。

このテキストでは協定締結と植民は同時期のこととされているが、実際には二つの出来事の間には時間的な隔たりがあった。その協定は357/6年に刻まれている (IG.II²126) が、「ケロネソスへの都市建設者たちが所有している三段櫓船 (IG.II²795.133)」が言及されている海軍装備のリストは353/2年に刻まれたものである。植民者はこの年になってはじめて送られたものと思われる¹²⁵⁾。

346年のフィロクラテスの和約によってアムフィポリスを巡る戦争は終わったが、今度はケルソネソスがフィリッポスの脅威に晒され始めた。アイスキネスは次のように訴える。「フィリッポスがマケドニアから出撃して、アムフィポリスをめぐって我々と戦うことはもはやない。しかし、我々のクテーマタであるレムノス、イムプロス、スキュロスをめぐる戦争は既に始まっている。またアテナイ人のものとして一般に認められているケロネソスから我々の市民が立ち去ろうとしている (Aesch.2.72)」。

この脅威に対抗するために、346年ディオペイテスがクレールーコイと共にケルソネソスへ送り込まれた (Dem.8.6)。342年からフィリッポスはトラキア攻撃を開始した。この第二次植民については、デモステネスが341年に書かれた「ケロネーソス情勢について」および同年それに続いて書かれたほぼ同じ内容の「フィリッポスを攻撃する演説—その3—」から明かとなる。まず、領土に関してデモステネスは、ケルソネソスをしばしば「我々のもの」と表現しているが、より明確には「王と全てのギリシア人があなたたち (アテナイ人) のものであると承認しているケロネソス」と叙述している。次に、ディオペイテスによる植民者の性格に関して彼は漠然と呼ぶときには「今ケロネソスにいる者たち」などと表記するが、植民者を「ク

レールーコイ」と表記し、明らかに同じ彼らをまた「傭兵たち」とも言い換えている。さらに、彼らを「兵隊たち」とも呼び、特に民会の決議の後になってやっと招集される市民軍と対比させて「既成の軍隊」とも呼んでいる。

6. カイロネアの戦い

338年カイロネアにおいて反マケドニア戦争が戦われたが、アテナイ・テーベの連合軍はその戦争に敗れた。しかしアテナイに対するフィリッポスの処置は寛大であった。その理由はペルシア遠征を控えたフィリッポスにとってアテナイの艦隊が必要だったからである。アテナイ人は自由とサラミス、サモス、レムノス、イムブロス、スキュロスの海外領土、及びデロスの行政権を保全することが許された。但しケルソネソスは認められなかった¹²⁶⁾。第二次海上同盟は解体され、アテナイはフィリッポスのギリシア同盟のメンバーとなった¹²⁷⁾。

結論

小稿で考察した植民のパターンは、404年を境にして大きく変化する。404年以前においては、「同種族同居」「異種族追放」というパターンは概ね守られていたと言えるだろう。しかし、これはテキスト上の話であって、現実とは異なっていた。キモンは同じイオニア人であるパロス人やタソス人との金鉱山の権益を巡る戦いを対異民族戦争にすり替えた。またトゥリオイやアムフィポリスの植民者は都市建設者を取り替えることによって種族アイデンティティーを変換した。このように種族とは創られ、選び取られ、テキストに書き込まれるものであった。404年以前に二つのパターンが概ね守られたという事実は、アテナイが自らをイオニア人の母市として位置づけていたことを示している。

404年以降このパターンは全く守られなくなる。小アジアのイオニア人はドーリス人であるスパルタに援助を求め、アテナイは同じイオニア人であるサモス人を徹底的に追放した。このことはアテナイがもはやイオニア人の母市である

ことを放棄したことを意味する。種族的紐帯に替わって使われるようになったのは、市民権的紐帯であった。植民者がアテナイ人を名乗り、母市市民も彼らをアテナイ人と呼び、植民市の土地を我々の領土と呼ぶ。また善行をなした外人にその返礼として市民権を賦与した。

この変化は、植民に対するアテナイ人の心的態度の変化を反映していただろう。5世紀においてアテナイはイオニア人の母市であったので、イオニア人ポリスに対しては同族の絆を根拠にそれらを統合し、母市の植民市に対する保護の名目で干渉した。一方、非イオニア人ポリスに対しては異種族として彼らを排除した。アポイキアという言葉は本来「家の分かれ」を意味し、同族の意味合いを含んだ語であった。一方クレールキアは「籤による分配地」を意味し、他者からの獲得物の意味を持つ。これらの語はアテナイの拡大指向を正当化する機能を持っていたと言えるだろう。

一方、4世紀においてアテナイは、諸勢力の内の一つに過ぎなかった。しかも諸勢力の均衡の上でのみ維持される不安定な存在であった。その状況でアテナイはイオニア人の母市であることを止め、一個のポリスとなった。再獲得した領土は、再び切り離されないように母市との一体性をアピールしなければならなかった。その場合、種族的な絆では弱すぎる。植民者はアテナイ市民であり、その領土はアテナイ固有のものであり、そのことは法によって認められているという保証が必要であった。クテーマタとは固有の領土を、エンクテーマタとは外国のポリス内における領土を意味する。これらの語は現状維持を正当化する機能を持っていたと言えるだろう。

註

-
- 1) 濱嶋他『社会学小辞典』「種族」294頁。
 - 2) 高津『ギリシア・ローマ神話辞典』「デウカリオン」158頁。
 - 3) Boeckh, *Staatshaushaltung*, S.499-509; Kirchhoff, *Tributpflichtigkeit*, S. 1-35; *ATL*, p.284-297; Graham, *C&MC*, p.166-210; etc.
 - 4) Beloch, *Bevölkerung*, S.81-83; Busolt, *GG I*, S.467-468; Swoboda, *Kleru-*

- chien, S.28-32; Ed. Meyer, *Forschung*, S.182-183; Ed. Meyer, *GdA* III.1, S. 18-21; Schulthess, *Κληροῦχοι*, S.814-832; Ehrenberg, *Kolonisation*, S. 11-32; Gauthier, *clérouques*, p.64-88; Busolt, *GG* III.2, S.1032-1033; II, S. 445-449; III¹, S.411; Gomme, *HCT* II. 50. 2, p.329; Brunt, *Settlements*, p. 71-92; Schuller, *Herrschaft*, S.13-32; Figueira, *A&A*, p.10; p.19-20; p.39; p. 47-48; etc.
- 5) 前野「[ΤΑΙ]Σ ΑΠΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ[ΙΣ]」34-52頁。同「レームノス、イムプロス、スキュロス植民」49-70頁。同「ケルソネーソス、ナクソス、エウポイア植民」46-65頁。但し、これらの論文については、「アポイキアとクレールーキア 一碑文史料IG.I²37の分析一」と改題してまとめる予定である。
- 6) Figueira, *A&A*, *Patronal Colonization* p.132-142, *Athens and Regional Expansion* p.142-160.
- 7) クロノロジーについては、Fritz Schachermeyr, *Peisistratos*, S.170-172. in : *RE*.
- 8) エーゲ海北岸の植民に関しては、馬場「トラキア」に依拠した。馬場「トラキア」13頁
- 9) 馬場「トラキア」12頁
- 10) *DKP*, s.v. *Pangaion*.
- 11) 馬場「トラキア」16頁
- 12) Büchner, *Chersonesos* 1), S.2246. in : *RE*.
- 13) *DKP*, s.v. *Apsinthioi*.
- 14) *DKP*, s.v. *Lampsakos*.
- 15) 桜井「キモン」379頁
- 16) *DKP*, s.v. *Sigeion*; Ehrenberg, *Kolonisation*, S.222-223.
- 17) Fritz Schachermeyr, *Peisistratos*, S.184-185. in : *RE*.
- 18) Schuller, *Herrschaft*, S.16. Amn.40.
- 19) Cargill, *Settlements*, p.2.
- 20) Fredrich, *Lemnos*, S.1929. in : *RE*.

- 21) Figueira, *A&A*, p.144.
- 22) 高津『ギリシア・ローマ神話辞典』「ニーソス」
- 23) 「私は知る。そしてイアオニアの最も古き地の斬り殺されるのを眺める時、私の心の奥底に苦痛が横たわる」(Aristot.*Ath.Pol.*5.2)。
- 24) *Tod.*11; *M&L.*14; *IG.I³*1; Figueira, *A&A*, p.134; Cargill, *Settlements*, p. 2-4, 205-206.
- 25) 一般には446年説が受け入れられている。例えばMeiggs, *Empire*, p.566.しかし怒りというモチーフからすれば506年の植民に関する記述であるように思われる。これを446年とする根拠はない。
- 26) Myres, *Herodotos*, p.12-13.
- 27) Easterling / Knox, *Greek Literature*, p.427-429.
- 28) クロノロジーについては、*ATL* III, p.175-179, 298-300.
- 29) 馬場「デロス同盟」18-29頁。
- 30) キモンの経歴については、桜井「キモン」375-378頁。
- 31) マルケリーノス作「トゥーキュディテース伝」小西晴雄訳「トゥーキュディテース」世界古典文学全集11、筑摩書房、1971年、317-327頁
- 32) Hornblower, *Commentary* II, p.334-335.
- 33) *PA*10210, *stemma*, p.91; Davies, *Families*, IV(C)p.233-234.
- 34) Büchner, Eion, S.2116-2117. in : RE; Hornblower, *Commentary* I, p. 149-150.
- 35) *DKP*, s.v. Paros.
- 36) 馬場「トラキア」14頁。
- 37) 馬場「トラキア」14頁。
- 38) 馬場「トラキア」30頁。
- 39) 馬場「トラキア」27-29頁。
- 40) 馬場「トラキア」27-28頁。
- 41) 馬場「トラキア」28-29頁。
- 42) 馬場「トラキア」31頁。
- 43) 馬場「トラキア」27頁。

- 44) Fredrich, Skyros, S.690-691, in : *RE*.
- 45) Miller, j., Dolopes, S.1289-1290, in : *RE*.
- 46) Hornblower, *Commentary* I, p.150.
- 47) 飯尾訳、パウサニアス【ギリシア案内記】1.15.3。
- 48) Hirschfeld, Amphipolis, S.1949-1952. in : *RE*.
- 49) Hornblower, *Commentary* I, p.155.
- 50) その移民は雑多であった。Diod.11.70.5;cf. Diod.11.70.1.
- 51) キモンとペリクレスの比較については桜井「キモン」372-375頁。
- 52) Rhodes, *Commentary* , p.339.
- 53) De Ste Croix, *P. War*, p.180-183, 196.
- 54) Trowbridge, M. L. / Oldfather, Wm. A., Naupaktos, S.1935. in : *RE*.
- 55) Oldfather, Lokris, S.1135-1288. in : *RE*.
- 56) *ATL* III, Chronological Table, p.298-300.
- 57) *ATL* III, p.290-293; Graham, *C&MC*, p.174-188; Brunt, *Settlement*, 77-80; Meiggs, *Empire*, 424-425. cf.Figueira, *A&A*, p.254f. この問題の整理はCargill, *Settlements*, p.5-6.
- 58) Herbst, H., Naxos, S.2079-2095. in : *RE*.
- 59) コドロス伝説については、前野「帝国主義」。
- 60) *ATL* III. p.287.
- 61) Hirschfeld, Andros, S.2169-2171. in : *RE*.
- 62) *ATL* III. p.287.
- 63) Willrich, Euboia, S.851-858. in : *RE*.
- 64) エウボイアとナクソスに1000人 (Diod.11.88.3)、ナクソスに500人 (Plut. *Per.*11.5) が送られたから、エウボイアへは500人が送られた計算になる。
- 65) *ATL* III, Chronological Table p.299.
- 66) Erxleben, Kleruchien, S.85-86; Meiggs, *Empire*, p.123;Schuller, *Herrschaft*, S.23.
- 67) De Ste. Croix, *P. War*, p.197.
- 68) *ATL* III, Chronological Table p.300.

- 69) τὸς δὲ χσένος τὸς ἐν Χαλκίδι, ἡόσοι οἰκόντες μὲ τελῶσιν Ἰθέναζε, καὶ εἴ τοι δεδοται ἠυπὸ τὸ δέμο τὸ Ἰθεαίον ἀτέλεια, τὸς δὲ ἄλλος τελεῖν ἐς Χαλκίδα, καθάπερ ἡοι ἄλλοι Χαλκιδέες.
- 70) *ATL* III. p.289-290.
- 71) *DKP*, s.v., Bisaltai.
- 72) *M&L*.49, p.132.
- 73) *M&L*.49, p.133.
- 74) De Ste. Croix, *P. War*, p. 196.
- 75) *DKP*, s. v. Sybaris.
- 76) Ehrenberg, Thurii, p.150-155.
- 77) Ehrenberg, Thurii, p.159.
- 78) Schuller, *Herrschaft*, S.29.
- 79) Meiggs, *Empire*, p.197-199.
- 80) Figueira, *A&A*, Table 4: Athenian Colonization, p.217-221.
- 81) Ruge, Sinope, S.252-255. : in *RE*.
- 82) Figueira, *A&A*, Table 4: Athenian Colonization, p.217-221.
- 83) Hirschfeld, Amisos, S.1839-1840. in : *RE*.
- 84) *ibid.*
- 85) Figueira, *A&A*, Table 4: Athenian Colonization, p.217-221.
- 86) Ruge, Astakos, S.1774-1775. in : *RE*.
- 87) 久保『戦史』(上) 394頁、註236.2。
- 88) *PA*.8674.
- 89) 高島「アリストファネス」 27-29頁。
- 90) *DKP*, s.v. Kleon, Thukydidēs.
- 91) 伊藤「古典期アテネ」 54頁。 = Ehrenberg, *Greek State*, p.31.
- 92) Gauthier, clérrouques, p.64-65; Brunt, Settlement, p.71-92.; Figueira, *A&A*, p.10, 19-20, 39, 47-48; Hornblower, *Commentary* I, p.440-441.
- 93) *ATL*, III. p.321-325; De Ste. Croix, *P. War*, p.329.
- 94) *DKP*, s.v.Poteidaia; *M&L*.66.

- 95) アイオリス人はポイオティアやテッサリア方面からの移住者であった。
- 96) Keil, J., *Notion*, S.1075-1076. in :*RE*.
- 97) Beloch, *Bevölkerung*, S.81-83; Beloch, *GG I* S.467-468.
- 98) Swoboda, *Kleruchien*, p.28-32.
- 99) Gauthier, *clérouques*, p.64-65; Hornblower, *Commentary I*, p.440-441.
- 100) *DKP*, s.v.Torone.
- 101) *DKP*, Skione.
- 102) Schwenk, *Athens*, p.10.
- 103) Schwenk, *Athens*, p.15.
- 104) Ruzicka, *Eastern*, p.113.
- 105) レムノス、イムプロス、スキュロスのアテナイにとっての重要性は、329/8年の初穂の会計文書から窺うことができる (IG.II²1672, 275-7, 297)。そこには、アッティカの十部族の他に、サラミス、スキュロス、イムプロス、レムノスのミュリナとヘファイスティアから送られた初穂が記されているが、ミュリナとヘファイスティアからだけの初穂の量が総量に占める割合は、大麦の場合41.6%、小麦の場合55.1%に当る。
- 106) 史料は、前野「4世紀の市民権」50-51頁を参照。
- 107) Ruzicka, *Eastern*, p.120.
- 108) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.287.
- 109) Geisau, *Samos*, S.2215, in : *RE*.
- 110) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.273-304.
- 111) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.288; Shipley, *Samos*, p.140-142, 157-158; Cargill, *Settlements*, p.17-21, 34-40.
- 112) Habicht / Hallof, *Buleuten*, S.273-234.
- 113) Heskell, *Macedonia*, p.167-170.
- 114) Heskell, *Macedonia*, p.172-173, 175.
- 115) Heskell, *Macedonia*, p.175-177.
- 116) Schwenk, *Athens*, p.26.
- 117) Heskell, *Macedonia*, p.178-179, 182-183.

- 118) Heskell, Macedonia, p.182.
- 119) Heskell, Macedonia, p.170.
- 120) Heskell, Macedonia, p.170-171; *DKP*, s.v., Odrysai.
- 121) 404年から377年までのケルソネソスについては、Cargill, *Settlements*, p. 9-12; Ruzicka, Eastern, p.110-115.
- 122) 365年から301年までのケルソネソスについては、Cargill, *Settlements*, p. 23-31.
- 123) Heskell, Macedonia, p.171.
- 124) Cargill, *Settlements*, p.25.
- 125) Cargill, *Settlements*, p.25-26.
- 126) あるいは存続したかも知れない。Cargill, *Settlements*, p.29-31.
- 127) Schwenk, Athenes, p.30-33.

参考文献および略記号一覧

碑文史料

IG = *Inscriptiones Graeca* (Berlin, 1873)

FGH = Felix Jacoby, *Die Fragmente der Griechischen Historiker* (Berlin / Leiden, 1923-1958)

M&L = Meiggs. R./ Lewis.D. M., *A Selection of Greek Historical Inscriptions* (Oxford, 1969)

SEG = *Supplementum Epigraphicum* (1923-)

Tod = Tod. M. N., *A Selection of Greek Historical Inscriptions* (Oxford, 1948)

文献史料

Aelian. = Aelianus, *Varia Historia*

Aesch. = Aeschines

Andoc. = Andocides

Aristoph. = Aristophanes

Aristot. = Aristoteles, *Ath.Pol.=Athenaion Politeia* (often attributed to Aristot.) , *Pol=Politics*

Athen. = Athenaios, *Deipnosophists*

Dem. = Demosthenes

Diod. = Diodoros Siculus, *Library of History*

Diog.Laert. = Diogenes Laertios, *Lives of Eminent Philosophers*

Hdt. = Herodotus, *Persian Wars*

Isocr. = Isocrates

Lysias. = Lysias

Nepos. = Cornelius Nepos, *Cimon*

Paus. = Pausanias, *Description of Greece*

Plut. = Plutarchos, *Cim=Cimon, Per=Pericles, Lys=Lysandros, Sol=Solon,*

Thes=Theseus

Strab. = Strabo, *Geography*

Thuc. = Thucydides, *Peloponnesian War*

Xen. = Xenophon, *Hell=Hellenica*, *Mem=Memorabilia*

雑誌および辞典

AM = *Die Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Athenische Abteilung*

PA = Kirchner, J., *Prosopographia Attica* (Berlin, 1901-1903)

RE = Pauly, A. / Wissowa, G./ Knoll, G., *Realencyclopaedie der Classischen Altertumswissenschaft* (Stuttgart, 1894-1980)

欧文参考文献

ATL = Meritt, B. D. / Wade-Gery, H. T. / McGregor, M. F., *The Athenian Tribute Lists* I (1939) , II (Princeton, 1949) , III (Princeton, 1950) .

Beloch, *Bevölkerung* = Beloch, K. J., *Bevölkerung der griechisch-römischen Welt* (Leipzig, 1886) .

Beloch, *GG* = Beloch, K. J., *Griechische Geschichte* I (Strassburg, 1893) .

Boeckh, *Staatshaushaltung* = Boeckh, A., *Die Staatshaushaltung der Athener: herausgegeben und Anmerkungen begleitet von Max Fränkel*, 18. Von den Kleruchien (Berlin, 1886³) 499-509. 1850², 1817¹.

Brunt, *Athenian Settlements* = Brunt, P. A., "Athenian Settlements Abroad in the Fifth Century B.C.", in : E. Badian (ed.) , *Ancient Society and Institutions: Studies Presented to VICTOR EHRENBERG on His 75th Birthday* (Oxford, 1966) 71-92.

Busolt, *GG* = Busolt, G., *Griechische Geschichte* III. 2, (Ghota, 1904) , II (Ghota, 1895) III¹ (Ghota, 1897) .

Cargill, *IG.II²1* = Cargill, J., "IG.II²1 and the Athenian Kleruchy on Samos", *GRBS* 24, (1983) 326-332.

- Cargill, *Athenian Settlements* = Cargill, J., *Athenian Settlements of the Fourth Century BC* (Leiden / New York / Köln, 1995) .
- Davies, *Families* = Davies, J. K., *Athenian Propertied Families 600-300 B.C.* (Oxford, 1971)
- De Ste. Croix, *P. War* = De Ste. Croix, G. E. M., *The Origins of the Peloponnesian War* (London, 1972) .
- Easterling / Knox, *Greek Literature* = Easterling, P. E. / Knox, B. M. W. (ed) , *The Cambridge History of Classical Literature I Greek Literature* (Cambridge, 1985) .
- Ed. Meyer, *Forschung* = Ed. Meyer, *Forschung zur alten Geschichte* II (Halle, 1899) .
- Ed. Meyer, *GdA* = Ed. Meyer., *Geschichte des Altertums* III. 1 (Stuttgart / Berlin, 1915) .
- Ehrenberg, *Thurii* = Ehrenberg, V., “The Foundation of Thurii”, *AJP* 69 (1948) 149-17.
- Ehrenberg, *Kolonisation* = Ehrenberg, V., “Zur älteren athenischen Kolonisation”, *Eunomia : Studia Graeca et Romana* I (1939) 11-32. = *id. Aspects of the Ancient World : Essays and Reviews* (Oxford, 1946) 116-143. = *id. Polis und Imperium* (Zürich / Stuttgart, 1965) 221-244.
- Ehrenberg, *Colonization* = Ehrenberg, V., “Thucydides on Athenian Colonization” in: *Polis und Imperium*, 245-253.
- Figueira, *Athens and Aigina* = Figueira, Th. J., *Athens and Aigina in the Age of Imperial Colonization* (Baltimore, 1991) .
- Fol / Marazov, *Trace* = Fol, A. / Marazov, I., *Trace and the Thracians*, (New York, 1977) .
- Gauthier, *clérouques* = Gauthier, Ph., “Les clérouques de Lesbos et la colonisation athénienne au V^e siècle”, *REG* 79 (1966) 64-88.
- Gauthier, *ΞENOI* = Gauthier, Ph., “Les ΞENOI dans les textes athéniens de la seconde moitié du V^e siècle av. J.-C.” *REG* 84 (1971) 44-79.

- Gomme, *HCT* = Gomme, A. W., *A Historical Commentary on Thucydides* II. 50. 2, (Oxford, 1956) .
- Graham, *Colony and Mother City* = Graham, A. J., *Colony and Mother City in Ancient Greece* (Manchester, 1964) .
- Habicht / Hallof, Buleuten und Beamte = Habicht, C. / Hallof, K., "Buleuten und Beamte der Athenischen Kleruchie in Samos". *AM* 110 (1995) 273-304.
- Hall, *Ethnic Identity* = Hall, J. M., *Ethnic Identity in Greek Antiquity* (Cambridge, 1997) .
- Hamilton, Sparta = Hamilton, C. D., "Sparta", in: Tritle, L.A. (ed) ., *The Greek World in the Fourth Century* (London / New York, 1997) 41-65.
- Heskel, *North Aegean Wars* = Heskel, J., *The North Aegean Wars, 371-360 BC, the Struggle over Amphipolis and Chersonese*, Historia Einzelschrift (Stuttgart, 1996) .
- Heskel, Macedonia = Heskel, J., "Macedonia and the North, 400-336". in : *The Greek World in the Fourth Century* (London / New York, 1997) 167-188.
- Hornblower, *Commentary* = Hornblower, S., *A Commentary on Thucydides* I (Oxford, 1991) , II (Oxford, 1996) .
- How, *Commentary* = How, W. W. & Wells, J. A., *A Commentary on Herodotus* Vol.I (Books I-IV) , Vol.II (Books V-IX) (Oxford / New York, 1912) .
- Kirchhoff, Tributpflichtigkeit = Kirchhoff, A., "Über die Tributpflichtigkeit der attischen Kleruchien", *Philologische und historische Abhandlungen der königlichen Akademie der Wissenschaft zu Berlin* (1873) 1-35.
- Meiggs, *Empire* = Meiggs, R., *The Athenian Empire* (Oxford, 1972) .
- Myres, *Herodotos* = Myres, John L, *Herodotos Father of History* (Oxford, 1953) .
- Rhode, *Commentary* = Rhode, P. J., *A Commentary on the Aristotelian Athenaion Politeia* (Oxford, 1981) .

- Ruzicka, Eastern Greek = Ruzicka, S., "The Eastern Greek World", in :
 Tritle, L. A. (ed) ., *The Greek World in the Fourth Century* (London /
 New York, 1997) 107-165.
- Schuller, *Herrschaft* = Schuller, W., *Die Herrschaft der Athener im ersten
 attischen Seebund* (Berlin, 1974) .
- Schulthess, *Κληροῦχοι* = Schulthess, O., "Κληροῦχοι", in : *RE* (Stuttgart,
 1966) 814-832.
- Schwenk, Athens = Schwenk, Cynthia., "Athens" in : Tritle, L. A. (ed) .,
The Greek World in the Fourth Century (London / New York, 1997)
 8-40.
- ShIPLEY, *Samos* = Shipley, G., *A History of Samos 800-188 B.C.* (Oxford,
 1987) .
- Swoboda, Kleruchien = Swoboda, H., "Zur Geschichte der attischen Kleru-
 chien", *Serta Harteliana* (1896) 28-32.
- Tritle, *Greek World* = Tritle, L. A. (ed) ., *The Greek World in the Fourth
 Century* (London / New York, 1997) .

邦語参考文献

- 桜井「キモン」= 桜井万里子「「雅量の人」・キモン —そのエートスのアテナイ民主政における位置—」桜井万里子『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年。371-389頁。
- 馬場「トラキア」= 馬場恵二「前六、五世紀のエーゲ海北岸のトラキアとギリシア世界」『駿台史学』69、1987年、1—34頁。
- 馬場「デロス同盟」= 馬場恵二「デロス同盟とアテナイ民主政」『岩波講座世界歴史』古代2、1969年、pp16-44頁
- 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編、新版「社会学小辞典」有斐閣1997年、「種族」294頁。
- 前野「[ΤΑΙ]Σ ΑΙΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ[ΙΣ]」= 前野弘志「[ΤΑΙ]Σ ΑΙΟΙΚΙΑΙΣ ΚΑΙ ΚΥΕΡΟΧΙΑ[ΙΣ]—クレールーキア概念の再検討 碑文

- 史料IG.I^o237の解釈をめぐる一」『史学研究』191、1991年、34-52頁。
- 前野「レームノス、イムプロス、スキュロス植民」= 前野弘志「レームノス、イムプロス、スキュロス植民 —「クテーマタ型植民」の検討—」『史学研究』195、1992年49-70頁。
- 前野「ケルソネーソス、ナクソス、エウボイア植民」= 前野弘志「ケルソネーソス、ナクソス、エウボイア植民 —エンクテーマタ型植民の検討—」『西洋史学報』20、1993年46-65頁。
- 前野「前4世紀の市民権」= 前野弘志「前4世紀におけるアテナイ植民者の市民権「レームノス人」から「レームノスに住むアテナイ人」へ」『史学研究』212、1996年、49-66頁。
- 前野「帝国主義」= 「アテナイ帝国主義と植民—イオニア人の母市アテナイ—」『季刊軍事史学』33、1、1997年7~25頁。
- 高津「ギリシア・ローマ神話辞典」= 高津春繁「ギリシア・ローマ神話辞典」岩波書店1960年。
- 高島「アリストファネス」= 高島純夫「アリストファネス喜劇と世論」、『西洋史研究』26、1997年、27-29頁。
- 伊藤「古典期アテネ」= 伊藤貞夫、「古典期アテネの政治と社会」、東京大学出版会、1982年、54頁。

古典邦語訳

- アリストテレス（村川堅太郎訳註）『アテナイ人の国制』岩波文庫、1980年。
- アイリアノス（松平千秋・中務哲郎訳）『ギリシア奇談集』岩波文庫、1989年。
- アテナイオス（柳沼重剛訳）『食卓の賢人たち』岩波文庫、1992年。
- ストラボン（飯尾都人訳）『ギリシア・ローマ世界地誌』龍溪書舎、1994年。
- ディオゲネス・ラエルティオス（加来彰俊訳）『ギリシア哲学者列伝』上、中、下、岩波文庫、1984-1994年。
- デモステネス（田中美知太郎）『ケロネソス情勢についての演説』（『ギリシア思想家集』世界文学大系、筑摩書房、1965年）
- トゥキディデス（久保正彰訳）『戦史』上、中、下、岩波文庫、1966-67年

パウサニアス（飯尾都人訳）『ギリシア案内記』龍溪書舎、1991年。

プルタルコス（河野与一訳）『プルターク英雄伝』1-12、岩波文庫、1952-1956年。

プルタルコス（村川堅太郎編）『プルタルコス』（世界古典文学全集）、筑摩書房、1966年。

ヘーロドトス（松平千秋訳）『歴史』上、中、下、岩波文庫、1971-1972年。

アテナイ植民活動 561/0~338

年代	事項	先住民	処置	規模	備考
561/0	ペイシストラトスの僭主政				
c. 561/0~ 493	ケルソネソス植民	(ドロンコイ人)	招待、同居	1000?	
c. 550/49~?	ライケロス植民	(マケドニア人)	招待、同居	?	
? ~ c. 539	ストリュモン植民	(トラキア人)	招待、同居	?	
c. 530~ 510/9	シゲイオン植民	(アイオリス人)	戦争、追放	?	
c. 505~ 493	レムノス植民	(ペラスゴイ人)	戦争、追放	?	
c. 505~ 493	イムブロス植民	(ペラスゴイ人)	戦争、追放	?	
508/7	クレイステネスの改革				
c. 510~ 318	サラミス植民	(ドーリス人)	戦争、追放	500?	
506~ 490	カルキス植民	(イオニア人)	戦争、同居	4000or2000	
500	ペルシア戦争 (~479)				
478/7	アロス同盟 (~404)				
476/5~404?	スキュロス植民	(ドロベス人)	戦争、追放	?	
475~404?	エイオン植民	(ペルシア人)	戦争、追放	?	
465~465/4	エンネアホドイ植民	(エドノス人)	戦争、追放	10000	雑多な入植者
460	第一次ペロポネソス戦争 (~446/5)				
c. 455~404	ナウパクトス植民	(ドーリス人)	戦争、追放	?	メッセニア人を入植
c. 450~404	レムノス植民?		追加、同居	?	
c. 450~404?	ナクソス植民	(イオニア人)	?、同居	500	
c. 450~404?	アンドロス植民	(イオニア人)	?、同居	250	
c. 447/6~404	イムブロス植民?		追加、同居	?	
c. 447/6~405	ケルソネソス植民	(ギリシア人)	支援、同居	1000	

c.447/6~437?	ブレア植民	(ビザルタイ人)	?	同居	1000	
447/6~	エウボイア植民	(イオニア人)?	?	同居	500	
446/5~404	ヘステイア植民	(エロピア人)	戦争、追放		2000or1000	
446/5~411	カルキス植民	(イオニア人)	戦争、同居		1000	
446/5~411	エレトリア植民	(イオニア人)	戦争、同居		?	
446/5	三十年の平和 (~431)					
446/5~	トゥリオイ植民	(アカイア人)	支授 同居		?	雑多な入植者
444/3~414	トゥリオイ植民	(アカイア人)	?、追放		?	
c.440~?	アスタコス植民	(ドーリス人)	?、同居		?	
c.435~?	シノベ植民	(イオニア人)	支授、同居		600	僭主から解放
c.435~?	アミノス植民	(イオニア人)	?、同居		?	
437/6~424/3	アムファイポリス植民	(エドノス人)	戦争、追放		?	雑多な入植者
431	第二次ペロポネソス戦争(404)					
431~405	アイギナ植民	(ドーリス人)	戦争、追放		?	424年に処刑
430	疫病の大流行					
429/8~404?	ポテイダイア植民	(ドーリス人)	戦争、追放		1000	
427~?	ノテイオン植民	(イオニア人)	支授、解放		?	コロフォン人を入植
427~427/6	レスボス植民	(アイオリス人)	戦争、処刑・奴隷			
			首謀者だけの処刑		2700	
			和解			植民者の撤退
424/3	アムファイポリスを巡るスパルタとの戦争					
423	トロネ (植民)	(イオニア人)	戦争、捕虜・奴隷			植民なし
421~?	スキオオネ植民	(アカイア人)	戦争、処刑・奴隷		?	ブラタイア人を入植

416~405	メロス植民	(ドーリス人)	戦争、処刑・奴隷	500
405	アイゴスボタモイの海戦			
404	パロポネソス戦争の終結			
	サラミスを除く全植民市の喪失			
395	コリントス戦争 (~387/6)			
c.394	レムノス・イムプロス・スキュロスの復讐			
387/6	王の平和			
387/6	レムノス・イムプロス・スキュロスの承認			
378/7	第二次アテナイ海上同盟の結成 (~338)			
378/7	エンクテーマタの放棄			
371	アムファイポリスを巡るオリュントスとの戦争			
366/5~	サモス植民	(イオニア人)	戦争、同居	?
365	ケルソネソスを巡るコトュースとの戦争			
361~356	ポテイダイア植民	(ドーリス人)	支援、同居	?
361/59~	サモス植民		追加、同居	?
357	同盟市戦争 (~355)			
357	ケルセブレプテスによるケルソネソスの譲渡			
356	アムファイポリスを巡るフィリッポスとの戦争			
353/2~	セストス植民	(アイオリス人)	戦争、処刑・奴隷	?
352/1~322	サモス植民		追加、追放	2000
346~338	ケルソネソス植民	(ギリシア人)	支援、同居	?
338	カイロネイアの戦い			
	ケルソネソスの喪失、レムノス・イムプロス・スキュロスの保持			実際には6000~12000

索引

- [あ]
- アイオリス 1,7,10,60,62
アイギナ 38,50,55,56,67,69,78
アイデンティティ 2,14,86
アカイア 1,29,51,68
アスタコス 38,54
アビュドス 7,72,83
アプシントス 7,8,48
アミソス 38,54
アマフィポリス 20,24,28,34,38,
50,51,52,58,66,79,80,81,
82,84,85,86
アルギロス 49,52
アンドロス 37,42,66
- [い]
- イムプロス 10,11,40,41,70,72,
73,74,75,76,85,86
イリオン 10
イオニア 1,2,7,8,14,16,18,22,4,
41,42,43,47,51,54,62,67,
71,72,74,77,78,86,87
- [え]
- エイオン 6,17,18,20,21,22,23,
24,25,26,27,28,35,49,52
エウボイア 14,15,17,28,30,37,
38,42,43,44,45,47,51,76
疫病 57,59,62
エケイドロス 6
- セスノセントリズム 11
エドノス 6,34,51,66
エライウス 7,12,48,83,84
エリート 3,13,28
エレトリア 6,38,43,44,46,47
エンクテーマタ 3,76,87
エンネアホドイ 20,33,34,35,36,
49
- [お]
- 表向きの理由 18,25,28
オレオス 43,45
オロロス 9,18,19,24
- [か]
- カリュストス 17,42,43
カルキス 13,15,16,38,43,44,45,
46,47,64
カルディア 7,84,85
- [き]
- キモン 4,8,9,10,12,17,18,19,20,
21,24,25,26,27,28,29,30,
31,32,33,35,36,39,48
饗応 7,8,65
金 6,9,20,21,22,23,25,28,
33,35,38,58,
- [く]
- クテーマタ 3,75,87
クリトテ 7,77,83
クレオン 3,50,53,57,58,63,65

- [け]
ケルソネソス 7,8,9,10,12,16,18,
26,35,36,48,73,83,84,85,86
- [こ]
コドロス 40
コノン 72,77
- [さ]
サパイオイ人 9,18
サラミス 13,14,16,64,70,86
- [し]
シゲイオン 10
シノペ 38,53,54
種族 1,2,3,8,10,14,29,47,51,75,
85,86
種族イデオロギー 2,71,78
シュバリス 37,51
神託 7,8,12,13,14,31,39
人口 28,58,59,66,70
- [す]
スカプテヒュレ 19,34
スキオネ 59,66,67,68
スキュロス 17,28,29,30,33,70,
72,73,74,76,85,86
ストリュモン 6,17,18,20,21,22,
23,26,34,49,51,52,79,82
- [せ]
セストス 7,48,72,77,83,84,85
- [た]
タソス 9,18,22,23,24,25,33,34,
35,38,86
- 大パンアテナイア祭 49
- [て]
ティモテオス 3,69,77,81,83
テセウス 30,31,32,33
テュレニア人 11,13
デルフォイ 7,8,12,29,31,39
デロス 2,17,19,34,41,42,48,55,
59,77,79,86
- [と]
トゥリオイ 37,50,51,86
都市建設者 49,51,52,85,86
トラキア 5,6,7,8,9,17,18,19,21,
22,23,24,26,33,34,35,36,
37,41,48,49,51,52,57,66,
82,83,85
トロイ戦争 26,27,47
トロネ 59,65,66,67,69
ドロンコイ 7,8,9,48
ドーリス 1,2,14,27,32,40,55,59,
68,86
- [な]
ナウパクトス 38,39,40,47
ナクソス 6,7,17,37,41,42,76
- [に]
2ムナ 15,64,65,66
- [の]
ノティオン 59,60,61,62,63

[は] 13,17,18,20,24,25,28,32,
 パクテュエ 7 33,35,48,52
 パトロネジ 36 ミレトス 7,51,54
 パロス 6,22,23,24,25,26,33,34,
 35,42,86 民衆 4,13,15,28,31,33,37,53,85
 パンガイオン 5,21,22,34,82 [め]
 [ひ] メテュムナ 60,63,76
 ヒスティアイア 45,69 メディア人 17,27,32
 ビザルタイ人 37,49 メロス 59,68,69
 [ふ] [ゆ]
 フェニキア 6,9,18,32 優勝者 8
 プレア 37,49,50,60 [ら]
 [へ] ライケロス 5,6
 ヘスティアイア 38,42,43,44,45,
 67 [れ]
 ヘファイスティア 12,75 レスポス 7,59,60,61,63,64,65,
 66,73
 ヘゲシピュレ 9 レムノス 10,11,12,13,16,29,40,
 41,57,64,70,72,73,74,76,
 ペイシストラティダイ 4,8,10,19 85,86
 ペイシストラトス 3,4,5,6,7,8,9,
 10,23,58
 ペラスゴイ人 11,12,66
 ペリクレス 3,16,36,37,43,44,45,
 48,51,52,53,55,58,77
 [ほ]
 ホメロス 14,26,29,68
 ポティダイア 38,55,59,60,79,81
 [み]
 ミュリナ 12,75
 ミルティアデス 3,7,8,9,10,12,

〈レジユメ〉

Athenian Colonization and Ethnic Ideology

Ethnic identity which Athens used has three functions: One is to integrate those who has the same belief that they are the Ionians. Two is to eliminate those who are non Ionians. Three is to justify the policy of Athenian colonization as the metropolis of the Ionians. These three functions are called here "ethnic ideology". However it is necessary to notice that the ethnic identity is an imagined belief created by somebody on purpose with a great effort.

The purpose of this paper is to overlook how the Athenians the ethnic ideology for her colonization had used from 561 to 338 B.C. The outcome of this discussion also would provide us with a key to solve a so-called Apoikia -Klerouchia problem. The outline of this paper is as follows:

(1) Time of Peisistratos: According to the strategies of the factional leaders in Attica, there were two main streams of Athenian colonization. The one is the north Aegean colonization. The other is the around Attica colonization. All the colonies in this time were lost by the Persian Wars except for Salamis, which is the first case that the ethnic ideology was introduced into.

(2) Time of Cimon: Cimon, who was born in the Chersonese as a son between Miltiades and a daughter of Oloros the king of Thracia, sought to recover the north Aegean colonies not only for Athens out also rather for himself. Thucydides, who is a kinsman of Cimon's family, suggested that the ostensible cause of the establishment of the Delian League was to fight against the Persians.

(3) Time of Pericles: In his time a great number of Athenian colonies were founded. The two patterns of conization were clearly seen. The one is a colony founded by expelling non Ionic residents, the other is by sending colonists into Ionic residents.

(4) Time of Cleon: The plaque changed the situation. Loss of population and deterioration of moral made her colonization more serious. It was almost only one pattern to execute all the non Ionic residents and to sell their wives and children as slave. Athens, however, could not send out their colonists.

(5) Time of Timotheos: By the end of the Peloponnesian War, almost all of the Athenian colonies were again lost. Therefore the main problem of Athens of this century was to recover the lost colonies. Athens, however, was no longer strong enough to achieve this purpose. Athens obviously gave up the ethnic ideology. They could maintain her overseas territories only by a recognition of the Persian King. Therefore the Athenians should have claimed that the territories were indispensable part of Attica where the Athenian citizens lived.

hlroshi.maeno@literae-humaniores.oxford.ac.uk

平成10年12月18日 印刷
平成10年12月25日 発行 (非売品)

編集兼発行者 広島大学文学部
〒739-8522
東広島市鏡山一丁目2-3

印刷者 鯉城印刷株式会社
〒730-0805
広島市中区十日市二丁目8-2